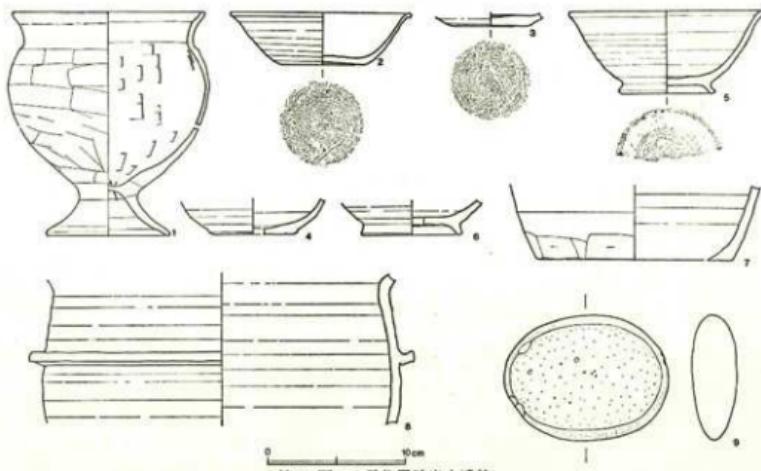


第130図 3号住居跡

器種	番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
須恵器 杯	2	口径 13.1 器高 3.8 底径 6.1	体部下半が張り、口唇部は外側に めくれるよう外反する。底部は 上げ底。	ミズビキ成形。底部回転糸切り。 灰、黒色を呈し焼成良。	%残
杯	3	底径 5.7	体部下半が内凹し曲線的。底部の	ともに底部回転糸切り。3は黒灰	3 底部
	4	底径 5.9	みぶ厚なつくり。	色、茶褐色。4は灰色。焼成良。	2
高台付 杯	5	口径 14.1 器高 6.0 底径 6.4	体部は内凹気味に立ち上がり口唇 部ちくでわずかに外反する。口 唇部は丸味をもつ。高台はハの字	ともに底部回転糸切り。貼付高台 クロ調整痕を明瞭にこす。5 は灰、茶灰色。6は淡茶灰色。焼 成不良。軟質。	
	6	底径 7.3	状に開く。6は直立にちかい。		
甕	7	底径 14.2	器壁が7mmとうすい。	胴部下端は面取り的なヘラ削りが 加えられている。灰黒色。	
羽釜	8		口縁外反。鋲は角頭状で上下端と も稜をもつ。高さ1.1cm。端部幅 0.7cm。	灰色。気泡のぬけた小孔が内外面 に目立つが焼成良好堅緻。	小片からの復 元実測。
磨石	9	11.9×9 厚さ 3.2	表面とも研磨による磨耗が認め られる。長軸の一方端には敲打痕 がかすかに観察される。	重さ522g。安山岩製。	



第131図 3号住居跡出土遺物

## 4・5・6号住居跡（第132図）

調査区南端に位置しており他の住居跡群と離れて検出された。3軒が東西方向に重複しており、その南半は遺憾ながら調査直前土採により失っていた。残存する地形からすると本跡以南は傾斜が急になっているため、集落の南限は本跡群周辺にあると考えられる。

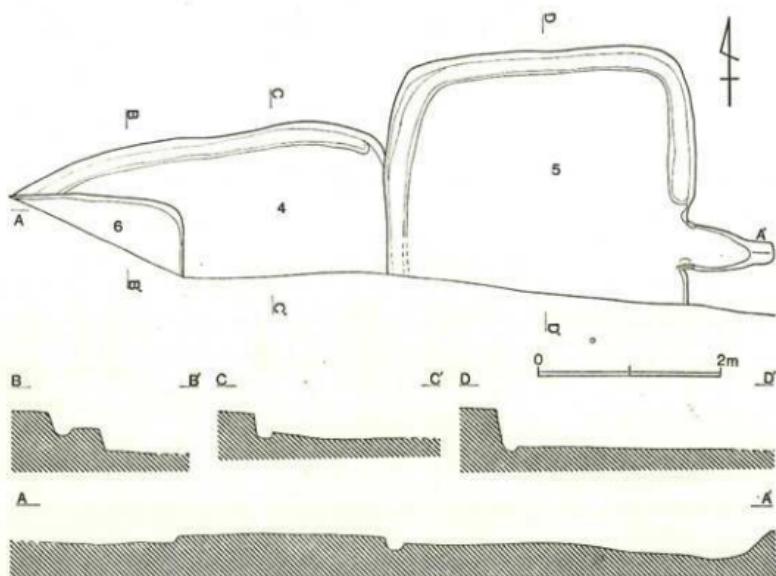
発掘時の所見から3軒の住居跡は4→5、6の前後関係をもつことを確認している。

4号住居跡は東辺を5号住居跡に、西辺および北西コーナー部を6号住居跡に切られており北辺を確認したのみである。5号住居跡に接する部分はコーナーに近く北辺は450cm前後を測る。壁高は20cm、床面は重複する部分よりも検出部中央が5cm前後高い。また5号住居跡床面より6cm、6号住居跡より8~20cm高い。周溝は幅14~20cm、深さ8cm前後、北東コーナー部で途切れる。遺物は少なく覆土中から須恵器壺（第133図1、2）を得たのみであった。

5号住居跡は4号住居跡東辺をわずかに切っている。南側約3mを失っているが残存部からすると一辺340cm前後の隅丸方形を呈する小形の住居跡になる様子である。壁高は北辺で42cm、東辺で35cmを測る。カマドは東辺に構築されており、焚口部幅50cm、壁外に約1mを掘り込んでいる。焚口部側壁には扁平な河原石、片岩を補強している。カマド左側から北、西辺にかけて周溝がめぐる。幅17~22cm、深さ5~8cm。床面は平坦、堅固であった。

遺物は覆土中から土師器壺、須恵器壺、壺、蓋、土錠、陶器等が出土しているほか、プライマリーな状態ではないが本跡床面に相当する位置（第132図○印）で円面鏡（第133図16）を検出している。

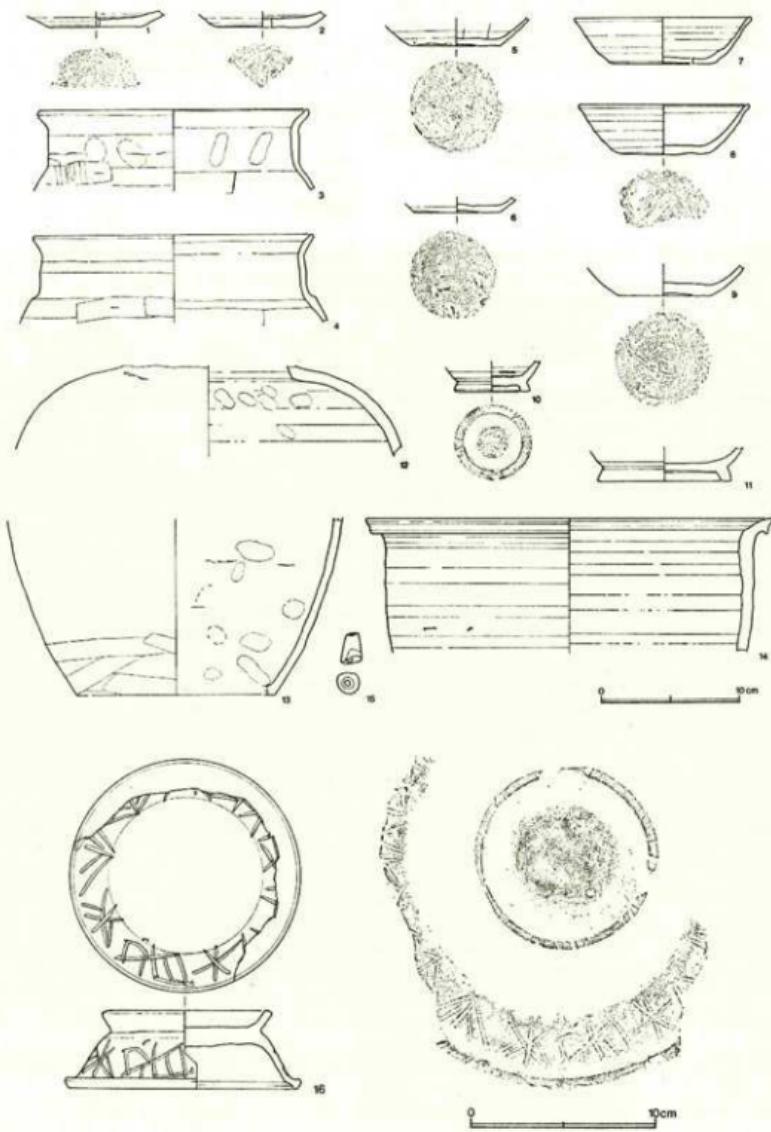
6号住居跡は4号住居跡西側を切った状態で検出されているが、北東コーナー部を中心に北辺190cm、東辺70cmを確認したのみで主体を失っているため詳細は不明。北辺からすると5号住居跡と軸をそろえよう。4号住居跡床面とは北辺で-20cm、東辺で-8cmのレベル差がある。遺物は検出されなかった。



第132図 4・5・6号住居跡

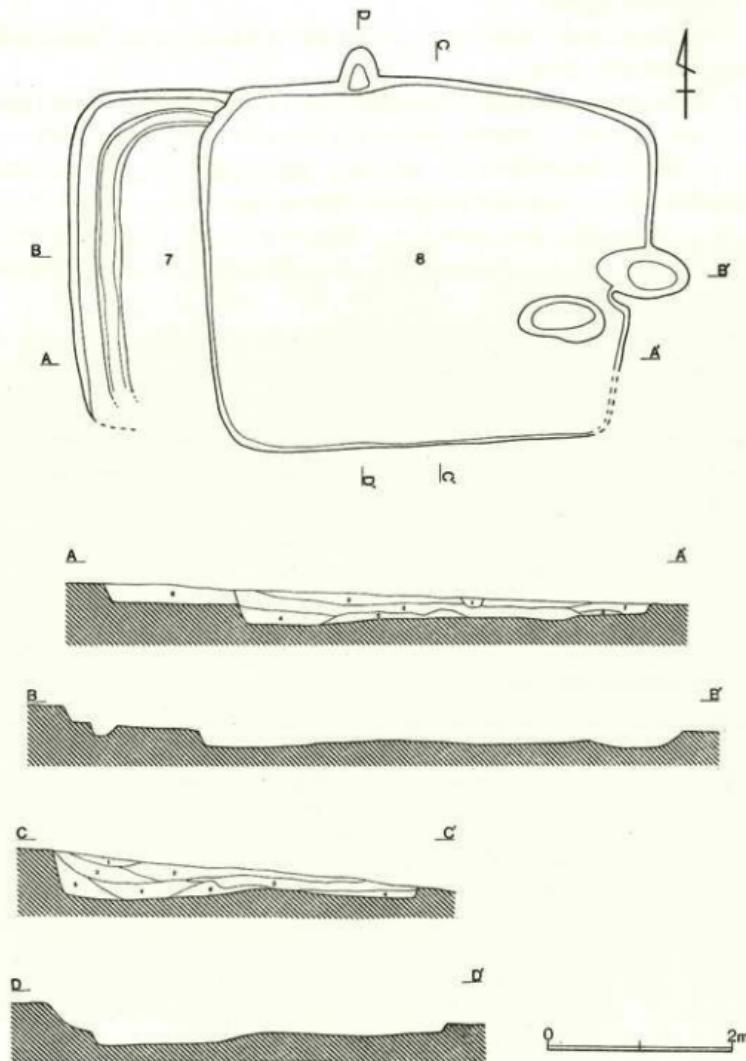
## 4・5号住居跡出土土器（第133図）

器種	番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
須恵器 壺	1	底径 6.4	1は皿か。ともに底部小片。	底部回転糸切り。1は黒、黒灰色	4号住居跡出土
	2	底径 6.0		2は灰色。ともに焼成良。	
土師器 甕	3	口径 19.6	コの字状口縁、4は肩部の稜が明瞭。ともに肩部がやや張る。胴部	口縁部ヨコナデ。胴部ヨコヘラ削り。3の口縁直行部には指痕がのこる。3は茶褐色。4は赤褐色。	口縁部彫
	4	口径 20.2	は削りにより器厚3~4mmに仕上げられている。		
須恵器 壺	5	底径 6.5	体部は器厚2mm前後とうすい。見込みに「キ」の細いヘラ書きがある。	ミズビキ成形。底部回転糸切り。灰、灰褐色を呈す。器内外面の剥落が著しい。6は酸化炎焼成。淡	5、6底部のみ。
	6	底径 6.2	6の底部は切り離し時小石の移動により糸のぬけた部分が上げ底となっている。	赤褐色を呈す。胎土に10cm大の小石含む。	



第133図 4・5号住居跡出土遺物（4号住1・2、5号住3～15）

器種	番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
杯	7	口径 12.8	体部下半が張り、上半がわずかに外反する。口唇部は丸味をもつ。	ミズキ成形。底部回転糸切り。 クロ痕顯著。灰色。焼成良堅緻。	
杯	8	口径 12.3	体部はわずかに内彎して立ち上がり口唇部が外反する。底部ぶ厚。	底部回転糸切り。切り離しはスムーズでなく胎土中の小石が移動し凹凸となっている。灰色。焼成良。	
	9	底径 6.4	9の底部上げ底。	9の底部には2度の回転糸切り痕が観察される。	
灰釉 陶器 壺	10	底径 5.4	小形壺、高台はハの字状に開き、整ったつくり。接地面はベタ。底内面には口頭部からしたたり落ちた釉が暗緑色に発色している。高台部外面は施釉され同色に発色。	底部静止糸切り。暗灰色。高台部内側に篦書きによる「一」のマークがある。	底部のみ
須恵器 高台付 杯	11	底径 9.4	高台はハの字状を呈するが直行気味。接地面はベタ。見込み部は器面剥落が著しい。	底部回転糸切り。酸化炎焼成。軟質。黄灰色を呈す。	
短頸壺	12	頸部径 12.6	胴部が大きく張る。現存部胴中程に自然釉がふき出ている。	外面は良くナデられ平滑となっているが内面には凹凸がのこる。外面灰、内面灰黒色。焼成極良。	肩部のみ
鉢	13	底径 14.2	うす手のつくり。内面には指痕と思われる凹みが点々と認められる。	底面ヘラ削り調整。底部ちかく4cmにわたり横、斜のヘラ削り。その上位にタテの浅い整形痕。	
鉢	14	口径 29.4	口縁部が直角にちかく外反する。端部上下は突出し稜をつくる。内外面には積み上げ時の凹凸が残る	内外面とも丁寧なナグ整形。灰色を呈し、焼成極良、堅緻。	
土鍤	15	最大径 1.6	粘土接合面から破損。孔径 5mm。	赤褐色、表面剥落激しい。	
円面鏡	16	鏡面径 9.2 脚径 12.7 器高 4.2	脚部がハの字状に開き、縫部は肥厚し外反する。鏡面の縫と脚部を繋ぐ突帯を欠くが、高台部の裾がナデによりわずかに深い。脚は平坦ではなくわずかに凹凸がある磨減痕はさほど顯著でない。脚部には種々のモチーフが篦により施されている。共通するモチーフが連続することもあるが、ほとんどバラバラで沈線數、単位横幅も異なる。沈線は幅1.5~2mm前後で直行、斜行するものはすべて脚端部から高台部に向かって施文されている。	ミズキ成形。脚部器厚1.1cm。胎土に小石(3~6mm)を含む。灰色を呈し焼成良。	脚部1/3。脚部完存。



1. 搾乱 2. 黒色土 3. 褐色土 4. 暗褐色土（ロームブロック含） 5. 暗褐色土  
6. 黄褐色土（ロームブロック） 7. 暗褐色土（焼土多く含）

第134図 7・8号住居跡

## 7、8号住居跡（第134図）

2号住居跡の南に隣接して検出された。7、8号住居跡とも南北辺をそろえ8号住居跡が長軸方向で7号住居跡を切っている。

7号住居跡は確認された西辺360cm、長辺は残存するカマドの位置からすると5m前後と推測される。壁高は北辺で32cm、西辺で21cmを測るが、斜面下側にあたる南辺では掘り込みを確認できなかった。周溝が壁下約20cm内側にめぐる。幅18~28cm、深さは10cm前後である。カマドは8号住居跡北壁に検出された。これは重複する8号住居跡が本跡と北辺をはぼそろえたため残存していたものである。焚口部幅40cm、壁外に約35cm掘り込んで構築されている。底は8号住居跡北壁中にあり床面より10cm高い。焼土は充土に霜降り状に混入している程度で顕著でなかった。床面はほぼ平坦であるがさほど堅固でない。

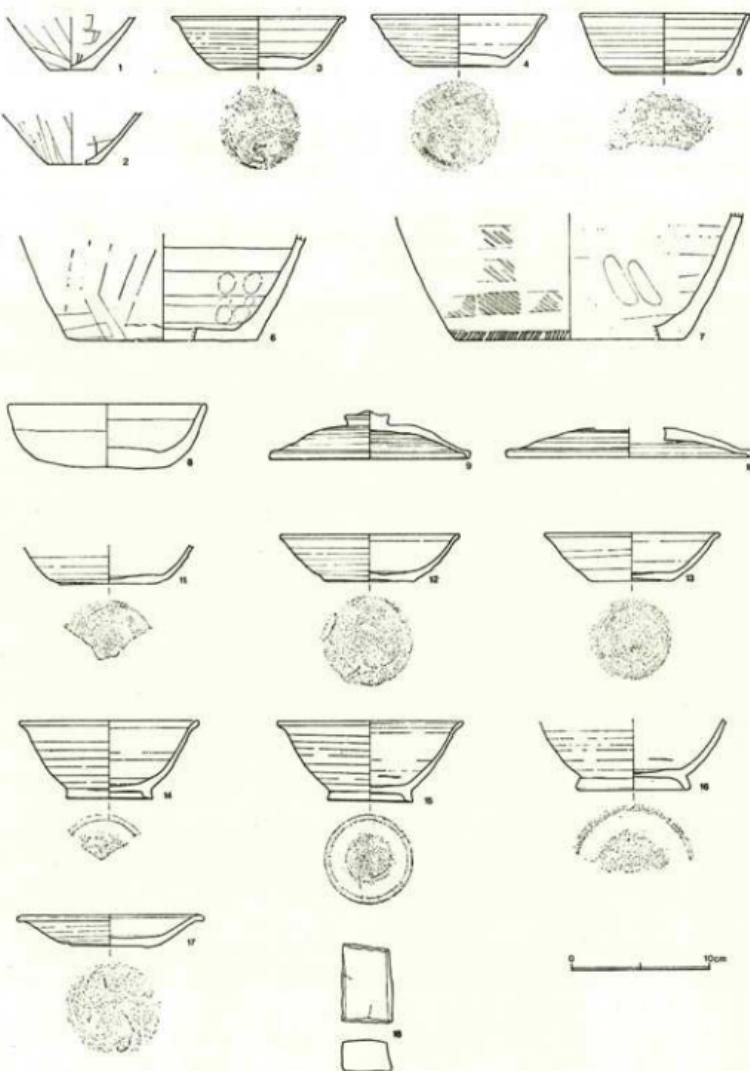
遺物は土師器甕、須恵器坏、甕、砾石があるが全て覆土上部からの出土であった。

8号住居跡は498×401cmの規模で主軸を東西にもつ隅丸長方形を呈する。東辺では北東コーナー部がやや張り出しカマドをはさんで南北と一致しない。東南コーナー部は擾乱を受けている。壁高は北壁で60cm、南壁で7cmを測る。カマドは右側に掘り残しによる袖を備え焚口部幅60cm、壁外に52cm掘り込んでいる。底は床面より約7cm低い。焚口部右側に93×50cm、深さ20cmの貯蔵穴と思われる落ち込みがある。床面は北半が深く南寄りで浅くなっている。覆土は2層黑色土（炭化物を含む）3層褐色土が主体となっており、7号住居跡覆土の暗褐色土と本跡3層は等質層できわめて近似し、分層はわずかな色調差による。

遺物は3層から出土したものが多く床面から浮いている。銅鈴（第148図11）は2層上面で60×40cmの範囲で炭化物が集中する地点から出土した。この範囲は落ち込みとしては明確にし得なかった。

## 7・8号住居跡出土土器（第135図）

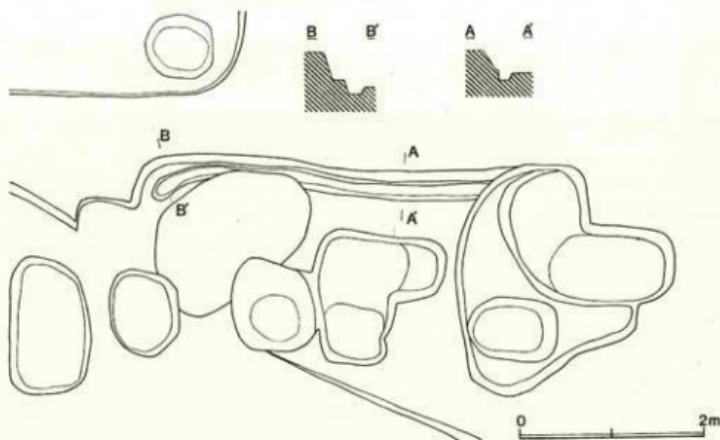
器種	番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
土師器 甕	1	底径 3.1	ともに甕の底部小片。底面はヘラ削り	面取りのヘラ削りが著しい。削り	
	2	底径 3.6	削りのため正円にならない。	は底面にも及ぶ。腹部器厚は2.5~4mm。1は黒灰色、2は赤褐色。	
坏	3	口径 12.6	わずかに体部が張り、口唇部が外	ミズビキ成形。ロクロ痕を顯著に	口縁部のみ
		3.8	反し玉縁状を呈する。底部は平底	のこす。底部回転糸切り。器面剥落が著しい。酸化炎焼成、黄褐色。	
		5.8	ふ厚なつくりとなっている。		
坏	4	口径 12.6	体部中程に張りをもち逆への字状	ロクロヒキアゲ痕が顯著。凹部の	90%残
		3.8	に開く。口唇部は肥厚してわずか	幅は4~6mm。底から口唇部まで	
		6.6	に外反する。底部は平坦、1.1cm	8~9ピッチでヒキアゲている。	
坏	5	口径 12.3	見込み部はうすい。	底部回転糸切り。灰色、焼成極良。	口縁部のみ
		4.4	体部下側が大きく張り、直線的に	ミズビキ成形。底部回転糸切り。	
		7.6	立ち上がる。底部は周辺部が厚く	体部調整は入念で平滑に仕上げられている。灰色胎土緻密。焼成良。	
須恵器 甕	6	底径 13.8	見込み部はうすい。	6は腹部下端をヘラ削りした後、	底部のみ
			ともに底部から直線的に立ち上がる。7は平行叩き目が底部から数	底部周辺部を1~1.5cmにわたりへ	



第135図 7・8号住居跡出土遺物（7号住1～6、8号住7～18）

器種	番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
	7	底径 16.6	段のこる。	ラ削りしている。7は指痕および指をひきずった痕を明瞭にのこす。6は外面灰色、内面灰黒色でやや軟質。7は黒褐色、焼成極良。	底部%6
土器器 坏	8	口径 14.2	底部、身部ともふ厚なつくり、体部上半でかすかな稜が認められる平底風。	口縁部ヨコナデ。底部かすかなヘラ削り。胎土に杂质含まれず焼成良。淡赤褐色。	
須恵器 蓋	9	口径 14.6 器高 3.5	つまみは腰が高く機能する。天井部はヘラ削りにより平坦に仕上げられている。裾部端は直行する。	胎土に多量の小石、砂粒を含み、器内外面に目立つ。灰褐色、軟質	%残
蓋	10	口径 17.8	天井部ふ厚なつくり。身受部は扁平となっている。	天井部ヘラ削り。灰褐色。軟質。	つまみ部を欠く。
坏	11	底径 7.0	体部下半が張り、直線的に立ち上がる。見込み部中央は3mmとうすくなっている。	ミズビキ成形。底部回転糸切り後周辺部回転ヘラ削り。ヘラ削りは幅1.3~1.8cm。青灰色。焼成良。	
坏	12	口径 13.0 器高 3.4 底径 6.6	体部は内湾ぎみに立ち上がり、上部でわずかに外反する。底部平坦見込み中央が隆起している。	ミズビキ成形。底部回転糸切り。切り離しは2度にわたる。初回は現状の2mm上を約半分切って放棄し、切り直している。暗灰色。焼成良。	%残
坏	13	口径 12.6 器高 3.5 底径 6.2	体部下半が張り口縁部が大きく外反する。底は上げ底ぎみで見込み中央は3mmとうすい。	ミズビキ成形。底部回転糸切り。胎土に8mm大の小石含む。暗灰褐色。軟質。	口縁部%6
高台付 坏	14	口径 12.9 器高 5.7 底径 6.2	体部下半に張りをもち口唇部は肥厚して外反する。外反部は器厚2.5mmとうすい。高台部は丁寧なつくり。外側端が接地する。	ミズビキ成形。底部回転糸切り。貼付高台。暗灰色。焼成良堅敏。	口縁部%4
高台付 坏	14	口径 13.4 器高 5.8 底径 6.2	体部はわずかに内擣して立ち上がる。口唇部は外反する。体部上半は器厚3mmとうすいつくり。高台は14に同じ。	ミズビキ成形。底部回転糸切り。貼付高台。黒褐色、器面に細かな凹凸目立つ。焼成良。	口縁わずかに欠く。
高台付 坏	16	底径 8.3	体部下半はふくらみをもつ。高台は前2者と異なり、腰高で内側は広範囲に指頭によりナデされている。接地面は内側端にある。底は見込みがくぼみ2mmとうすい。	ミズビキ成形。底部回転糸切り。貼付高台。灰褐色を呈しやや軟質	底部%残
皿	17	口径 14.6 器高 2.3	口唇部は水平にもかく外反する。体部器厚5mmとややふ厚なつくり	ミズビキ成形。ヒキアゲ痕を明瞭にのこす。胎土に多量の小石、砂	

器番	種号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
砥石	18	底径 5.5 全長 5.7 幅 3.6 厚さ 2.1	底部平坦。 四面とも砥面となっている。表面は良く砥込まれ縦断面は弓状になっている。左右面には浅い擦痕が多くのこる。	粒を含む。器面上に小孔が目立つ。 灰色、一部アズキ色。焼成良。	上下端を欠く。中粒砂岩製。



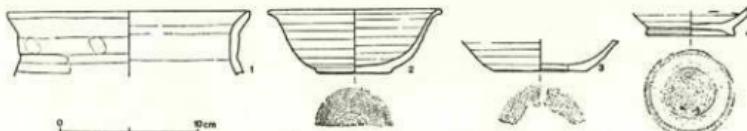
第136図 9号住居跡

## 9号住居跡（第136図）

3号住居跡の東南に隣接して検出された。8号建物跡と重複しており全容は不明で検出した北辺から住居跡と認定した。北辺は3.8mにわたり検出し、西端がコーナー部になることを確認している。壁高は25cmを測り、壁下に幅20cm、深さ10cmの周溝が走る。周溝は西コーナー部で途切れる。東側の落ち込み群は建物跡柱穴のほかはどちらに関連するものか明確にし得なかった。

建物跡との前後関係については、東、西、南辺が全く検出されなかつことと、推定プラン内に存在する建物跡柱穴に貼床等の痕跡が見られなかつことにより建物跡が本跡を切っていると判断された。

遺物は北西コーナー部近くの覆土から出土している。



第137図 9号住居跡出土土器

## 9号住居跡出土土器（第137図）

器種	番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
土師器 甕	1	口径 17.6	コの字状口縁。直行部上下には男 縫は継（段）をもつ。	口縁部上半ヨコナデ。直行下側は ヨコヘラ削り。赤褐色。焼成良。	口縁部細片か ら復元実測
須恵器 杯	2	口径 12.6 器高 4.6 底径 5.4	体部は曲線的に内彎し、口唇部は 肥厚、外反する。底部は平坦、段 をもって体部にいたる。	ミズビキ成形。ロクロ痕が顯著に のこる。底部回転糸切り。体部中 程で色調が変わる。上半が淡灰色 下半は灰褐色。焼成良。	12
杯	3	底径 6.0		底部回転糸切り。胎土に多量の小 石、砂粒含む。灰色。焼成良。	底部12
高台付 杯	4	底径 6.4	貼付高台。ハの字状に強く張り出 す。内側掘は丁寧にナダされている。 接地面は外側端にある。	底部回転糸切り後、高台貼付、内 側掘ナデ。暗灰色。焼成良。	

## 10号住居跡（第138図）

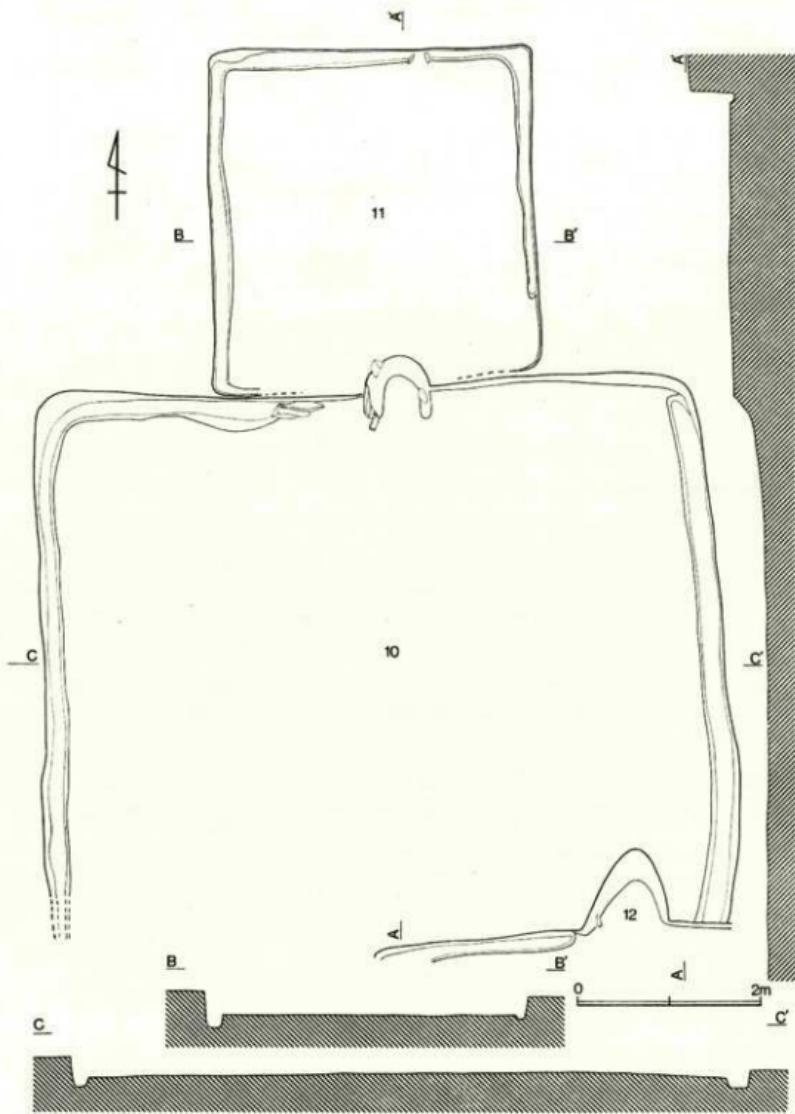
6—1 Pグリッドを中心とし3号住居跡の東8mに位置している。北辺で11号住居跡を切り、南辺を12号住居跡に切られている。両跡とは大きく切り合うことなく辺を接するように重複している。東西760cm、推定南北長も同値に近く本遺跡で検出された住居跡中最大の規模をもつ。壁高は北辺で30cm、西辺中央で20cmを測るが南壁は確認されなかった。周溝は東辺、北辺から西辺にかけて検出された。幅16~28cm、深さ10cm前後で整っている。カマドは北辺中央に構築されており、37cmにわたり11号住居跡床面を掘り込んでいる。プラン確認面から充土上部にかけて片岩ほか焼跡が遺棄されていた。焚口部幅70cm、ローム層による両袖を備えている。底は床面と同レベルで奥壁部はゆるやかに立ち上がる。焚口部左側壁下には天井を架構したと思われる長大な片岩が出土している。柱穴は認められない。床面は南壁寄りを除き良好であった。

遺物は須恵器蓋（第139図5）が西壁に付着した状態で、土師器甕（4）が床直で出土している。

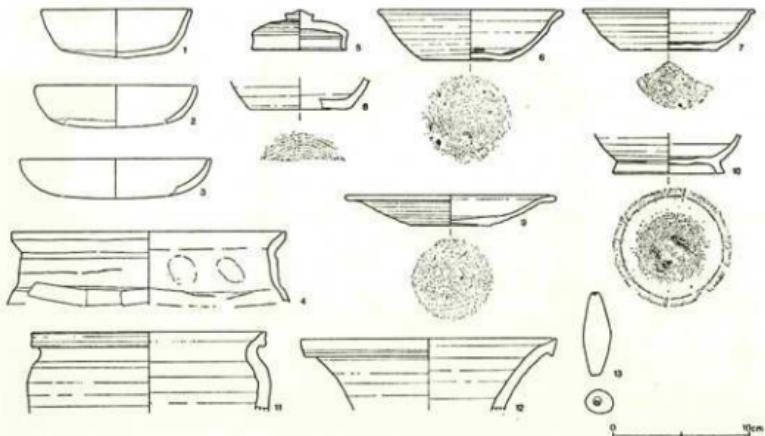
## 11号住居跡（第138図）

10号住居跡北側に隣接し、同跡カマドに南寄り床面を切られている。東西355cm、南北375cmのほぼ正方形を呈する。壁高は北辺で45cm、東辺で20cm、西辺で25cmを測る。南辺は10号住居跡に接し両コーナーはかろうじて検出し得たが、中央部の掘り込みは認められなかった。両コーナーからすると11号住居跡は本跡南壁を襲うことなく、わずかに干渉し合う程度で、その構築にあたっては11号住居跡の存在を意識している。周溝は南辺を除き掘られている。幅10~20cm、深さ5~12cmを測る。北壁下で10cm大の扁平河原石を「ハ」字状に配置した部分では途切れている。カマド、柱穴は検出されなかった。床面は平坦、堅緻で良好である。

遺物はすべて覆土中からの出土である。



第138図 10, 11号住居跡

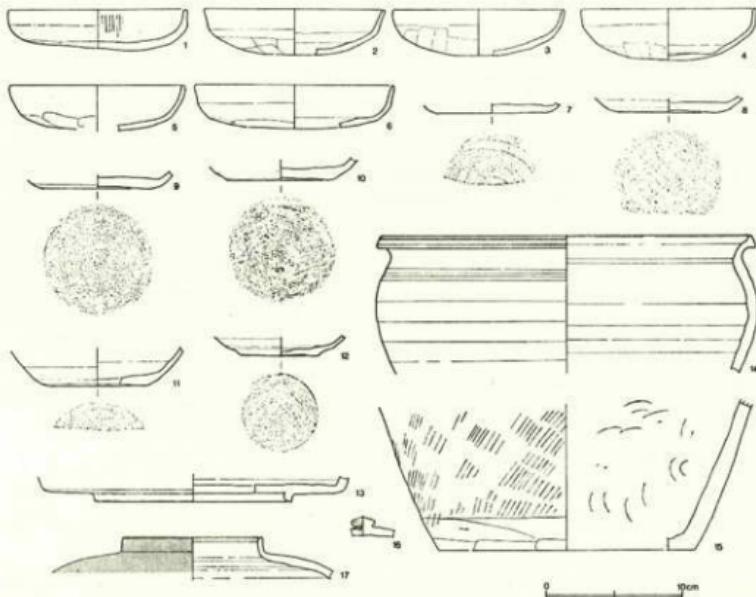


第139図 10号住居跡出土遺物

## 10号住居跡出土遺物

器種	番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
土師器 杯	1	口径 11.0	口縁部と底部がなす後が低い。3	1～3口縁部ヨコナデ。2は底部	1 完形
	2	口径 12.0	は内彎ぎみに立ち上がり後不明瞭	ちかくヘラ削りにより面とり。1	2、3は口縁
	3	口径 14.0	2の底部は削りにより2mmとうす くなっている。	と3は磨擦激しく不明。1、3が 赤褐色。2は茶褐色。	部小片から復 元実測。
甕	4	口径 2.0	コの字状口縁。直行部上下の段は 明瞭である。口縁部中程に成形時 の最終つみ上げ痕をのこす。	口縁部ヨコナデ、胴部ヨコヘラ削 り。内面にかすかに指痕がのこる 赤褐色。	口縁部彫
須恵器 蓋	5	口径 6.9 器高 2.9	宝珠状つまみをもつ形蓋。天井 部から口縁部への移行は直角ちか くに屈曲している。肩部から天井 部にかけて1.3cmにわたり焼成後 帯状に剥落した痕が観察される。 残存部からすると高さ3mm程度の 隆帯が貼付されていたらしい。	ロクロナデ整形。胎土に0.5cm大 きの鉄粒子が含まれている。胎土緻 密、青灰色を呈し焼成良好。	完存
杯	6	口径 13.6 器高 3.7 底径 6.7	体部は内彎し口唇部が外反する。 また口唇部は著しく肥厚し玉縁状 を呈す。底部は上げ底ぎみ。見込 みに重ね焼きの痕をのこす。	ミズビキ成形。底部回転糸切り、 ロクロ裏が体部中程に顯著にのこ る。灰、灰黒色、焼成良好。	
杯	7	口径 12.0 器高 3.0 底径 6.5	体部は内彎しながら立ち上がる。 口唇部は外側にめくれるように外 反する。底部は平坦、見込み中央 はくぼむ。	ミズビキ成形。底部回転糸切り、 内面は平滑に仕上げられている。部 黒色を呈し焼成良好堅緻。	底部1/4、口縁

器種	番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
壺	8	底径 7.1	底部ぶ厚なつくり。周辺部は磨滅している。	底部回転糸切り。灰色、焼成良。	底部丸
皿	9	口径 15.5 器高 2.2 底径 6.0	口縁上部は水平に外反する。口唇部は肥厚して丸味をもつ。底部は上げ底ぎみ。	ミズビキ成形。底部は回転糸切り。 ロクロ痕が明瞭にのこる。底部から8ピッチ前後で引き上げている 灰褐色、軟質。	劣残
高台付壺	10	底径 8.2	体部が内彎する深目の壺。高台はしっかりしたつくりでハの字状にのび、接地面は平坦となっている。底部中央に指紋がのこっている。	底部回転糸切り後、高台貼付。胎土に小石。砂粒のはか鉄滓小粒を含む。暗灰色、焼成良。	体部下半のみ
甕	11	口径 17.0	胴部はほぼ直行し、口縁部がくの字状にくびれる。口唇部は断面三角形となる。	器内外面に小孔が目立つ。暗灰色焼成良。器厚は9mmと厚い。	口縁部小片
甕	12	口径 18.6	大きく外反する甕の口縁部片。口唇部上下端は各々突出し稜をもつ。	ロクロ痕顯著。黒灰色。胎土に小石、砂粒を含むも緻密。焼成良。	
土鍾	13	全長 6.0 幅 2.0	算盤玉形土鍾。孔径約2.5mm。表面は磨滅して光沢を放つ程平滑になっている。重さ18g。	赤褐色、胎土に微砂粒を多く含むが堅く焼き上がっている。	



第140図 11号住居跡出土土器

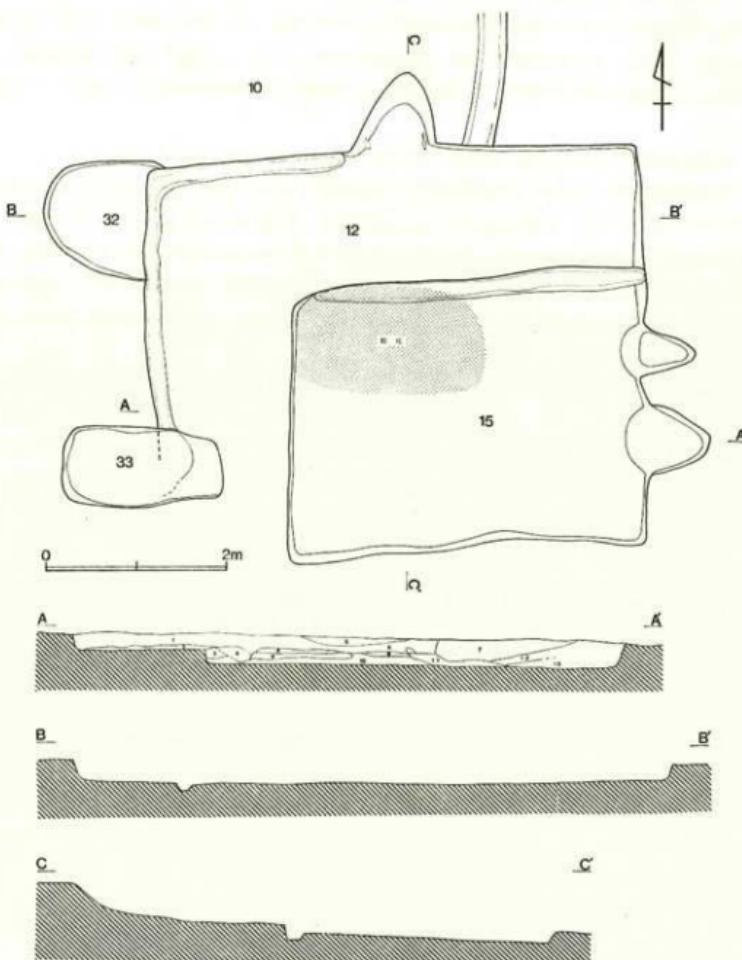
## 11号住居跡出土土器（第140図）

器種	番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
土器 杯	1	口径 13.2 器高 3.0	全体的にふ厚なつくり、口縁部はほぼ直立する。底部は凹凸が著しい。内面にはミガキが施される。	口縁部ヨコナデ、底部ヘラ削り。 内外面とも器面の剥落が著しい。 赤褐色。	1 残
杯	2 6	口径 12.6 { 14.6 3.2 { 3.8	2、3は口縁部が高位にある。 { 4～6は口縁移行部が底部ちかくにあり、いわゆる舟底状。を呈する。 3.2し屈曲部内面はナデられ器厚うすくなっている。	口縁部ヨコナデ、底部ヘラ削り、ヨコナデの幅は1.5cm前後で一定している。 赤褐色、胎土は精撰されているがやや軟質。器厚うすく破損率が高い。また器面剥落、磨滅も著しい。	2 残 3 残 4 残 5 残 6 残
須恵器 杯	7 8 9 10 11 12	底径 7.5 底径 7.5 底径 8.0 底径 7.8 底径 7.5 底径 5.8	底部のみ、7～11の推定口径は近似している。8～10の底部は上げ磨きみで接地面にあたる周辺部は磨減している。12の見込み中央は指あてされてくぼみ器厚3mmとうすくなっている。	底部回転糸切り。9、11は糸切り後、周辺部回転ヘラ削り。7、10は灰色、焼成良。8、9は灰褐色軟質、器面剥落有り。11は酸化炎焼成で赤褐色を呈すが、焼成良堅緻。12は黒灰色。	
盤	13	高台径14.4	底部は水平で体部は垂直に立ち上がる。高台外側据はナデられているが内側は貼付されたまま。底面は内傾し外側端が接地する。	内外面ともロクロ痕顯著。胎土は緻密、焼成良、灰白色を呈す。	
甕	14	口径 27.0	口縁部がくの字状に外反し、肩上部が張る。口縁くびれ部は器厚うすく、口唇部端は上半に突出する。	肩部にロクロ痕が顯著にのこる。胎土に微砂粒から7mm大の小石を含む。黒灰色。焼成良。	
甕	15	底径 18.8	底部から直線的に肩部に到る。表面平行叩き目。内面青海波文がある。	底部ヘラ削り。表面叩き目後、底部ちかく2.5cmはヘラ削り整形。表面黒灰色、内面灰色、焼成良。	
灰陶 陶器 壺	16	推定口径 10.0	頭部は直立する。残存部からするところ上部が大きく張りそうである。釉は口唇内面にも施されている。	内面ロクロ痕が顯著。釉はくすんだ一茶がかった暗緑色に発色している。胎土は灰色。緻密。	口縁から肩部にかけての小片から復元実測。
須恵器 蓋	17	つまみ径 1.7	宝珠状つまみ。	残存部全面に自然釉が出ている。黒灰色、胎土は灰白色。	

## 12・15号住居跡（第141図）

12号住居跡は南寄りで15号住居跡に貼床し、北側で10号住居跡を切っている。10～12、15号住居の4軒は斜面上下方向で重複しており前後関係を整理すると11→10→12、15→12となる。10～12号住居跡に関しては大きく重複することなく一辺を干渉する程度に斜面下へ順に降っている。

東西553cm、南北推定370cmの長方形プランを呈する。壁高は北辺で35cm、南辺は32号土壤と重複しており明確にし得なかった。周溝が北辺から西辺にかけて掘られている。幅16～20cm、深さ5～



- |            |                |                |
|------------|----------------|----------------|
| 1. 暗茶褐色土   | 5. 暗茶褐色土（7層含）  | 9. 黄褐色土（12住床面） |
| 2. 黄褐色土    | 6. 暗褐色土（焼土含）   | 10. 褐色土        |
| 3. ロームブロック | 7. 灰色粘土        | 11. 黑褐色土       |
| 4. 黒色土     | 8. 黑褐色土（12住床面） | 12. 赤褐色土（焼土含）  |
|            |                | 13. 12至層       |

第141図 12・15号住居跡

10cmを測る。カマドは北辺中央にあり10号住居跡床面を85cm掘り込んで構築されている。焚口部幅95cm、底は床面より5cm前後高く奥壁に向いゆるやかに立ち上がる。床面は北壁寄りが高く南に寄るに従い下がる。15号住居跡内の貼床（第141図でスクリーントーンをかけた範囲）は黒褐色土、黄褐色土を版築状に貼って構成する。層厚は各々5cm前後。15号住居跡床面とは+10cmのレベル差がある。

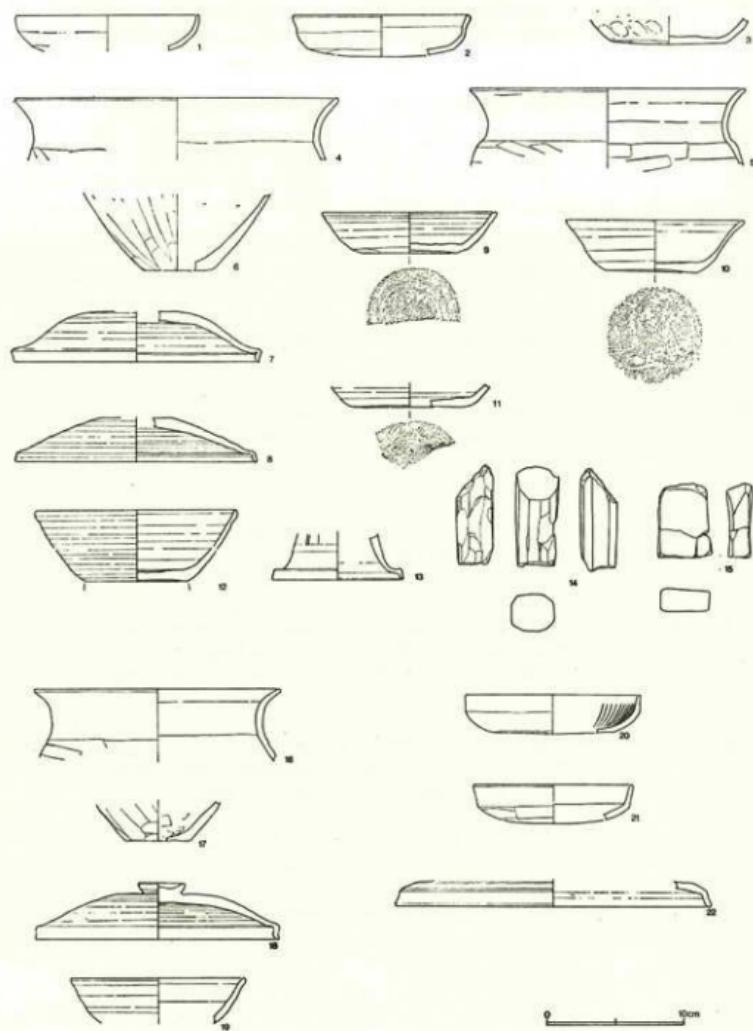
遺物は須恵器坏（第142図12）がカマド焚口部から出土したほかは覆土出土である。

15号住居跡は397×300cmの長方形を呈する。壁高は東辺で30cm、南辺で15cmを測る。東辺中央に30cmおいて2基のカマドが構築されている。北側をNo.1、南側をNo.2とする。No.1は焚口部幅60cm壁外に60cm、No.2は焚口部幅75cm、壁外に70cm掘り込んでいる。底はNo.1が床面より若干高く、No.2はほぼ同レベルでともに奥壁部はほぼ垂直に立ち上がる。北壁下に周溝が検出された。幅20~28cmを測り、深さは5cm前後と浅いが、本跡北壁の把握を容易にした。床面は南に寄るに従い深くなり北壁下とは約10cmのレベル差がある。

遺物は少ない。No.1 カマドの焚口部で出土した土師器甕（第142図16、17）のほかは覆土出土である。

#### 12・15号住居跡出土土器（第142図）

器種	番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
土師器 甕	1	口径 13.4	曲線的に立ち上がり口縁部の接は 明瞭でない。	口縁部ヨコナダ。底部面取りヘラ 削り。赤褐色、焼成良。	口縁部No.1
坏	2	口径 13.0	口縁上半が外反する。	口縁部ヨコナダ。底部面取りヘラ 削り。器面の剥落目立つ。赤褐色	口縁部No.2
坏	3		底部ヘラ削りにより平底風に仕上 げられている。	赤褐色。	
甕	4	推定口径 20.0	口縁部くの字状に外反する。肩上 部に段、稜をもつ。6の底は正円	口縁部ヨコナダ、肩部ヨコ、斜め ヘラ削り。4は黒褐色。5は赤褐色。 6は上一下、右下がりに面取 りのヘラ削りが施されている。底 面も同様の削りである。内面暗茶 褐色、赤褐色、外面黒褐色。	4、5 口縁部 小片から復元 実測。
	5	推定口径 23.6	にならない。		
	6	底径 5.0			
蓋	7	口径 18.0	つまみ部を欠く。推定器高は4~ 4.5cmと高い。天井部厚。8は据 部にもヘラ削りが及ぶ。天井部は 平坦となっている。身受部は7が 直立、8が外にやや開く。	天井部ヘラ削り。7は灰褐色、軟 質、内外面とも剥落が著しい。8 は灰、灰黒色を呈し裾部で変化し ている。	7 弱残 8 強残
坏	8	口径 17.6			
坏	9	口径 12.8 器高 3.0 底径 7.0	体部は直線的に開く。ぶ厚なつく り、見込み部は凸凹が著しい。底 部は上げ底ぎみ。	ミズビキ成形。底部回転糸切り後 周辺部回転ヘラ削り。ヘラ削りの 幅1.7cm前後。一部では体部下端 にもヘラ削りが施されている。灰 青色、焼成良。	口縁部No.3



第142圖 12・15号住居跡出土遺物 (12号住1~15・15号住16~19、12、15号住20~22)

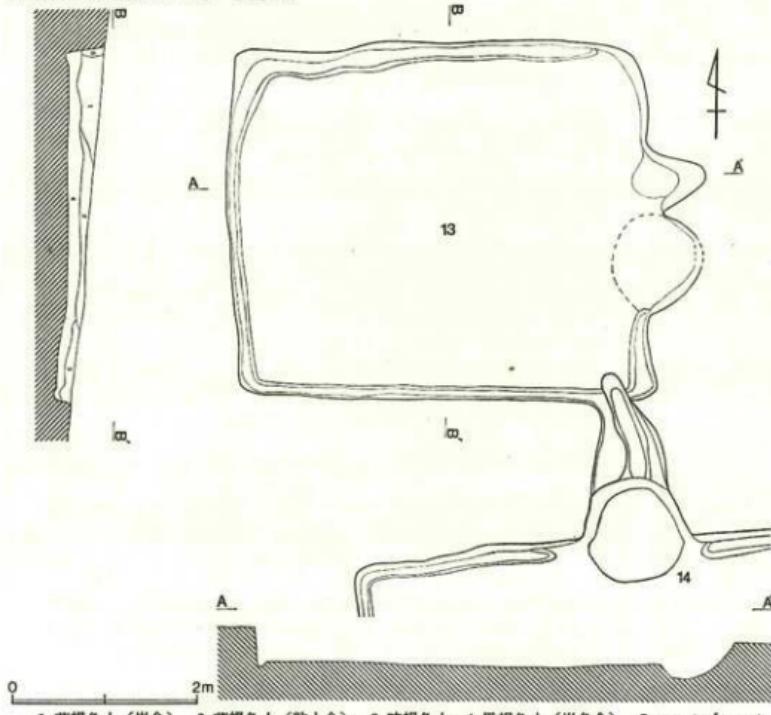
器種	番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
坏	10	口径 13.0 器高 3.9 底径 6.6	体部上半がゆるやかに外反する。 下半は曲線的、底部は上げ底ぎみ 内外面とも器面剥落が著しい。	底部回転糸切り。軟質で下半は黒色、上半灰白色を呈す。器面剥落のため胎土に含まれる小石が浮き上がっている。	口縁部を欠く。
坏	11	底部	8.6	底部は上げ底ぎみ。	底部回転糸切り後、周辺部回転ヘラ削り。小片のため明確にし得ないが削り痕の方向が直交するため手持のヘラ削りの可能性もある。青灰色、焼成良。
坏	12	底径	7.6	体部直線的に立ち上がる。底は平坦で高台が剥落した痕がある。	ロクロ痕顯著、底部回転糸切り。灰褐色、軟質。
脚	13	底径	9.6	脚部端は蓋の部分に近似する。透しがある。	底部小片から復元実測。
砥石状土製品	14	全長 幅	7.3 3.0	四角柱状の土製品。残存部からすると半欠品。都合九面の平滑面をもつ。先端部および剥落した部分には指紋がのこる。	夾雜物は含まず、焼成良好、赤褐色。各面に磨滅は認められない。
砥石	15	全長	5.4	幅3.9、厚さ1.9cm。四面とも使用されている表裏面が主底面で中央がすり減っている。	中粒砂岩製 半欠品
土師器 妻	16	口径	18.0	口縁部の字状にぐびれ、コの字状口縁にもかい。肩上部の稜はさほど顕著でない。17はヘラ削りされようなく仕上げられている。	口縁部ヨコナデ。胴部ヘラ削り。赤褐色、器面剥落し、ザラつく。 17は外面暗茶褐色、内面赤褐色。
須恵器 蓋	18	口径 器高	17.8 3.8	天井部高く、全体的に腰高である高台状のつまみがつく。天井部ヘラ削り。据部へは曲線的に移行。	つまみ部を中心として天井部外面は酸化炎焼成、赤褐色、他は灰色を呈す。やや軟質。
坏	19	口径	12.8	体部中程から曲線をもって立ち上がる。	ロクロ痕顯著。軟質で器面ザラつく。淡灰褐色。
土師器 坏	20	口径	12.8	口縁部直立ぎみ。明顯な稜をもつ。	口縁部ヨコナデ。底部ヘラ削り。
	21	口径	11.7		20は平底風にヘラ削りされている
須恵器 蓋	22	口径	23.0	大形蓋。端部は高台状。	灰白色、胎土緻密、焼成良。 小片

## 13号住居跡（第143図）

10号は住居跡の東 1.5 m に位置している。453×387cm の隅丸長方形を呈する。東南コーナー部に南側の14号住居跡のカマド煙道部がのっている。壁高は北辺で60cm、西辺中央で35cm、南辺で18cm を測る。周溝は東辺を除きめぐる。幅は10~25cmで深さ 5 cm前後と浅い。カマドは東辺中央に連結して 2 基構築されており 15号住居跡とよく似ている。北側を №.1、他を №.2 とする。焚口部は №.1 が約60cm、№.2 が約100cm、ともに壁外に60cm前後掘り込んでいる。底は床面より №.1 が15cm、№.2 が10cm低い。北東コーナー部でカマドの天井に用いたと思われる35cm大の片岩が壁に立てかけられた状態で出土している。№.2 カマドの先端は攪乱をうけている。

覆土は茶褐色土（1~3層）黒褐色土（4層）から成る。黒褐色土は層厚20~30cmで拳大の炭化材をはじめ多量の炭化物が含まれていた。床面は凹凸があるが堅緻であった。

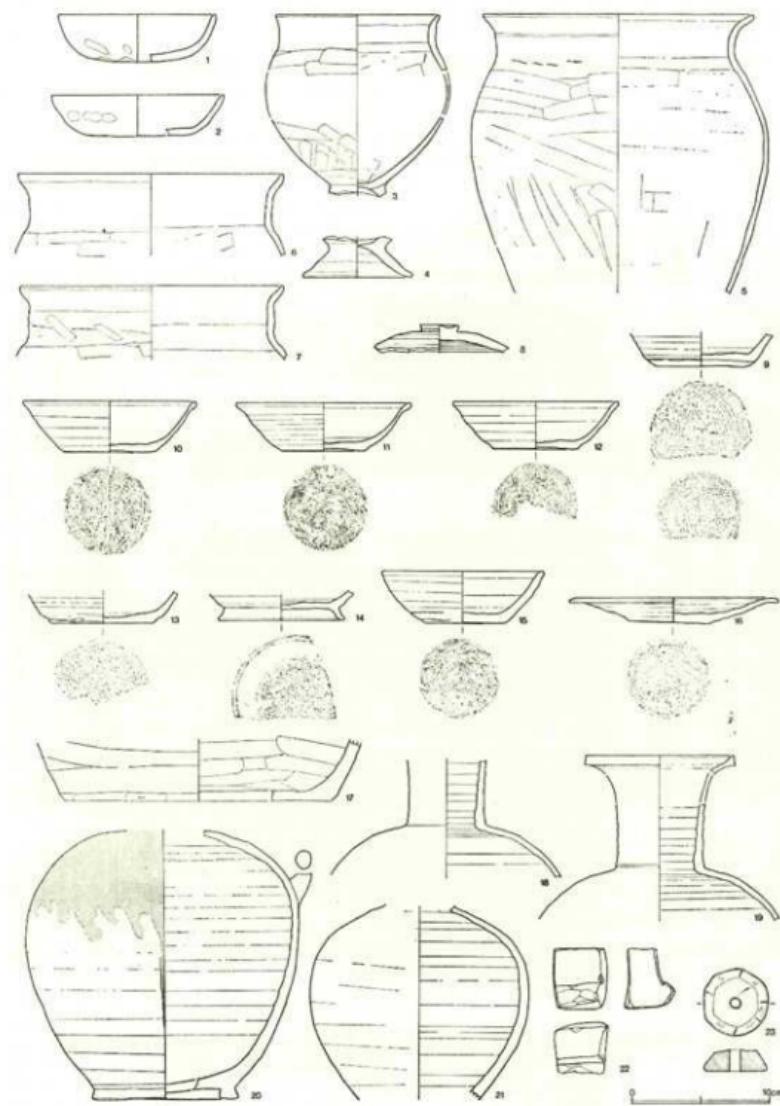
遺物は土師器壺、甕、須恵器蓋、壺、甕、灰釉陶器、筋鉢車、砥石、鉄製品などがあり、主に黒褐色土層から出土している。環状耳付長頸瓶（20）は住居跡ほぼ中央で床から約15cm浮き、潰れた状態で出土した。各種鉄製品は注目すべきものが多い。第148図1の鍵状鉄製品は №.1 カマドの焚口部床面で出土している。（図版65）



第143図 13号住居跡

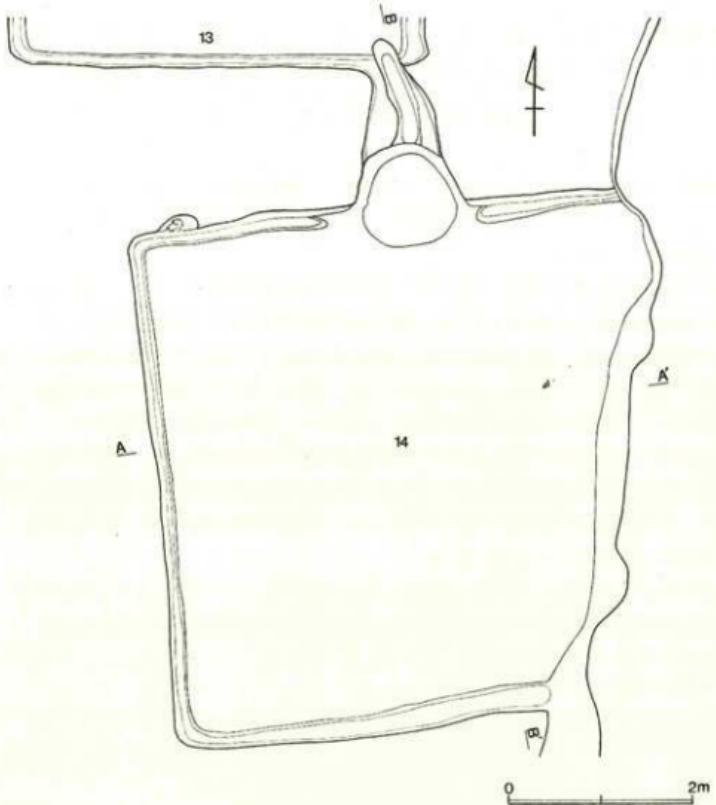
## 13号住居跡出土土器（第144図）

器種	番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
土師器 杯	1	口径 11.4 器高 3.5	口縁部内凹しながら立ち上がる。 ややぶ厚なつくり。外面に整形時の指紋がのこる。	口縁部ヨコナデ。底部ヘラ削り。 1は茶褐色。2は赤褐色。	口縁部4
	2	口径 12.6 器高 3.0	2は直線的に開き平底風。		口縁部5
台付甕	3	口径 11.8	コの字状口縁。口縁部上半の外反部	口縁部ヨコナデ、胴部上半ヨコ、	口縁部2
	4	底径 8.0	内側は矮をなす。胴部は張り中程で最大径をもつ。器厚は2~3mm。	下半継、斜のヘラ削り。赤褐色、 胴部ナデ。	
甕	5	口径 19.6	口縁部上半は大きく外反し、屈折部に矮をもつが、下半はスムーズに胴部に移行する。最大径は胴上部にある。器厚は3~4mm。口縁直行部に輪積み痕をのこす。	口縁部ヨコナデ、胴上半はヨコ、 斜、下半は継のヘラ削り。暗赤褐色、胴部ヘラ削りは浅い。	口縁、胴上半完
甕	6	口径 19.2	コの字状口縁。6の口縁部上半の外反はゆるく口唇部は直立ぎみ。	口縁部ヨコナデ、胴上部ヨコヘラ削り。器厚は3mm前後。6は赤褐色。	口縁部完
	7	口径 19.2	7の口唇外部には浅い沈線がめぐる。胴部は6よりも張る。	7は黒褐色。	口縁部5
須恵器 蓋	8		天井部のみ。つまみ部は小さく扁平。つまみ部周辺ヘラ削り。	青灰色、焼成良好堅緻。	
須恵器 杯	9	底径 6.4	底部殆ど程の破片であるが、その断面の観察から上下2枚の、回転糸切り痕が認められた。幸い一次切り離し面を剥ぐことに成功した。回転は両次とも時計まわり、一次切り離し時の底部の厚さは中央で2mm、周辺部で4~5mmとうすく2度目に切り直して8mmに整えている。底径は一次面より約1cm小さくなっている。一次糸切り痕に乱れない。糸も同一と思われる焼きしまっており黒色を呈す。		
杯	10	口径 12.5 器高 3.8 底径 6.7	口唇部は肥厚し玉縁状。底部、体部とも器厚うすい。底部はほぼ平坦。	ミズビキ成形。底部回転糸切り。内面灰褐色、外面黒灰色、茶褐色を呈す。軟質。	口縁部2
杯	11	口径 12.6 器高 3.5 底径 6.2	体部中程が張り、口唇部は肥厚、外反する。底部は上げ底ぎみ。ロクノ調整痕が顕著にのこる。	ミズビキ成形。底部回転糸切り。体部には8ピッチのヒキアゲ痕がのこる。内面底黑色、他は赤褐色。	口縁部5
杯	12	口径 12.0 器高 3.5	体部はほぼ直線的に開く。底部は上げ底ぎみ。見込み部中央がくぼ	ミズビキ成形。底部回転糸切り。青灰色、焼成良好堅緻。	5



第144圖 13号住居跡出土土器

器種	番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
杯	13	底径 6.2 底径 7.6	むたみ器厚は 3mm とすい。 底部はほぼ平坦、体部下端にくびれをもつ。	ミズビキ成形。底部回転糸切り。 淡灰褐色、軟質。	
高台付 杯	14	高台径 9.2	底部うすいつくり、中央は 3mm。 高台は高く、先端部が外反し、外側端が接地する。	底部回転糸切り後、高台貼付、内側回転ナデ、灰白色、軟質。	底部丸
杯	15	口径 11.6 器高 3.8 底径 5.8	体部 0.6cm とぶ厚なつくり、直線的に立ち上がる。9と同じく上下 2 枚の回転糸切り痕がのこっている。一次面は見込みから底部中央に斜めに入っている。したがって上面では糸切り痕の上に体部が立ち上がる状態となっている。暗青灰色を呈し、焼成良好堅緻。		
皿	16	口径 15.2 器高 2.1 底径 5.9	口唇部が水平、部分的に下側に外反する。底部はぶ厚なつくり。	ミズビキ成形。内面にヒヤアゲ痕を顯著にのこす。灰色。	口縁部丸欠
甕	17	底径 19.2	酸化炎焼成、器壁中央は黒灰色、内外面 2mm は赤褐色。	底部および胴部下端へラ削り。黒色、黒褐色を呈す。軟質。	底部丸
灰釉 長頸瓶	18	頸部径 5.8	頸部は開きぎみに立ち上がり、肩部が大きく張る。頸部は肩部端上にのってヒヤアゲられている。	頸部内面にロクロ痕が顯著にのこる。灰釉は胴上部で茶がかかった暗緑色に発色している。胎土灰白色。	頸部、肩部の小片から復元実測。
	19	頸部径 6.4	頸部下側がややぶ厚で、肩部はうすく仕上げられている。		
長頸瓶	20	最大径 19.9 現存高 18.3	瓶状耳付長頸瓶、頸部を欠く。肩部がやや張り、最大径は胴上部にある。器壁は底部もかくで 8~10mm、胴部および底部は 5mm 前後とうすい。肩部につく環耳の断面は正円でない。灰釉は肩部にかけられ胴中程に流下し釉溜りを生じている。うち一条は高台部まで流下している。また底部内面にも灰釉が認められる。釉は淡緑色に発色している。	胴部下側はヘラ削りされている。高台は幅広、平坦で接地面が多い。胎土は灰白色ないし灰褐色、小石を含む。内面にはロクロ痕が著しくのこる。また内面は器面剥落が顯著である。	底部丸欠 胴部 90% 残
頸長瓶	21	最大径 16.0	頸部、底部を欠く。胴部はほぼ球形。胴上半に灰釉がかかる。底部内面にも認められる。釉は暗緑色に発色している。	胴下半はヘラ削りされている。胎土は灰白色、緻密、焼成良好。	胴部丸残



1. 黒褐色土(ローム含)  
2. 黄褐色土  
3. ロームブロック  
4. 黒褐色土(炭多含)  
5. 黒褐色土  
6. 黒褐色土(炭、粘土含)  
7. ロームブロック  
8. 黄褐色土(砂混り)  
9. 黄褐色土(炭含)

第145図 14号住居跡

器種	番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
砥石	22	全長 4.4	幅 3.9cm、厚さ 3.7cm。四面とも利用されているが、主砥面は一面で、裏側は固定のため高台状につくり出されている。	模灰岩製。使い込みにより中央が減って凹んでいる。	
鉄鍤車	23	径 4.9cm 厚さ 2.0cm	表面は沈線により 6 区画され、内部に細沈線による沈刻。	軟質蛇紋岩製。完形。重さ 78g。 モチーフは何を具象したか不明。	

## 14号住居跡（第145図）

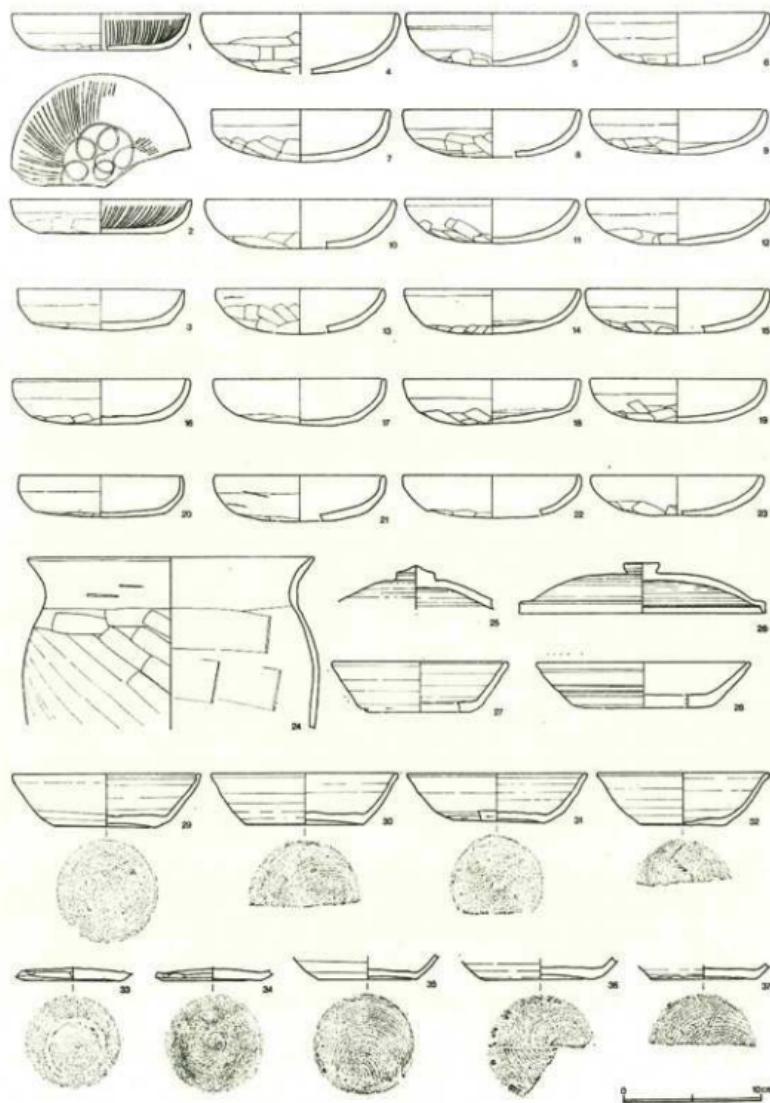
13号住居跡の南側に位置し、本跡のカマド煙道部が13号住居跡を切っている。また北西コーナー部では諸磯a式期の土壙を切っている。東側約1mは南北に走る溝により搅乱されていた。

南北 575cm を測る。東西も同値に近いと思われ正方形プランを呈するものと推測される。壁高は北壁で 70cm 、西壁中央で 58cm 、南壁で 31cm を測る。周溝は検出された範囲では全域に認められた。幅 9~25cm 、平均 10cm 前後で南壁下で幅広くなっている。深さは約 10cm で安定している。カマドは北壁に構築されている。焚口部幅 115cm を測り底は床面より 10cm 前後高い。壁外 60cm で段をもち煙道部となる。煙道部は直線的でなくわずかにカーブし、全長 115cm で先端は 13 号住居跡を切っている。焚口部周辺床面には焼土が薄く堆積していた。床面は南に寄るに従い下がり、南壁下とカマド焚口部とでは 15cm のレベル差がある。

遺物は多量の須恵器、土師器のほか刀子、釘、鉄鍤車が出土している。主に 6 層からの出土であるが、第146図 8、25 がカマド内、33 が床直、第147図 43 が北壁周溝内から出土している。

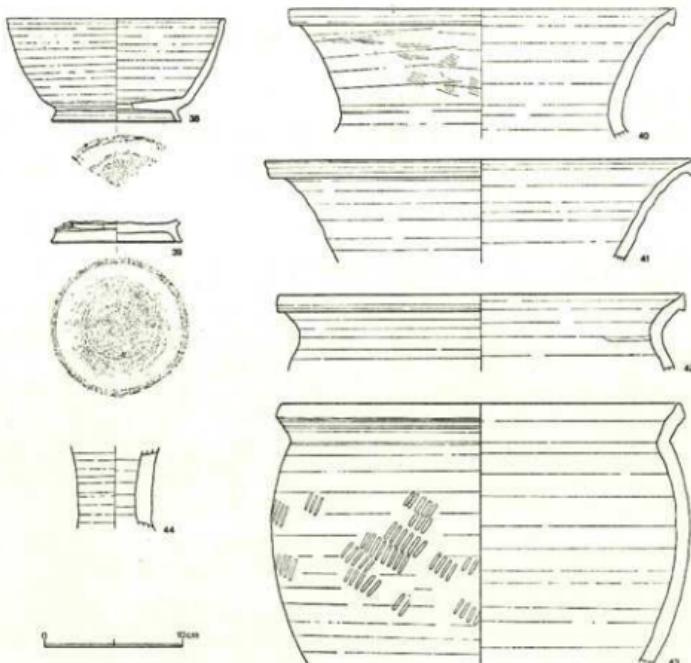
## 14号住居跡出土土器（第146、147図）

器種	番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
土師器 杯	1	口径 13.0 器高 2.7	細い放射状暗文が施されている。 2 は見込みに、らせん状暗文が加えられていた。	口縁部ヨコナデ。底部ヘラ削り。 赤褐色、焼成良。	口縁部のみ
	2	口径 13.2 器高 2.5	らいたり。体部は曲線的に立ち上がり、底部は平底風にヘラ削りされている。		口縁部のみ
杯	3	口径 12.2~14.6	口縁部が直立し稜をもつもの（3 5 ほか）と内縁ぎみに立ち上がる	口縁部ヨコナデ、底部ヘラ削り。	3、18 は完形
	23	器高 2.9~4.4	もの（4、6 ほか）とがある。底 部ちかくはヘラ削りされるが丸底 (4~6 ほか)、平底 (3、20 ほか) 風がある。	暗茶褐色~赤褐色。	他は復元実測。
甕	24	口径 21.0	口縁部がくの字状に外反する。胴 上半が張り、最大径をもつ。	口縁部ヨコナデ、胴部ヨコ、斜ヘ ラ削り。器厚 3mm。赤褐色。	口縁部のみ
須恵器 蓋	25		天井部のみ。	天井部ヘラ削り。25 は酸化炎焼成	
	26	口径 18.0 器高 3.6	天井部平坦。ヘラ削りされている。 つまみは扁平、腰高。	表面灰褐色、内面灰色、26 は灰黑色、 焼成良好堅緻。	口縁部のみ



第146圖 14号住居跡出土土器(1)

器種	番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
杯	27	口径 12.8 器高 3.6 底径 7.4	体部は器厚5mmとぶ厚く、直線的に立ち上がる。	ミズビキ成形。底部周辺部、体部下端は回転ヘラ削りされている。 胎土緻密、焼成良、灰白色。	口縁部1/4
杯	28	口径 15.6 器高 3.3 底径 10.3	底部器厚10mm、体部ぶ厚なつくり。口唇直下外面に浅い凹縞がめぐる。体部整形痕は沈線状。	ミズビキ成形。底部周辺部回転ヘラ削り、胎土緻密、焼成良、暗灰色。	口縁部小片から復元実測。
杯	29	口径 13.8 器高 3.8 底径 7.4	体部直線的に立ち上がり、口唇部は肥厚しわざかに内屈する。底部は上げ底、中央は器厚5mm。	底部回転糸切り後周辺部および体部下端は、回転ヘラ削りが施されている。焼成極良、灰、灰白色。	口縁部1/4欠
杯	30	口径 13.6 器高 3.7 底径 8.4	体部直線的に立ち上がり、口縁上部がわざかに外反する。底部上げ底。底部の厚さは均一でない。	ミズビキ成形。底部回転糸切り。水平に切り離されておらず、底部器厚が一定しない。焼成良、灰白色。	口縁部1/4
杯	31	口径 13.1 器高 3.5 底径 6.6	体部はわざかに内凹する。体部、底部の器厚同一。著しい上げ底。	ミズビキ成形。底部回転糸切り後周辺部および体部下端の突部にヘラ削り(静止?)される。灰色。	口縁部1/4
杯	32	口径 12.5 器高 3.8 底径 6.4	体部内凹して立ち上がり、口縁上部が外反する。底部中央がくぼみ器厚1mm強。	ミズビキ成形。底部回転糸切り。体部ロクロ痕が顯著。暗灰色。焼成良。	口縁部1/4
杯	33	底径 7.0	35~37は上げ底。	底部回転糸切り。33, 34は回転ヘラ削り。33は全面、34は中央部2cm程に糸切り痕をのこす。33, 36は軟質、灰褐色。34は灰白色。35, 37は灰色。焼成極良堅派。	
34	底径 7.0				
35	底径 7.2				
36	底径 7.8				
37	底径 7.6				
高台付 杯	38	口径 15.8 器高 7.5 底径 9.4	体部深く、わざかに内凹し急傾斜で立ち上がる。体部に比し高台はうすく貧弱。接地面は外側端。	底部回転糸切り。高台貼付。内側裾ナデ。黒灰色。胎土緻密焼成良。39は高台貼付に先行して周辺部回転ヘラ削りが施される。黒灰色。	口縁部1/4 底部1/4
	39	底径 9.6	接地面は平坦。丁寧なつくり。		
甕	40	口径 28.0	口縁が大きく外反する。口唇部上	40は軟質、灰色。41はロクロ痕顯著、器厚うすい。黒灰色。42は灰	40~42小片から復元実測。
	41	口径 31.4	下端は鋭い縫となっている。	白色。43は胴部に平行叩き目。黒	
	42	口径 29.6	42, 43は口縁上部がくの字状に外	灰色を呈し、焼成極良。	
	43	口径 29.0	反する。		
壺	44	径 5.5	長頸壺の頭部か。ぶ厚なつくり。	灰色、焼成良。	



第147図 14号住居跡出土土器(2)

## (5) 鉄 器

① 鍔の一部とも見られるが、詳細は不明で、全長52cm前後を測る鍛造鉄製品である。柄と考えられる部分には木質が残存しており、円筒状の柄が復原できる。

柄頭部には3個の円環が鎌状に連なっており、先端は「コ」の字状を成している。柄部から先端へのカーブは曲線ながら銳角を呈している。

② 烧印鍛造品で「中」の形態は整で打ち抜かれている。柄部は焼印のためか9.7cmを測り、木製柄と考えられる装着部は、4.3cmで鋲の進みが少ないので、木質は残存していない。

③ 鉄鎌 現存身幅4.8cmを測る大形品で、飛燕式に属する。逆刺先端は欠損しているものと見られ、端部に抉は見られないものと考えられる。

鎧被は3.4cmを測るが、茎全長は不明である。なお、身には片面に弱い鎌が見られ、刃部は鋭利に加工されており、実用にも充分機能するものと見られる。

④⑤ 钉頭部を折り曲げ、先端には一部木質部が残っている。断面方形。

⑥ 鎧頭式鎌とも考えられるが、片刃でもあり、工具としての鎧と見ることもできる。茎の一部

を欠くがほぼ完形品である。

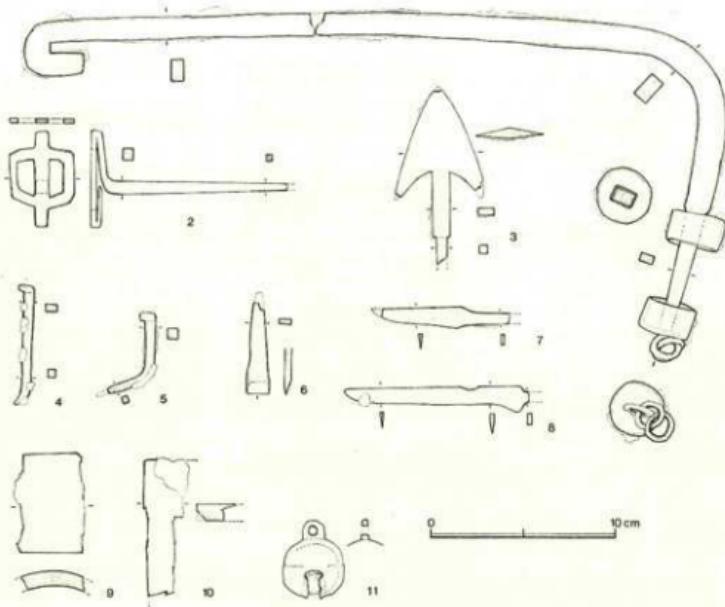
⑦⑧ 刀子 ⑦は小形で身の長4.5cmを測るが、⑧は大形品で、かなり研減が目立ち身幅が狭い。

⑨⑩ 不明 鋳造品で、⑩は整った曲線を描く。

⑪ 銅鉢 全高40.8mm、径33.4mmを測る鋳造品で、内部に径12.5mm程の鉄球が見られる。

銅製のためか保存状態は良好で、現在でも典雅な音をかなでる。

(増田逸朗)

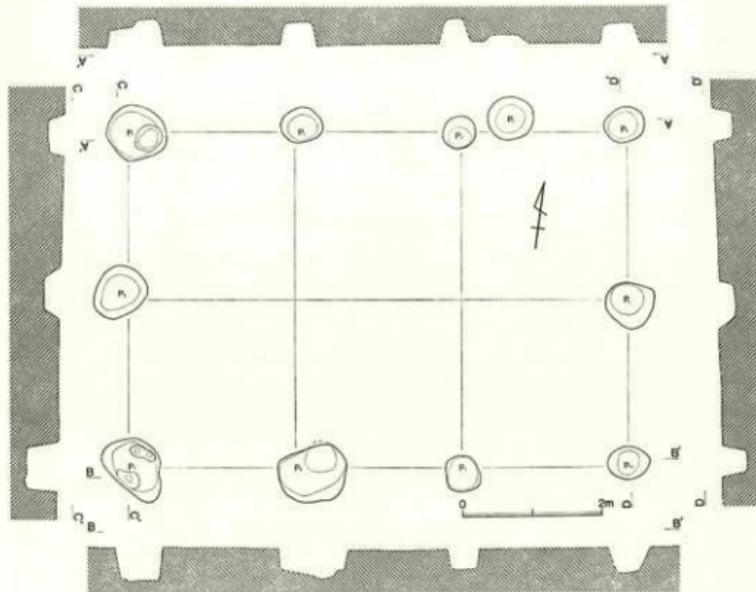


第148図 鉄器・劫鍤車・鈴

## (6) 建物跡

## 1号建物跡（第149図）

台地頂部に位置し10~13-Yグリッドにかけて検出された。住居跡群から約30m離れ建物跡群のうち最も北側に位置している。3間×2間(725×485cm)の東西棟建物跡。主軸はE-9°-N。柱間はほぼ8尺であるがP<sub>1</sub>~P<sub>8</sub>間は270cmと広い。各柱筋は大略そろうがP<sub>1</sub>の柱痕が柱筋上で30cm>P<sub>2</sub>に寄っている。P<sub>2</sub>~P<sub>4</sub>間にはP<sub>11</sub>が掘られているが深さ10cmと浅く、本跡に関連するものか不明。柱掘形にはプラン、規模、深さで2タイプある。すなわちP<sub>1</sub>、P<sub>3</sub>、P<sub>7</sub>、P<sub>8</sub>の大形で梢円形のものとP<sub>2</sub>~P<sub>4</sub>、P<sub>6</sub>、P<sub>9</sub>、P<sub>10</sub>の小形で円形のもの2種があり、前者は深さ40cm前後(P<sub>8</sub>は21cm)後者は30cm前後である。この差は掘り方に携わった主体者のちがいに還元されよう。

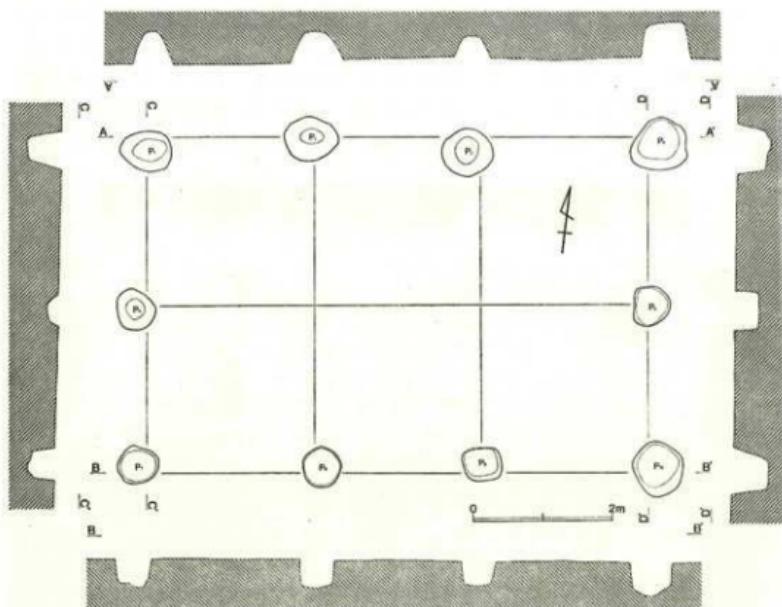


第149図 1号建物跡

No.	大きさ(cm)	深さ(cm)	備考	No.	大きさ(cm)	深さ(cm)	備考
1	89 × 79	40	柱痕あり	7	102 × 70	48	柱痕あり
2	60 × 50	33		8	100 × 80	43	
3	46	33		9	50	28	
4	60 × 50	28		10	61 × 46	35	
5	81 × 66	21		11	63	26	
6	68 × 62	24					

## 2号建物跡（第150図）

1号建物跡の南3mに位置している。3間×2間(725×480cm)の東西棟建物跡。1号跡とほぼ同規模である。主軸はE—7°—N。柱間は8尺等間。桁行南側と梁行東側の柱筋はきれいにとおるがP<sub>4</sub>は内側に、P<sub>5</sub>は外側に寄っている。柱掘形はP<sub>1</sub>とP<sub>10</sub>がやや大きく深い。またP<sub>1</sub>～P<sub>5</sub>は壁が緩傾斜を示すのに対しP<sub>6</sub>～P<sub>10</sub>は垂直に近い立ち上がりで掘られている。

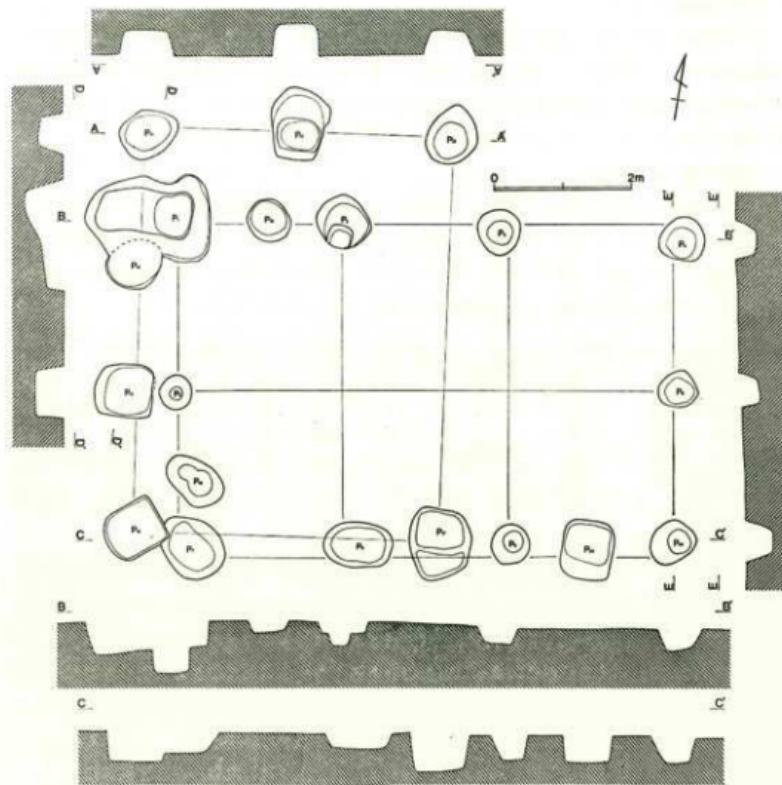


第150図 2号建物跡

No.	大きさ(cm)	深さ(cm)	備考	No.	大きさ(cm)	深さ(cm)	備考
1	74 × 58	48		6	58 × 52	33	
2	79 × 64	42		7	60 × 54	40	
3	67	56		8	56	41	
4	87 × 72	50		9	55 × 46	31	
5	60 × 54	14		10	79 × 71	47	

## 3号建物跡（第151図）

2号建物跡の東2.5mに検出された。3間×2間(720×450cm)の東西棟建物跡。主軸はE—9°—N。柱間は8尺等間。柱掘形はP<sub>1</sub>、P<sub>7</sub>、P<sub>8</sub>が大形で他は小さい。P<sub>5</sub>は柱痕が認められた。深さはP<sub>1</sub>が74cmを測るが他は平均30cm前後である。西半で3A号建物跡と重複している。調査時では3A号建物跡を本跡に付属する柱穴群と考えていたが図面操作により重複と判断した。そのため柱穴の切り合いの確評を怠ったが、P<sub>1</sub>とP<sub>14</sub>の関係から本跡が後出するものと考えている。



第151図 3・3A号建物跡

No.	大きさ(cm)	深さ(cm)	備考	No.	大きさ(cm)	深さ(cm)	備考
1	183 × 110	72		11	87 × 78	34	
2	76 × 70	33		12	104 × 75	48	
3	66 × 61	23		13	90 × 71	34	
4	66	31		14	84 × 70	25	
5	50	30		15	83 × 76	41	
6	54	28		16	86 × 72	44	
7	104 × 80	30		17	100 × 90	52	
8	100 × 66	22		18	64 × 56	33	
9	57	36		19	90 × 58	28	
10	68 × 56	37		20	85 × 75	38	

## 3 A号建物跡（第151図）

3号建物跡と重複する。前記の経緯で判断した建物跡。3間×2間(585×450cm)の南北棟建物。柱間は桁行6.5尺、梁行7.5尺。桁行柱筋はN—7°—Eで1～3号跡の妻筋とほぼそろう。梁行南妻中央の柱穴は不検出。柱掘形は橢円形と方形のものがあり、うちP<sub>2</sub>、P<sub>3</sub>は二段掘りされている。P<sub>1</sub>の東に等柱間をおいてP<sub>5</sub>があり規模、深さがP<sub>3</sub>、P<sub>4</sub>に近く本跡に伴うことも考えられる。

## 4号建物跡（第152図）

2号建物跡の南3mに位置している。台地肩部にあたりプラン確認面において上下で約20cmのレベル差がある。2間×2間（一辺420cm）の総柱建物跡。軸は真北をとる。柱間は6尺等間。柱掘形は梯形橢円、不整橢円と様々であり、径90～150cm。深さはP<sub>5</sub>が23cm、P<sub>4</sub>が15cmと浅いが平均40cm。P<sub>1</sub>とP<sub>2</sub>には柱痕が認められ、底部には灰青色の粘土がつめられていた。

No.	大きさ(cm)	深さ(cm)	備考	No.	大きさ(cm)	深さ(cm)	備考
1	126 × 95	50	柱痕あり	6	80 × 70	42	
2	84 × 78	38		7	142 × 70	38	2段掘り
3	92 × 75	45		8	104 × 94	13	
4	154 × 116	54	2段掘り	9	115 × 97	46	柱痕あり
5	105 × 85	24					

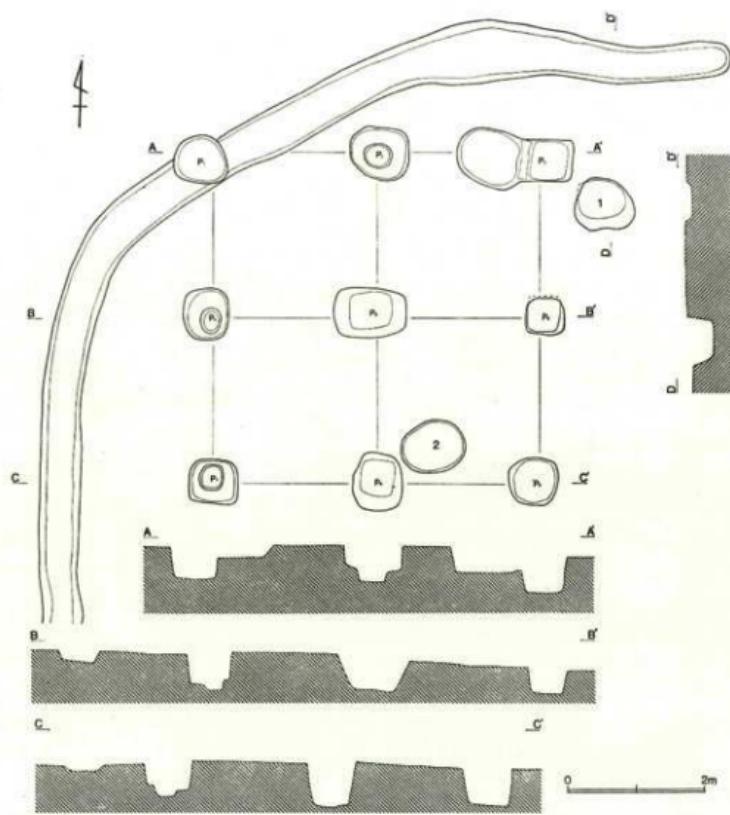
## 5号建物跡（第153図）

4号建物跡の西7mに位置し集落の北西から西部に走る溝を切っている。2間×2間(480×480cm)の総柱建物跡。軸は真北をとり4号総柱建物と平行する。柱間は8尺等間。柱掘形は方、長方形で規模は58～105cmと差がある。深さは34～54cmで平均40cm。P<sub>2</sub>、P<sub>4</sub>、P<sub>5</sub>には柱痕が認められ柱筋がきれいにとおる。南側に1～1.5m離れて3～5号土壤が検出されている。そのラインは本跡と異なるが、その間隔は約180cmで柱間隔と等しく、また深さは18～25cmとはほぼ一定しているため関連する遺構とも考えられる。

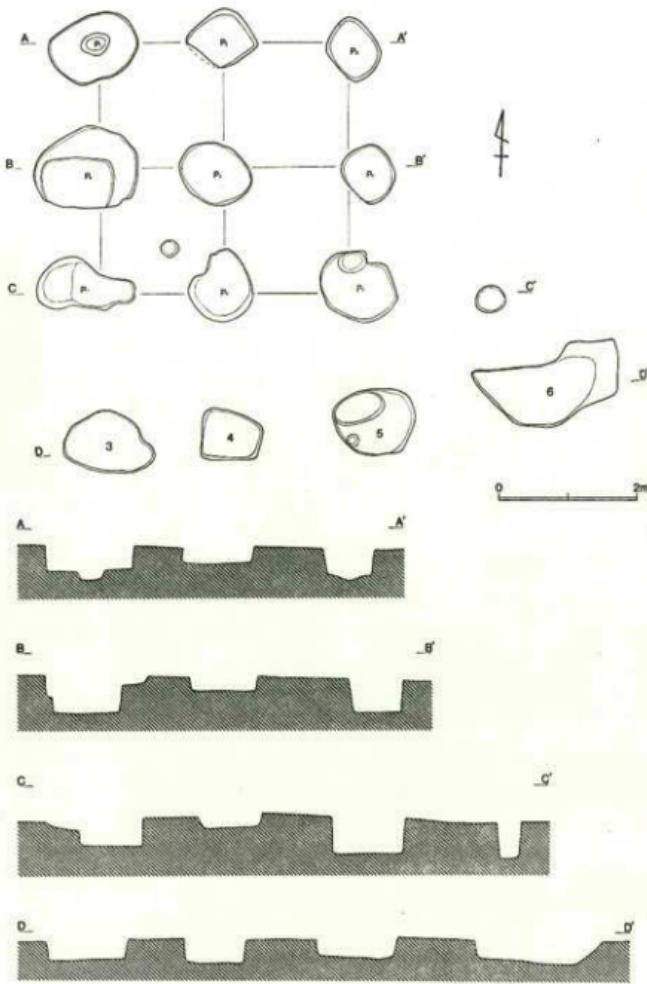
No.	大きさ(cm)	深さ(cm)	備考	No.	大きさ(cm)	深さ(cm)	備考
1	82 × 74	46		6	56	34	
2	85 × 74	51	柱痕あり	7	71 × 65	49	柱痕あり
3	170 × 82	55		8	84 × 72	54	
4	73 × 67	52	柱痕あり	9	73 × 68	46	
5	106 × 74	48					

## 6号建物跡（第154図）

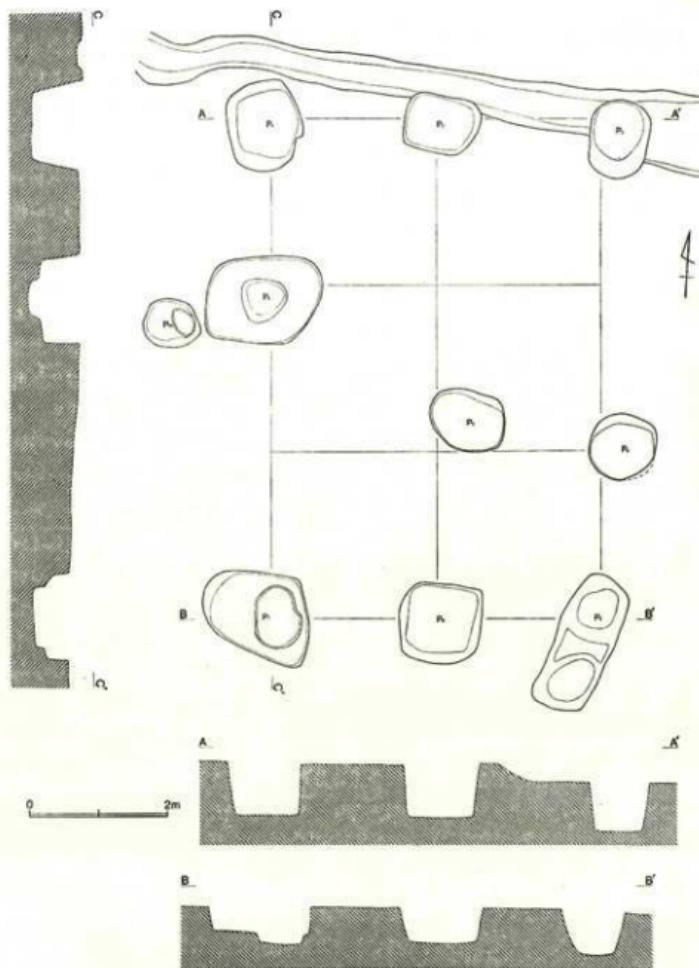
3号建物跡の南3mに位置している。3間×2間(720×480cm)の南北棟建物跡。主軸はN—4°—W。柱間は8尺。桁行西側の南1間目、東側北1間目の柱穴は検出していない。柱掘方は方、橢円形で100～170cm、深さは43～86cmと不規則であるが南北地表面に約50cmのレベル差があり底の標高はほぼ一致している。P<sub>2</sub>、P<sub>3</sub>は集落北側に東西に走る溝を切っている。



第152図 4号建物跡



第153図 5号建物跡

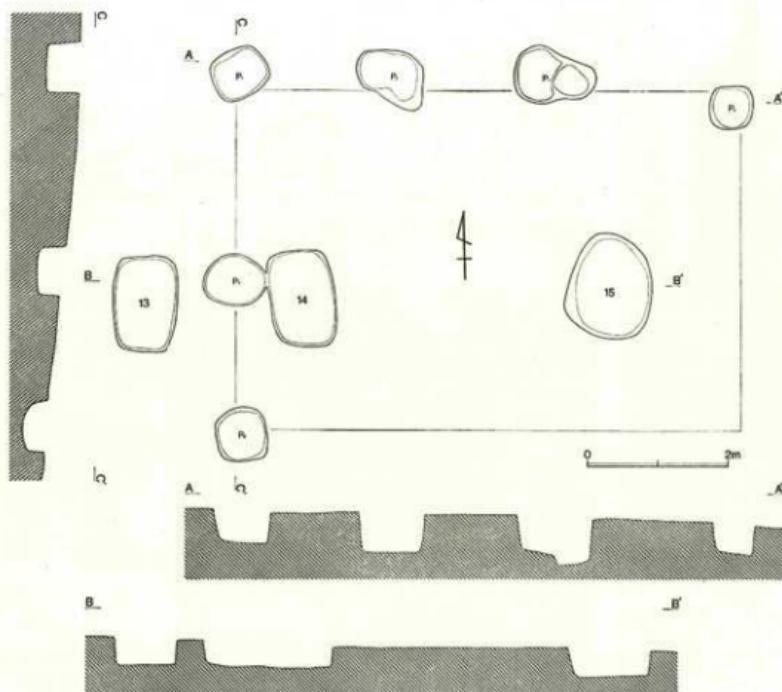


第154図 6号建物跡

No	大きさ(cm)	深さ(cm)	備考	No	大きさ(cm)	深さ(cm)	備考
1	129 × 109	74		6	95	52	
2	108 × 83	77		7	170 × 123	52	2段掘り
3	114 × 86	86		8	120 × 115	43	
4	168 × 125	75	柱痕あり	9	206 × 84	52	
5	116 × 87	16		10	83 × 70		レベルなし

## 7号建物跡（第155図）

3号住居跡の北側に隣接している。3間×2間(715×480cm)の東西棟建物跡と推測される。長軸はE-2°-S。桁行南側はP<sub>6</sub>、梁行東側はP<sub>4</sub>のみで他は検出していない。柱間は桁行北側で8尺等間、梁行西側は7尺と9尺。柱掘形は円、椭円形で60~115cm、深さは30~66cm。P<sub>1</sub>~P<sub>4</sub>が深く平均58cmであるが、P<sub>5</sub>、P<sub>6</sub>と底の標高はほぼそろう。

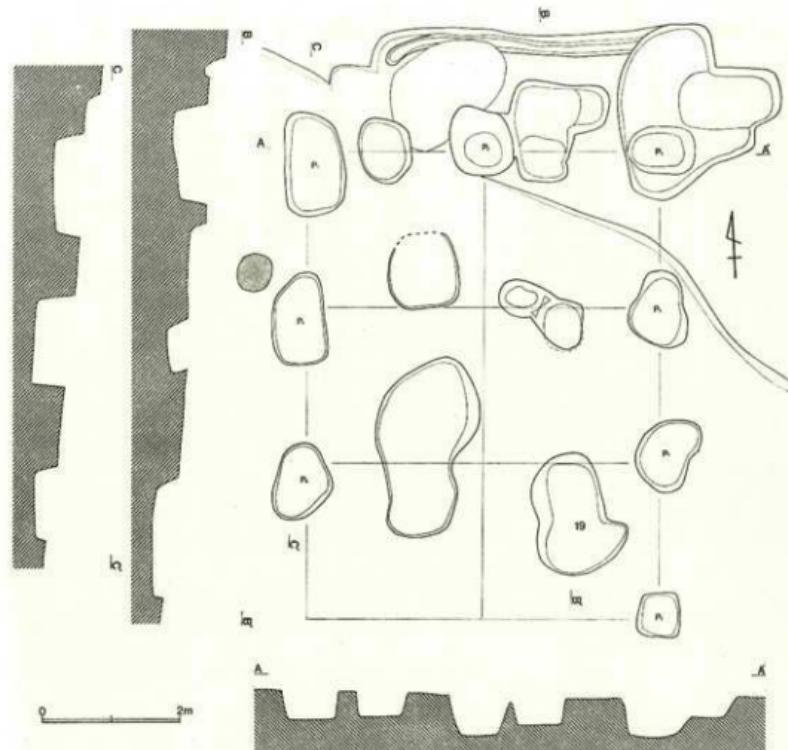


第155図 7号建物跡

No	大きさ(cm)	深さ(cm)	備考	No	大きさ(cm)	深さ(cm)	備考
1	81 × 70	66		4	62	47	
2	110 × 71	55		5	94 × 74	32	
3	116 × 82	64	2段掘り	6	75	30	

## 8号建物跡（第156図）

9号住居跡の南半を切って構築されている。多くの落ち込みがからんでいるため不明瞭であるが  $P_1 \sim P_4$ 、  $P_5 \sim P_7$  の並びから 2間 × 3間 ( $485 \times 720\text{cm}$ ) の南北棟建物跡を考えている。南側中央の柱穴を欠く。軸は N— $3^{\circ}$ —E。柱間は 8 尺等間。柱掘形は  $P_1 \sim P_4$  が椭円形、  $P_5 \sim P_7$  が長椭円形、深さは北側列が 41~53cm と深く、南側  $P_5$ 、  $P_7$  は 25、 22cm と浅い。 $P_6$  の北寄りで焼土跡を検出している。径 50cm、層厚約 5cm。



第156図 8号建物跡

No.	大きさ (cm)	深さ (cm)	備考	No.	大きさ (cm)	深さ (cm)	備考
1	150 × 88	41		5	102 × 91	31	9号住と重複
2	101 × 88	55		6	111 × 83	23	
3	98 × 67	53	9号住と重複	7	110 × 80	28	
4	133 × 77	52		8	62	20	

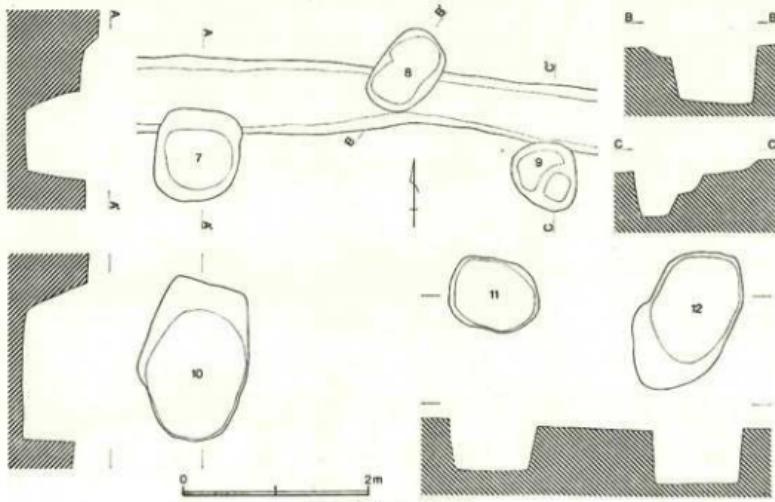
## (7) 土 壤

発掘区東南部、集落の北、西を走る溝の内側で計33の土壤が検出された。これらの中には1~6号13~15号、19号土壤のように4、5、7号建物跡と重複あるいは接近して検出され建物跡と有機的な関連をもつと推測されるものも含まれる。16~33号土壤は住居跡間に検出されている。

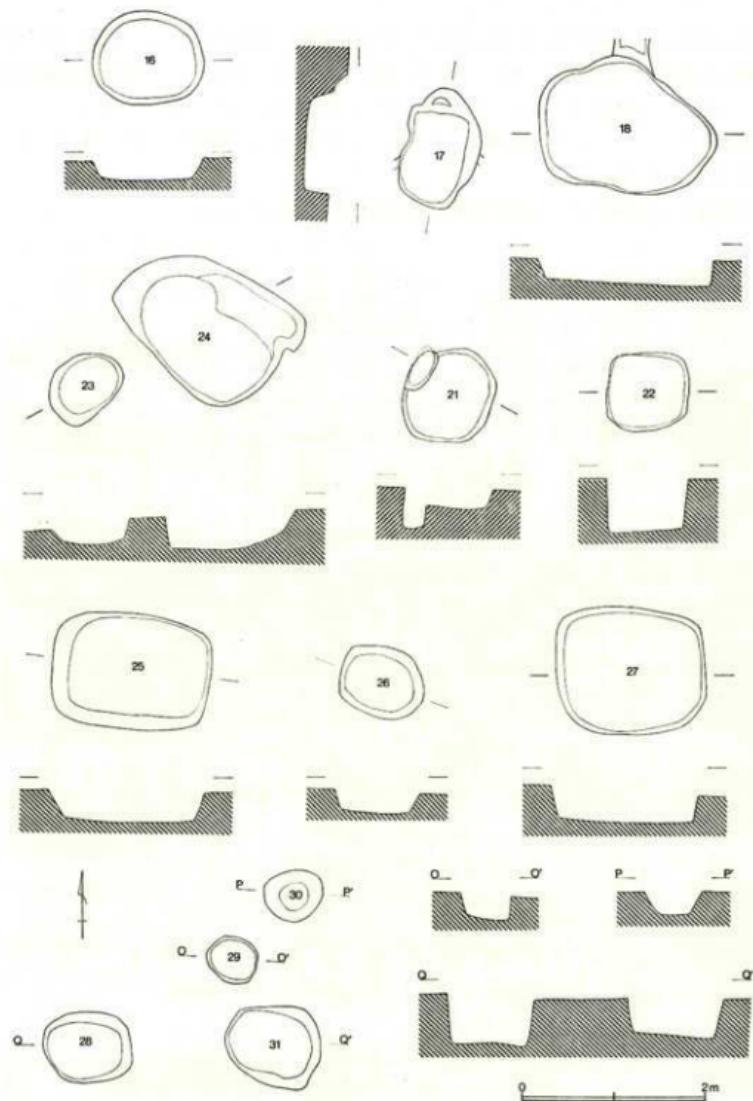
遺物は少く10、17、22、24号土壤から土師器、須恵器、陶器小片を得ているにすぎない。

各土壤のデータは次表のとおりである。

No.	押図No.	規 模(cm)	深さ(cm)	備 考	No.	押図No.	規 模(cm)	深さ(cm)	備 考
1	153	86 × 75	45		17	158	131 × 79	29	N-8°-E
2	153	94 × 76	25		18	158	192 × 162	36	N-43°-W
3	152	133 × 88	21		19	156	175 × 98	25	
4	152	98 × 74	35		21	158	100 × 103	18	
5	152	119 × 94	22		22	158	89 × 85	58	
6	152	213 × 80	30		23	158	86 × 76	19	
7	157	97 × 91	57		24	158	186 × 155	38	N-57°-W
8	157	95 × 68	56		25	158	174 × 125	49	N-25°-W
9	157	80 × 69	17		26	158	88 × 78	22	
10	157	178 × 121	43		27	158	163 × 140	34	
11	157	98 × 79	50		28	158	96 × 79	55	
12	157	163 × 99	49	N-39°-E	29	158	55 × 52	26	
13	155	137 × 91	34	N-3°-E	30	158	63 × 56	25	
14	155	138 × 93	33	N-3°-W	31	158	104 × 87	42	
15	155	150 × 125	31	N-5°-W	32	141	132 × 128	20	
16	158	121 × 102	21		33	141	177 × 88	17	N-58°-W



第157図 土 壤 (1)

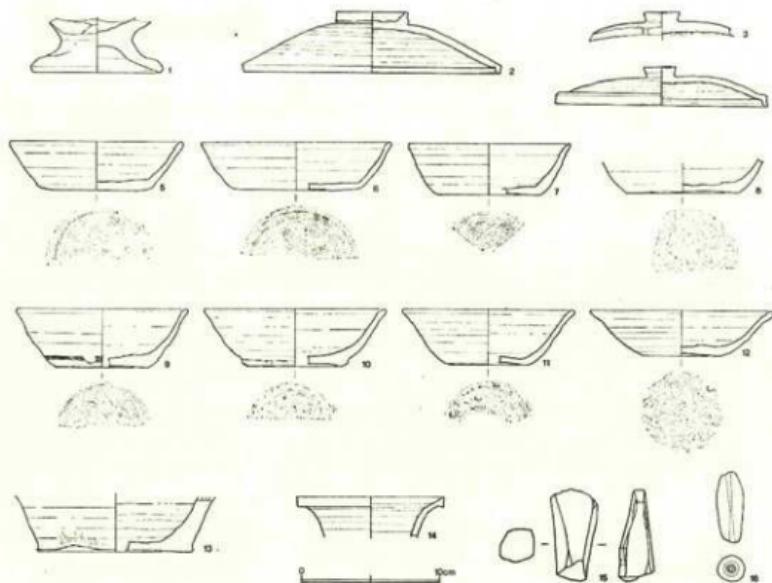


第158図 土 壤 (2)

## (8) 溝 (第76図・図版22)

2-1 Gから24-1 Sにかけて検出された。集落の北および西側を画するようにのびており4号建物跡の北側で13.5mにわたり開口している。北西コーナー部で5号建物跡、北側で6号建物跡に切られている。西側溝の幅は60~70cmではば一定しており、深さは12~20cmで南下するにしたがい浅くなり24-1 Sで止まる。北側溝は幅50~80cm、中央で最大113cmを測る。深さは5~15cmと西側よりもわずかに深い。

遺物は5号建物跡の北と北側溝で須恵器坏（第159図6、12）が出土している。



第159図 溝・グリッド出土遺物

器種	番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
土師器台付甕	1	脚部径 9.6	台付窓脚部、ぶ厚なつくりで器面に凹凸が目立つ。	脚部ヨコナデ、赤褐色。	
須恵器蓋	2	口径 18.8	高台状のつまみがつく。天井部へラ削り。裾部へは直線的に移行。	つまみ部端は、光っている。裾部内面に自然釉が出ている。暗灰色。	16-1 S
	3		3、4天井部はヘラ削りされ平組灰。		12-1 M
	4	口径 15.3	つまみ小さく扁平、腰高。	暗赤褐色。	

器種	番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
坏	5	口径 12.6 器高 3.5 底径 7.9	体部は直線的に立ち上がる。口唇部はわずかに肥厚し丸味を帯びる。底部器面が $2.7 \times 2$ cm の範囲が剥落しており、この中に "モミ" 痕がのこる。器面剥落は焼成時による。	ミズビキ成形。底部回転糸切り後全面回転ヘラ削り。削りは浅く部分的に余切り痕がのこる。体部下端にも面取りヘラ削りが加えられている。黒灰色、焼成良。	20-1 K 口縁部%
坏	6	口径 13.9 器高 3.5 底径 9.1	体部はほぼ直線的に立ち上がる。口唇部はわずかに肥厚する。底部体部とも器厚は均一。	ミズビキ成形。底部回転糸切り後中央部を除き回転ヘラ削り。灰白色内面は一部淡いあざき色。焼成良。	溝 口縁部%
坏	7	口径 11.8 器高 3.7 底径 7.4	小形坏。体部は直線的。下半ではふ厚く、口唇部はうすくなっている。上げ底ぎみ。	ミズビキ成形。底部回転糸切り。青灰色、焼成良。	口縁部%
坏	8	底径 8.2	上げ底。4 mmとうすい。	底部回転糸切り。青灰色、焼成良。	20-1 O
坏	9	口径 11.4 器高 4.3 底径 6.8	口径に比し器高が深い。体部中程で彎曲する。口唇部はわずかに外反する。見込み中央がくぼむ。	ミズビキ成形。底部回転糸切り。体部下側に切り離しの際、入れ損じた糸痕がのこる。軟質、灰褐色。	口縁部%
坏	10	口径 13.2 器高 4.1 底径 7.0	体部内凹し、口唇部が外反する。体部、底部ともふ厚なつくり。上げ底ぎみ。器面に小孔が目立つ。	ミズビキ成形。底部回転糸切り。青灰色、焼成良。	口縁部%
坏	11	口径 12.5 器高 4.0 底径 6.0	体部下側が曲線的で口縁上部がわずかに外反する。底部は 4 mm とうすく上げ底。	ミズビキ成形。底部回転糸切り。軟質、灰褐色。	口縁部%
坏	12	口径 13.3 器高 3.3 底径 5.6	体部は内凹ぎみに立ち上がり、口縁上部が外反する。上げ底。底部中央はくぼみ器厚 4 mm とうすい。	ミズビキ成形。ロクロヒキアゲ痕顯著、8 ピッチ前後でひきあげている。黒灰色、焼成良。	溝(21-1 G) 口縁部%
甕	13	底径 11.2	成形時、自重により底部が外側にめくれ出している。	胎土に多量の小石(6 mm 大まで)を含む、黒灰色。	9-1 H 底部%
長頸壺	14	口径 10.4	灰釉長頸壺口縁部。大きく外反し上下端は尖がる。	ロクロ痕顯著。釉は内外面にかかり、一部は白濁化している。	16-1 S 口縁部%
砥石	15	全長 6.6	最大幅 3.3 cm、厚さ 2.5 cm。良く使い込まれており、中央部は 0.8 cm。砥面は都合 5 面。	模灰岩製	表採
土鍤	16	全長 5.1	径 1.9 cm。表面の剥落が著しい。孔は両端で太く(0.5 cm)、中央で 0.2 cm と細い。	胎土に多量の小石を含む。雜なつくり。	

陶磁器（図版69）

1は染付白磁、大陸産か。碗底部で見込み部は0.8cmと厚い。2～4は中国製青磁。2、3は竈泉窯系の碗で、鎬ぎにより蓮弁を表出している。釉は厚くかかり淡緑色に発色している。器面凸部はすれ。が著しく光沢を失っている。4は釉調が2、3と異なり灰色がかった淡緑色を呈する。明代にまで降ると思われる。見込み部は器厚1.5cmと厚く、高台径は6cm強と推測される。釉は高台内側を除き施されており貫入が著しい。

5～10は美濃製鉄釉天目茶碗。5～8は口縁部片。5は上半に稜をもち、口唇部はわずかに外反する。体部下半は曲線的。6～8はくびれ、稜をもたず直線的に立ち上がる。9は底部ちかくが露胎のまま。胎土は5、7、9、10が黄味がかった灰白色。6、8は灰色でやや硬質である。色調は黒色、黒褐色が基調となるが、6、7では口縁上部内外面がクリーム、飴色に発色している。

11、12は志野。11は口縁上部で大きな段をもつ深目の皿（鉢）。釉は均一でなく濃淡の差が著しい。うすい黄味がかった乳白色を呈する。内面には鉄釉による絵付がされている。器厚1cm、胎土は黄白色。12は高台部片、釉は見込み部のみで貫入がみられる。胎土は黄白色。

13、14は美濃製摺鉢。20は常滑風の甕。器面に凹凸があり自然釉がふいている。

上記の陶磁器は遺構に伴わらず、また集中した分布もみられず、調査区ほぼ全域に散出していたものであった。図示したほかに若干の小片がある。これらのうちでは美濃天目茶碗がややまとまりをみせている。2号住居跡覆土中から検出された小片（第129図9）も同種である。これらのうち数点は11、12の志野とともに16世紀後半に比定される（註）。

（中島 宏）

（註） 酒井清治、浅野晴樹氏の御教示による。

## V 結語

### 1 北坂遺跡の石器群について

#### (1) 石器群の平面分布について

本遺跡から出土した石器群は、東から西に向って突出した丘陵の先端部分に分布している。それらの石器は遺跡全体に散漫的に分布しているのではなく、あるまとまりをもっている。このまとまりをここではブロックと称し、A～Eの計6ブロックを検出した。

また、ブロックが形成された地域の北側には2カ所の集石遺構が検出されている。

これらのブロックから検出された石器及び集石遺構の帰属時期であるが、石器群とともに出土した土器群の検討と近接した東山遺跡（水村他 1980）の調査結果等から撫糸文系土器群の終末期と考えておきたい。しかし、該期の土器群の他に隆起線文系土器、多繩文系土器群、田戸下層式土器、諸巖式土器等々が出土していることから、すべての石器が同一時期の所産とは考えられない。明らかに撫糸文系土器群の時期と異なると思われた石器については、説明の項でそのつど明記した。しかし、一部の石器を除き大部分の石器は大略、上記した時期の所産と考えられる。

さて、本遺跡のブロックの概要は前述してあるが、もう一度簡単にみてみよう。A～Eまで計6カ所検出されているが、後述する内容に対応させるため順不同で説明してゆく。

Dブロックは、舌状に突出した丘陵先端部のはば中央に開けた平坦面に占地している。Dブロックが形成された部分は、調査区内で最も標高が高く、約87.00m～87.50mを計る。本ブロックからはスタンプ形石器2点、礫器2点、削器3点、石皿、磨石各1点、局部磨製石斧1点、打製石斧の破片1点、加工痕、使用痕のある剥片4点が出土している。いわゆる石器の製作中に生じる調整剥片は出土していない。すべて製品として完成されたものだけが本ブロック内に持ち込まれている。特に注目すべきは、石皿と磨石がセットで出土している点である。さらに石錐が1点も出土していないことも注意せねばならないであろう。出土総点数が少ない割にはブロックの範囲が広く、やや散漫な感じを受ける。

C<sub>1</sub>ブロックはDブロックの東約20mのところに位置している。平坦な面がやや東に張り出した部分に形成されており、標高は86.40m～86.50mを計る。立地の面からはDブロックと変わるとろはない。出土遺物としては、削器が5点、スタンプ形石器1点、礫器（戴石）1点、振器1点、石錐1点、他に加工痕、使用痕を有する剥片6点がある。石器としては削器が5点あり最も多い。また本遺跡では2点しか出土していない振器が1点含まれている点も看過できない。出土総数が少ないことはDブロックと同様である。さらに、削器、振器等は他のブロック及びグリッドから出土したものよりも入念に作られているものが多い。

C<sub>2</sub>ブロックはC<sub>1</sub>ブロックの南約18mのところに形成されている。平坦面からやや斜面部にかかる肩部付近に位置する。周辺は傾斜がきついのに対し、C<sub>2</sub>ブロックが形成された部分は、平坦に近いきわめてゆるい斜面ということができる。主な出土遺物としては、スタンプ形石器6点、削器

4点、打製石斧、磨製石斧、搔器各1点、加工痕、使用痕のある剥片7点等がある。削器と搔器はC<sub>1</sub>ブロックとはほぼ同数である。スタンプ形石器が6点と多く出土している点は注目してよいであろう。

また、第79図でその位置をみると斜面上に位置しているかのようであるが、10cmコンタであるので、ほぼ平坦に近いといってよい。

さて、D、C<sub>1</sub>、C<sub>2</sub>の3ブロックをみてきた。これらのブロック間には、共通する面が多くみられる。共通点を列記してみよう。

- ① 丘陵の中央部分に占地し、平坦面あるいは平坦面に近いきわめてゆるい斜面に立地している。
- ② 石器の出土量が少なく、出土状態が散漫的である。
- ③ 石器組成がほぼ共通しており、削器、搔器、スタンプ形石器等が占める割合が高い。剥片にはすべて、加工痕、使用痕がある。
- ④ 石器は比較的入念に作られたものが多く、すべて完成された製品としてブロック内に持ち込まれている。すなわち、石器製造跡ではなく、居住地、あるいは食料再処理場的性格を持っていると思われる。

上記したいくつかの共通点の他にも注目すべき点がみられる。まず、Dブロック、C<sub>1</sub>ブロックの北側には集石遺構があり、両ブロックに付随しているかのようである。しかし、ブロックと集石遺構から出土した資料が接合した例がなく、両者を積極的に結びつけるには、やや明確さを欠いている。したがって、今ここで集石遺構とブロックとの関連を所定の手続きを経ずに、具体的に論ずるのは早計であろう。しかし、接合はしないまでも剥片の形態的特徴、石材が酷似しており、また相互にきわめて示唆的な位置関係にある。さらに、3つのブロックは三角形状を呈するように配されており、三者に挟まれた間の空白地帯は石器分布地域内で最も標高が高く、広い平坦面を形成している。あたかも3ブロックの共通する広場であるかのようである。ここからは石器、剥片等の出土はない。

さて、C<sub>1</sub>、C<sub>2</sub>、Dブロックを通観し、そこから導き出された共通事項をみてきた。これら3ブロックを総称して、本遺跡におけるA群と呼んでおきたい。

次に、A、B、Eの3ブロックを概観する。これらは後述するように、A群とは明らかに様相の異なるものであり、B群と称しておこう。

まず、Aブロックであるが、Dブロックの南約17m～18mに位置している。Dブロックの乗る平坦面は幅をせばめながら南へ伸びるが、やがて急斜面に移行する。Aブロックはその急斜面の部分を中心に分布がみられる。しかし、平坦面にも広がりをみせており、本来の位置はやや北に寄った狭少な平坦地であった可能性もある。主な出土遺物は、石核1点、局部磨製石斧1点、スタンプ形石器2点、疎器4点等があり、特に加工痕、使用痕のある剥片、他の剥片、碎片類がみられる。器種に乏しく剥片、碎片類が大部分を占める。石核が1点あるが接合する資料はない。本ブロックは、削器、搔器等、剥片を素材とした石器がきわめて乏しく、疎を素材とした石器が主流を占めるのが特徴である。これは剥片類の多出という事実と相反する。あるいはここで石器の製作が、行なわれたがそれらの製品はすべて他の地点に持ち去られた結果とも考えられる。

B ブロックは A ブロックの西側に接している。東西に長い帯状を呈する大きなブロックである。南面するゆるやかな斜面上にあり、すぐ南側は急傾斜な斜面となる。前述したように、さらに小ブロックに細分できそうであるが、一線を画するのは難しい。B ブロックからは、本遺跡から出土した石器の大部分の器種がみられ、出土量も多い。石核、礫器、スタンプ形石器、打製石斧、磨製石斧、削器、磨石、砥石、石鐵等があり、他に多量の剥片、碎片が出土している。本ブロックは規模の大きさ、出土量の豊富さで特徴づけられる。さらに、剥片類の数に比して石核が少ない点も気になるところである。他の地点で生産された剥片をブロック内に持ち込み、石器の最終仕上げ作業が行なわれた可能性もある。

次に E ブロックであるが、B ブロックの西側にあり斜面上に分布している。遺物が集中するところのすぐ北に、わずかではあるがフラットな面があり、ここが本来の位置であろう。A ブロックに近接している。主な出土遺物として次のようなものがある。削器 8 点、石核 4 点、礫器 3 点、スタンプ形石器 2 点、局部磨製石器 2 点、局部磨製石斧 1 点、石皿 1 点、有孔砥石 1 点、他に加工痕、使用痕のある剥片 19 点、その他に剥片、細片等が出土している。B 群の中では、出土量が最も少ないが、石核が 4 点と多い。また、本遺跡では唯一の有孔砥石が出土している。

さて、B 群の 3 ブロックを概観してきた。A 群と比較すると、遺物の出土量が多く、したがってブロックの規模も大きい。しかし、注意すべきは A、B 両群の各器種ごとの出土量の差は、さほどない。要は剥片、碎片の量の差に起因しているといえる。さらに、南面する斜面上のややフラットな部分に立地している点が共通しているよう。しかし、石器組成、遺物分布のあり方等に若干の相違があり、各々性格を異にするものと考えられる。つまり、A ブロックは礫を素材とした石器と多量の剥片で特徴づけられ、B ブロックは質、量ともに他ブロックを圧倒している。さらに E ブロックは 4 点の石核と、8 点の削器があり、有孔砥石も見逃せない。

以上、B 群とした 3 カ所のブロックは、きわめて近接した位置関係にあり、いくつかの共通する面をもつものの、それそれわずかに性格を異にすることが看取できる。

ここでもう一度、遺跡全体をみてみよう。A 群は分布範囲の北西部の平坦面に 20m～30m ほどの間隔をおいて占地している。さらに、A 群には付随するかのように、2 カ所の集石遺構がある。B 群は A 群の南西部に位置しており、3 カ所のブロックが隣接する。

さて、本遺跡内に残された集石遺構（2 カ所）、A 群（3 ブロック）、B 群（3 ブロック）の平面的分布からどのような事象が抽出できるであろうか。それには、これらが同一時期に帰属するという大前提がなければならない。その後に当然のことながら土器分布のあり方、各ブロックの石器組成等も合わせて検討されねばならない。さらに、周辺諸地域との比較検討が絶対条件であろう。前述したように、本石器群は燃糸文系土器群の終末期前後に比定される。該期における研究は現在なお土器が主流であり、石器群の平面分布のあり方、石器組成、個々の石器等については、さほど検討されていないのが現状である。したがって、比較検討するデーターがきわめて乏しい。しかし一方では、先土器時代の調査研究方法が、繩文時代のそれにも導入されつつある。そこで、最近管目に触れた調査例をいくつかとりあげてみたい。燃糸文期に限ると、検討できる遺跡がきわめて少ないことがあり、あい前後する時期のものも若干含めた。

まず第1に、東山遺跡（水村他 1980）をあげねばならない。同遺跡は本遺跡から南東約500mの位置にあり、谷を挟んで対峙している。出土遺物としては、本遺跡でも出土している撫糸文系土器終末期の無文土器が多量に出土した。それに伴って削器、振器をはじめ、局部磨製石斧、スタンプ形石器、石核、礫器、尖頭器、石鏃等が発見されている。同遺跡の特徴は200点を越す石鏃と150点余の削器である。それらは同じ地域内から多量の調整剥片とともに出土している。遺跡全体の平面分布をみると、上記した削器と石鏃が集中する部分がブロックを形成しているように見える。ブロックとしての境は必ずしも明瞭ではないが、遺跡の東側に2カ所認められる。やはり斜面上に占地するが、本遺跡のB群にみられるようにフラットな部分に遺物が集中する傾向が窺える。西側はまとまりがなく、散漫である。これは擾乱を受けた可能性が多分にあるが、このような分布のあり方が該期のひとつの様相として認められるかもしれない。集石遺構等は検出されていない。やや地點を異にして、如米C地点で他時期の遺構調査中に該期の石器とともに焼石が出土しているが、関係の有無は不明である。同遺跡は、石器の製作跡的性格をもつ遺跡として把握されている。東山遺跡を乗せる丘陵上には、近接して如米A、B、C地点があり、同時期の石器群が出土している。遺跡を乗せる丘陵は異なるが、ほぼ同時期と考えられる石器群が、直線距離で500m～700mの位置に5地点隣接して存在していることは興味深い。これらの遺跡が同じ時期に属するものと仮定した場合、各地点が同一の集団によって残されたもののか否か、大きな問題を提示している。狭い意味での行動半径を反映するものであろうか。東山遺跡の平面分布及び石器組成等は、北坂遺跡のB群と同じ様相を示しているが、削器と石鏃の出土量に大きな相違がある。それはそのまま、作業内容の違いを明示しているのであろうか。あるいは、いずれかの地域へ短期間の移動をした後、再度当該地域へ帰って来た結果なのであろうか。該期は先土器時代同様、移動生活のくり返しという考えが支配的であるが（石井 1977）、その結果の帰結なのであろうか。あるいは、まったく別の考え方として、異なる集団がほぼ時を同じくして存在したのであろうか。いずれも推定の域を脱しないものであるが、縄文時代の集落、人間集団、生活圏等の論議が活発になっている現在、早期におけるひとつの基礎的資料として同遺跡をとりあげてみた。

上記したように、北坂遺跡と甘粕山遺跡群との間には、密接な関連があると考えられる。それは土器、個々の石器の形態、剥片剥離技術、石器組成等からも明らかである。記述が横道に逸れてしまつたが、このような問題は一朝一夕に解決されるものではない。多くのデーターを集めながら検討してゆかねばならない。

次に、時期は若干異なるが神奈川県寺尾遺跡第1文化層（白石・鈴木 1980）の平面分布をみてみよう。ここでは、21カ所のブロックが隣接して検出されている。ブロック間の境は明瞭でないところもあり、いくつかのブロックを統合して4群に大別して把握できることも示唆している。集石遺構はないが、単独礫が一例検出されている。同遺跡の場合、石器群の検討から「生活址として把握され」しており、さらに同遺跡のような遺物分布のあり方が「一つの生活址の一形態を示すもの」として理解されている。同遺跡は時期的にやや先行するが、平面分布のあり方は本遺跡と若干異なっているようである。本遺跡も基本的には生活跡として捉えられるものであり、両者の相違は何に起因するものであろうか。単に時期的な違いだけではなさそうである。

寺尾遺跡ではブロックをミクロな視点で捉えており、本遺跡の場合と若干異なる。本遺跡のBブロックは寺尾遺跡のように捉えれば、5~6ブロックに細分されようか。現時点では、どちらが妥当であるかわからない。おそらくマクロ的な視点とミクロ的視点の双方を総合して検討されるべきものであろう。

次に茨城県常陸伏見遺跡（小野他 1980）をとりあげてみたい。同遺跡からは、燃糸文系土器群、沈線文系土器群等と共に、局部磨製石斧、スタンプ形石器、磨石、打製石斧、磨製石斧、石皿等が出土している。その分布をみると、遺跡全体にまとまりなく出土しており、特にブロックは形成されていない。器種別の分布をみても同様である。分布図を詳細にみても、ブロックが形成された痕跡は認められない。これは本遺跡、あるいは寺尾遺跡と大きく異なるところである。また、スタンプ形石器、磨石、各石斧類等の礫を素材とした石器が多く、振器、削器等の剥片を素材とした石器はきわめて少ない。さらに、剥片に関しては図示されておらず、記載もされていないことから、礫器を主体とした石器群と考えられる。これも本遺跡とは相反するものである。このことは時期的な違いなのか、地域的なものなのか問題である。あるいはこれが、該期本来のあり方の一様相として把握されるべきなのであろうか。

町田市藤の台遺跡（山田他 1980）も、伏見遺跡と同じようなあり方を示している。つまり、遺跡全体に散漫に分布しており、特にブロックは形成されていない。また、礫器の類が目立つことも同様である。

北坂、東山、寺尾の各遺跡に対して、常陸伏見、藤の台両遺跡の平面分布、組成のあり方は、該期の石器群を大きく二分するものである。上記した諸遺跡の他に、後野遺跡A地区（川崎他 1976）、大平山元Ⅱ遺跡（三宅他 1979）等は、大略前者に属するであろう。

土器出現期以降、石器群の出土状態を図示した報告例が少なく、比較検討する材料に乏しい現在であるが、平面分布に限ってみると、ブロックを形成するものと、しないものとに大きく二分できることがわかった。この両者が本来のあり方として捉えられるとすると、これはそのまま、該期の複雑な様相を物語っているといえよう。該期は居住空間としての竪穴住居跡（群）が本格的に出現する時期であり、その後、長期間にわたって継続する縄文時代集落跡の根幹をなす時期でもある。したがって、明確な竪穴住居跡が検出されていない該期及び、あい前後する時期の遺跡における石器、剥片等の出土状態を詳細に観察することは重要な意味をもってくると考えられる。また、その有意性を認めるという立場をとりたい。これに対し岡村道雄氏は、いくつかの理由をあげながら、「縄文時代の石器の大部分は廻棄（投棄）されたもの（岡村 1979）」と理解している。その理由のひとつに、生活適地ではないところから発見されることをあげ、さらに、ブロック毎の組成、器種分布に有意差がないと述べている。果してそうであろうか。北坂遺跡では6カ所のブロックを前述した理由で二つの群に大別した。そしてA群には2カ所の集石遺構が有機的に関連するものとして把握した。このことは、北坂遺跡を該期のひとつの集落跡として捉えるという前提に立っている。つまり、A群としたブロックは、日常的な生活の場であり、捕獲した動物、採集した植物類の最終的な処理が行われた所と考える。さらにいえば、各ブロックの内部、あるいはその周辺には、竪穴住居跡に代わる簡単な「イエ」が構築されていた可能性も考えている。B群の各ブロックにつ

いては種々の活動の結果と考えられる。例えば、剥片の剥離作業、石器の製作、再生産があげられる。さらには、A群へ持ち込まれる以前の動植物の処理なども考えられよう。あるいは、それら複数の作業が行なわれたというのが実体かもしれない。今後は、各ブロック毎の平面分布のあり方、遺跡全体のあり方等については、より細かな分析を積み重ねてゆく必要があろう。さらに、先土器時代におけるブロックの検討や、竪穴住居出現後の遺物分布のあり方等も合わせて検討してゆかねばならない。

いずれにしても、本遺跡は集石遺構の存在も加味して、A群の3ブロックをひとつの単位とする生活跡として把握しておきたい。種々異論もある。また、問題点を多く内包していることも事実である。

該期の集落跡研究はデーター不足の感があり、本格的な進展はみせていないのが現状である。本遺跡の資料が、当該地域における縄文早期集落跡研究の端緒となるよう、今後努力をかさねてゆきたい。

(水村孝行)

## (2) 加工痕、使用痕のある剥片について

先土器から縄文時代遺跡の調査において、多量の剥片が出土することはよく知られている。その量は組成の中に組み込まれている、いわゆる定形的な石器をはるかに上回る場合が多い。そして、その剥片の中には簡単な二次加工が施されたり、縁辺部に沿って刃こぼれ状の使用痕が認められるものがあることは、周知の事実である。

北坂遺跡においても同様で、A群の各ブロックでは少數であるが、すべての剥片に加工痕、使用痕がみられ、B群においても相当数認められる。

従来、これらの剥片類についてはあまり注意の眼が向けられなかったものの、顕微鏡観察による使用痕、擦痕等の有無、あり方等から機能面の追求が行なわれてきた(中島 1980)。また「不定形第1次剥片は、一時的(極めて臨時の)に石器として使用されることがよくあり、その性質上、刃部の再生が行なわずに放棄される(橋本 1978)。」という消耗品的な石器として捉えられたこともあった。このように、ごく一部の研究者に注意されたことがあったものの、具体的な研究の進展はみられていないのが現状である。

その原因はいろいろあろうが、研究の主体はあくまで石器であり、剥片、細片類は「ハネモノ」として扱われてきたことが第一の要因であろう。それに伴って、データー不足があり、検討材料を欠いていることもあげられよう。いずれにしても消耗品的な価値しか見出せないにせよ、ある種の剥片が「道具」として使用されたことは疑いえない事実である。

そこで次に問題となるのは、使用された剥片が石核あるいは石器の製作過程で生じた調整剥片を副産物としてたまたま利用しているのか、あるいは当初から消耗品的な石器の製作、使用を意図して、目的的にそれらの剥片が生産されたものかということであろう。北坂遺跡だけに限れば、両者とも存在するといえる。しかし、個々の資料を検討してゆくと、むしろ後者例が目立つ。具体的みてみよう。

北坂遺跡からは、搔器、削器類が出土していることは前述した。削器という石器の定義は曖昧で

各報告書の記載を検討して、広義に解釈すると次のようになる「剥片の一部または全周に亘り、片面から二次加工を施したものである」と。これに従って分類してゆくと、本遺跡の場合、削器と加工痕のある剥片との間にどこで一線を画するか難しい資料も出てくる。つまり、削器として分類した石器の一部と、加工痕、使用痕のある剥片そのものは、それ自体大きな差異はないのである。削器あるいは搔器等の石器の素材となるべき剥片だけを生産する特別な剥離技術というものは存在せず、両者は同じ剥離技術をもって生産された剥片を用いているということができる。これは隣接する東山遺跡の資料からも同じようなことが看取されている。

そこで本遺跡では、前述した削器に対する広義の解釈に加えて、次のことを加味して加工痕のある剥片と区別した。つまり「刃部の作出にあたっては急傾斜の剥離が施され、直刃、円弧状、円渦状等に調整される。そして、大部分のものは鋸歯状を呈する。」これでもまだ十分とはいえないが本遺跡の場合、上記した内容を目安とした。

さて、このようにして削器と区別された剥片をみてみよう。それらは「不定形剥片」と称されることがあるように、形態は多種多様である。しかし、詳細に検討してみると、いくつかの共通する特徴が看取できる。最も多くの剥片類を出土したBブロックを例にとってみよう（第90図）。まず大きな特徴は、大部分のものが、疎の表面を直接打撃面として剥片を剥離していることがあげられる。それは片面全面、頭部及びそれに続く側縁に自然面が残されていることから窺える。このような剥離技術は本遺跡に限らず、該期の遺跡には一般的にみられるようである。例えば51、55等の剥片は打撃点付近に帯状に自然面を残すのである。51は側辺に沿って細かな使用痕があり、55は一部に加工が施され、末端部に使用痕が認められる。

頭部及び側辺に沿って帯状に自然面を残す剥片は東山遺跡でも注目され、剥片剥離工程が提示されている。これらの剥片も大略、東山遺跡で看取された剥離技術をもって生産されたものと思われる。本遺跡ではC:ブロックから出土した139、140、Eブロック176、177等の削器が、同じ特徴をもつ剥片を素材として用いている。また、54、57、59、60、62、65等のように、主剥離面、自然面を大きく残す剥片も多く使われている。いずれも縁辺部の鋭いエッジに沿って使用痕が観察されるものである。Bブロックから検出された削器のうち4点は同じ特徴をもっている。

このようにみてゆくと、削器および加工痕又は使用痕のある剥片は、同一の剥片剥離技術から生産され、従って同じような特徴を具備した素材を用いていることを窺い知ることができる。このことは、前述したとおり、同じ工程を経て剥離された剥片のうち一部は入念に調整を施して削器に仕上げ、他のものはそのままか、若干の加工を加えて消耗品的な石器として使用されていることが明らかである。上記したように、本遺跡の場合、加工痕、使用痕のある剥片の一部が目的的剥片として剥離されているという事実を看過できない。たとえ消耗品的に使われたにせよ、何らかの道具として用いられたものであれば、それは石器であり「粗製石器」とでも称すべきものである。まして本遺跡の場合、削器の量をはるかに上回っているのである。しかし、これが該期の一般的な傾向であるのか否か、明らかではない。それは、近年刊行された報告書類に、剥片類がまったく図示されていないか、あってもごく僅かであるというのが現状であり、比較・検討する資料に乏しいといふ一語につきる。

さて、これまで本遺跡における簡単な二次加工、使用痕のある剥片を通観してきた。削器との比較によって、同じ剥離技術から生産された剥片を用いていることが明らかになった。そしてそれは消耗品的な石器として使われた可能性があることが看取された。

次に問題となるのは、このような「粗製石器」とでも称すべき剥片類の石器群中における位置づけである。これらは石器と同等の扱いを受けねばならないことは言うまでもないが、まず大きな歴史的流れの中で把握されなければならないであろう。「不定形剥片が利器として用いられているとすれば、我々は今まで定形的な石器にのみ注目しすぎたのではないだろうか（中島 1980）。」という反省にたち、「粗製石器」が該期石器群中に果した役割を追求してゆきたい。

（水村孝行）

### (3) 北坂遺跡の早期石器群が提示する問題点

前節まで、主として縄文時代早期の石器群について、その概要を述べてきた。ここではそれらを整理しながら、該期石器群の提示する問題点について若干考えてみたい。

まず、石器群の時間的位置づけの問題がある。前述したように、本遺跡から出土した資料の大部分はソフトローム層中から発見され、各時期の石器、土器が同じレベルから混在して検出されている。石器は先土器時代と縄文時代のものに大別され、土器は断続的ではあるが複数の型式が含まれており、かなり時間的な幅が認められる。従って縄文時代の所産とした石器も、すべてが同時期のものとすることはできない。しかし、該期の石器、剥片を各型式ごとに類別することはきわめて困難な作業である。縄文時代石器群の正確な時期決定は、伴出する土器が鍵を握っているのであり、個々の石器、組成、剥離技術等々の検討だけでは各土器型式に石器をあてはめることは、現段階では不可能である。その原因は種々あろうが、本遺跡のようなオープンサイトの場合、包含層が浅く層位学的に上下関係を把握することが困難であることや、土器型式の変化と石器群の消長が対応しないことが主たる要因としてあげられよう。

考古学的調査において時期の決定は、きわめて重要である。しかし、縄文時代の石器群について何は、確実に伴出する土器にその決定権が握られているという宿命を背負っている。

本遺跡の場合、一部の資料を除き大部分の石器を燃糸文系土器群終末期にその時期を置いた。それは、伴出した各型式の土器量、その分布のあり方等の検討に加え、隣接する東山遺跡での調査結果による。同遺跡からは、燃糸文系土器群終末期の無文土器とともに、本遺跡の石器群にきわめて酷似した石器群が発見されている。占地している丘陵は異なるが、直線距離にして400m～500m程の位置にあり、石器の形態、組成、剥離技術等から両遺跡は密接な関係にあったと考えられる。北坂遺跡と東山遺跡を含む甘粕山遺跡群は、数遺跡を統括するほぼ同時期の遺跡群として検討しなければならないであろう。このことについては「平面分布」の項で簡単に触れてある。いずれにしても該期石器群の時期の決定については、大きな課題をかかえているといえよう。本遺跡で燃糸文終末期とした石器の中には、あるいは、古い前後する時期のものが含まれている可能性がある。それらについては、今後の研究状況をみた上で、そのつど改めてゆきたい。

次に組成の問題がある。この問題を論ずる大前提として、個々の石器の帰属時期を明確にする必

要がある。しかしそれも前述したような問題があり、簡単には片付けられない。現状では、東山遺跡あるいは後野遺跡、赤尾遺跡等のように、單一型式の土器が確実に伴出する石器群を抽出し、各時期毎にデーターを蓄積するのが急務であろう。そのような作業を行なう中で、組成さらには各器種の消長を追求し、石器群の時間的な流れを把握してゆく必要がある。

さらに、個々の器種を認定する定義を明確にすべきである。該期の石器群は、広義の礫器としても、剥片石器にしても、器種毎に分類する上で相当難しい資料が多いことも事実である。本遺跡の場合もその例にもれない。例えば、前述した削器と加工痕のある剥片、石核と礫器との絞別は困難であった。特に後者の場合、礫面を直接叩いて得られた剥片が多く使われていることから、石材、剥離の規則性、剥片の観察等多方面から検討したが、結果的には失敗に終った。

器種の認定、分類・整理は組成を論ずる基本のひとつである。分類する者の個人差ができるだけなくし、共通の観点に立った分類を押し進める必要があろう。そのためには、今後多くの益ある議論がなされなければならない。

また、ブロックあるいは遺構毎の組成、それらをいくつかまとめた群としての組成、遺跡全体としての組成等、マクロ・ミクロ両面から検討を加えなければならないであろう。

本遺跡の場合みてみよう。各ブロック、群については先に略述したので、遺跡全体を通観する。狩猟活動に直接かかわるものとして、石鎚があるが、石器群全体の中で占める割合が低い。これは東山遺跡と大きく異なるところである。尖頭器はない。また、石鎚は1点を除き他はすべてB群のブロックから出土している。さらに、石皿、磨石、凹石の類が少ないことがあげられる。これは常陸伏見遺跡、藤の台遺跡からみると奇異な感じさえ受ける。数少ないこれらの石器がA群のブロックから主として出土していることは、注目してよいであろう。

石器群全体の中で主要な位置を占めるのは、打製石斧、局部磨製石斧、スタンプ形石器、削器、「粗製石器」等である。個々の石器の機能については不明な点もあるが、大略、植物採集及びその処理に用いられたものである。小動物群を対象とする狩猟活動よりも、植物採集活動に比重が置かれていることが看取できる。遺跡全体としてみた場合、A群の3ブロックを基本とし、それにB群の各ブロック、さらに集石遺構が付随し、一つの集落を形成していたものと考えられる。むろん、生産活動の主体は遺跡周辺の植物質食料の獲得にあった。

次に問題となる点は、該期研究の主眼が土器に置かれているため、土器以外の研究分野が立遅れていることである。石器群研究については、問題視する以前の事柄であるが、報告書に載る石器がごく一部の資料に限られ、剥片等については一切図示されていないものもあるという現実がある。むろん、すべての剥片、砂片にいたるまで図示するのは諸般の事情でやむを得ぬとしても、できるだけ多くの実測図を示してもらいたい。まして、今後は、剥片剥離技術が問題視されてくると思われる所以、剥片類の検討、図化が必要となろう。このことは、石器の図化だけにとどまらず、平面分布、垂直分布についてもしかりである。このような現状であるから、石器群からみた該期の生産活動のあり方、その時空的相違等については多くの課題が山積されているといえる。

さて、該期石器群のかかえる問題点について、いくつかを拾い上げてきたが、最後にもうひとつだけ取りあげてまとめてみたい。それはやや抽象的になるが、縄文時代早期という時期をどう捉える

か、また、どのような角度から問題点をしほってゆけばよいかという問題である。大きな問題であり筆者自身も未だ確たる考え方を持っている訳ではない。しかし、少なくとも事実として次のようなことが言えるのではなかろうか。つまり、先土器時代から該期まで、さらに該期から前期以降の縄文時代を通じ、人々の生活は切れ目なく連鎖として営まれてきた。これが大前提である。その間、歴史的流れの中にあって大小の波、あるいは節目とでも称すべき時期がいくつかあった。土器の出現などはその代表例といえる。その他、竪穴住居跡の構築、魚貝類資源への積極的な働きかけ、弓矢の出現と尖頭器の減少、土偶の出現等々の事象は、おおむね早期として区分される時期のことである。まさに、縄文時代を通じ最も普遍的にみられるものが、早期にその萌芽が認められるのである。これらの諸事象は表面に現われた一例であり現実には自然的環境の変化、東アジア大陸との交流等の大きな問題も考慮に入れて検討する必要がある。

くどくどと周知の事実を述べてきたが、要は、先土器時代の石器群が時間的流れの中でどのような変貌をとげ、縄文時代石器群を形成するに至ったかを理解するには、早期石器群が重要な鍵を握っているといえるのである。それはそのまま、石器群の変化に伴う生産活動の変化を意味する。

近年、先土器時代、縄文時代における集団、集団の移動、領域あるいは生活圏等々の問題が活発に議論されている（林 1979、近藤 1976、春成 1976、小野 1979、稻田 1977、石井 1977等）。このこと自体は大いに歓迎されるべきことである。だが、先土器、縄文両時代をつなぐ細石刃文化期から縄文早期のそれについてはあまり触れられていない。検討材料の不足からであろうか。

さて、本遺跡から出土した大部分の石器を燃糸文系土器群終末期においた。それは 6 カ所のブロックから成り、各々 3 ブロックずつ A、B 二群に大別された。また、A 群に隣接して 2 カ所の集石遺構もある。それぞれについては前節で少し詳しく述べておいたのでくり返さない。ここでは A 群の 3 ブロックを基調としたひとつの「単位集団」の生活跡として本遺跡を捉えておきたい。本遺跡を残した人々の人数、居住期間、活動範囲、他集団とのかかわり等については、ここでは触れなかった。そのことについてはさらに多くのデーターと時間が必要である。本遺跡を燃糸文系土器群終末期における、ひとつの「集落」形態の一例として把握するにとどめる。

今後は、隣接する甘粕山遺跡群との関連も追求しながら、北関東における該期石器群のもつ問題点を整理してゆきたい。

（水村孝行）

#### 引用・参考文献

- 天野 努 「地盤空穴遺跡」千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告 | 1974  
石井 寛 「縄文社会における集団移動と地域組織」『調査研究集録』所収 港北ニュータウン埋蔵文化財調査事業団 1977  
稻田 孝司 「旧石器時代の小集団について」考古学研究24-2 1977  
梅沢太久夫 「北企地方の旧石器文化」『北武藏考古学資料叢書』所収 枝倉書房 1976  
大林・加藤・小林「座談会・縄文時代の日本の実像を描くために」歴史公論5-2 雄山閣 1979  
岡村 道雄 「縄文時代石器の基礎的研究法とその具体例」『研究紀要』所収 東北歴史資料館 1979  
岡本 勇 「平坂貝塚」駿台史学3号 1953  
岡本 東三 「神子柴・長者久保文化について」研究論集V 奈良国立文化財研究所 1979  
小田静夫ほか「武藏野公園遺跡」野川遺跡調査会 1973  
小田 静夫 「平代坂・七軒家」小金井市文化財調査報告書3 1974

- 小田静夫ほか「仙川遺跡」東京都埋蔵文化財調査報告第2集 1974  
小田・伊藤・ヤーリー編「前原遺跡」ICU考古学研究センター 1976  
小田静夫ほか「新橋遺跡」ICU考古学研究センター 1977  
小野 昭 「後期旧石器時代の集団関係」考古学研究23-1 1976  
小野真一ほか「常陸伏見」伏見遺跡調査会 1980  
加藤・小林・藤本編『日本の旧石器文化』全5巻 雄山閣 1975  
川崎純徳ほか「後野遺跡」勝田市教育委員会 1976  
川崎 純徳 「額田大宮遺跡」那珂町史編纂委員会 1978  
キダー・小田編「中山谷遺跡」ICU考古学研究センター  
紅村・原編「桃の瀬遺跡」坂下町教育委員会 1974  
小林達雄ほか「多摩ニュータウン遺跡調査報告Ⅰ」  
小林 達雄 「日本列島に於ける細石刃インダストリー」物質文化16 1970  
近藤 義郎 「先土器時代の集団構成」考古学研究22-4 1975  
白石・鈴木 「寺尾遺跡」神奈川県教育委員会 1980  
杉原・芹沢 「神奈川県夏島における縄文文化初頭の貝塚」明治大学文学部研究報告考古学第2冊 1957  
鈴木・矢島 「神奈川県綾瀬市報恩寺遺跡の石器群」神奈川考古第6号 1979  
鈴木 忠司 「東海地方における細石刃 文化について」『日本古代学論集』所収 古代学会 1974  
鈴木道之助 「縄文時代草創期の狩猟活動」考古学ジャーナル76 1972  
鈴木道之助 「木戸岬遺跡」千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書Ⅱ 1974  
鈴木 保彦 「本州地方を中心とした先土器時代終末から縄文草創期における石器群の様相」物質文化23  
1974  
芹沢 長介 「神奈川県大丸遺跡の研究」駿台史学第7号 1957  
高木・千葉 「向原遺跡」千葉ニュータウン埋蔵文化財報告書Ⅰ 1974  
田中英司ほか「風早遺跡」庄和町風早遺跡調査会 1979  
戸沢 充則 「矢出川遺跡」考古学集刊第2巻3号 1964  
戸沢充則ほか「下里本邑」東京都東久留米市下里本邑遺跡確認調査報告書 下里本邑遺跡調査会 1979  
長崎 元弘 「中部地方の縄文時代集落」考古学研究23-4 1977  
中島 庄一 「付編・使用痕の観察された器片について」『藤の台遺跡』所収 藤の台遺跡調査会 1980  
橋本 正 「石器の機能と技術」『日本の旧石器文化』所収 雄山閣 1975  
服部・矢島 「春日台・下耕地遺跡」八王子春日台遺跡調査会 1974  
林 謙作 「縄文期の村落をどうとらえるか」考古学研究26-3 1979  
林 謙作 「縄文期の集落と領域」『日本考古学を学ぶ(3)』有斐閣 1979  
春成 秀爾 「先土器・縄文時代の西期について」考古学研究22-4 1976  
水村幸行ほか「甘柏山」埼玉県遺跡発掘調査報告書第10集 埼玉県教育委員会 1980  
三宅 敏也 「大平山元Ⅰ遺跡発掘調査報告書」青森県立郷土館調査報告第8集 1979  
宮下 健司 「土器の出現と縄文文化の起源(試論)」信濃32-4 信濃史学会 1980  
村田文夫ほか「黒川東遺跡」高津図書館友の会郷土史研究部 1979  
山田 實ほか「藤の台遺跡」藤の台遺跡調査会 1980  
吉田・肥留間「狹山・六道山・浅間谷遺跡」東京都瑞穂町文化財調査報告Ⅰ 1970

## 2 繩文土器について

清水谷、安光寺、北坂遺跡から総計約400片の繩文土器が出土した。これらの大半は北坂遺跡の台地南緩斜面から頂部にかけての各グリッドから多量の石器群に混在して出土したものである。時期は草創期から後期（Ⅰ～Ⅶ群）にわたるが、主体となるのは早期Ⅱ群各類である。住居跡は検出されず、北坂遺跡の諸調査式期の土壤が唯一の繩文時代の遺構であった。

以下、北坂遺跡の資料を中心にⅠ、Ⅱ群土器について若干の検討を加えてみたい。

### Ⅰ群土器

草創期に属するもので、次の2種がある。図示した他に本群の疑いのある小片が数片ある。

a種 陸線文系土器に比定され得ると思われるもの（117-1）

b種 繩文（L R、R S）が施されたもの（4～7）

a種は明瞭な文様部分を欠きなお不确定であるが縦走する貼付によらない隆起線がかすかに観察され、微隆起線文の仲間として大過ないと思われる。

無文胴部破片（2、3）も胎土、器厚、焼成からこれにちかいと推察している。

この様式は近年、神奈川県花見山遺跡（鈴木、坂本 1978）、東京都なすな原遺跡、多摩ニュータウンN-426遺跡（原川 1981）等で豊富な資料が検出されているが、県内では横立岩陰遺跡（芹沢、吉田ほか 1967）報告以後、県南ではえんぎ山遺跡（安岡 1969）、ハケ上遺跡（佐々木 1974）渡場遺跡（安岡 1977）等の報告が積まれたものの、県北では本遺跡例のほか、後述する西谷、水久保遺跡に程近い東光寺真遺跡（中島 1980）例だけである。渡場遺跡を除き各遺跡とも遺物量が貧弱で、資料不足の觀が否めない現状である。今後、生活跡も含め良好な資料の検出が切に望まれるところである。ここではa種を隆起線文系様式の末期に位置づけ、資料提示にとどめたい。

b種は多羅文系様式に属するもので西谷遺跡（栗原・小林 1961）の回転繩文、縦条体圧痕文をもつ類にちかい。西谷遺跡の土器群は第1類一爪形文、第2類一繩の圧痕文(1)比較的長い繩の側面圧痕、(2)短繩文の側面圧痕、(3)繩の先端の押圧痕、第3類一縦条体圧痕(1)輪が比較的大いもの、(2)輪は細く縦をまいたもの、第4類一回転繩文をもつものから成り、第1類と第2類(2)、第4類と第2類(3)の同一個体施文例や第3、4類にみられる口唇部施文の共通性から第1～4類は「一型式内に於ける文様のバラエティーとして把握される可能性をもつ」（小林・栗原 1961）とされている。そして、その編年的位置については第2類(2)から本ノ木式にちかく、第4類から室谷洞窟最下層（註1）の土器にちかい位置、すなわち両式をつなぐ段階に比定されている。

本遺跡例は西谷にみられる羽状繩文、明瞭な他の各類土器を欠き小量の斜繩文土器が主なものであるがこれらは西谷第4類の一部にみられる繩文施文後、器面をかるくナデたような“ぼやけた繩文”が特徴的であり、西谷段階に比定することが可能である。

西谷遺跡に近接する水久保遺跡（小林・安岡 1979）の土器群は西谷第1類を欠くことなどから西谷に後続する位置が与えられているが、水久保でも上記特徴をもつ繩文をもち、回転繩文が安定しており、両遺跡が時間差をもったとしても大きな差はなく、同階層にちかい。回転繩文以外の各

類は様相を全く同じくしており(註2)西谷第1類爪形文を欠くことが新しさの指標にはならない。

以上、北坂遺跡のⅠ群土器は貧弱な資料ながら通称鬼玉三山(山崎山、生野山、諏訪山)周辺地域に分布する西谷、水久保遺跡、宥勝寺北裏遺跡(本庄市史 1976、守、古城、高橋 1980)、塚の越遺跡(註3)、東光寺裏遺跡(中島 1980)、如来B、C遺跡(宮崎 1980)、沼端遺跡(註4)等の草創期遺跡群に類例を追加した。

### Ⅱ 群土器

早期に属するもので撚糸文系土器から貝殻条痕文までの1~7類を含む。主体となるのは撚糸文系土器の末期に位置づけられる無文土器(4類)であり、ほかに押型文(5類)と田戸下層式(6類)にややまとまりがみられた。

1類は撚糸文が施文されたもので稻荷台式ないし稻荷原式土器に比定される。総数約60片あるが縄文が施されたものは1割以下で撚糸文が圧倒する。2類一絡条体条痕、3類一無文口縁部も1類にちかい編年の位置を与えることができる。3類のうちc種とした口唇部が外側に肥厚する類は鶴ヶ丘遺跡C区(谷井 1976)の土器群に酷似する。4類は口縁下に一条の沈線がめぐるもので、本遺跡に近接する東山遺跡(宮崎 1980)で良好な資料が単純に検出されている。本遺跡では口縁部10点と少なかったが、口唇部の形態、沈線の位置および施文方法等に各々明瞭な差がありa~e種に分類した。しかし、これら各種はd種を除き、入念な器面整形(みがき)手法が共通しており同一段階に位置づけることが可能であろう。稻荷原式以降、花輪台Ⅰ式前後に比定できる。a、b種は東山遺跡で主体となる特徴的な一群である。c種(断続的施文による沈線がめぐるもの)は本類にあっては特殊な施文例であるが、東山遺跡のほか藤の台遺跡(原田 1980)にも類例がみられ当段階の一部をなすと思われる。

5類押型文は清水谷、安光寺遺跡出土資料を含め総計25片出土している。椭円および格子目が1片あり、他はすべて山形文であった。ほかに中部地方で押型文土器に伴出する縄文が施された土器(74-3)を抽出することができた。

本類に関して最近、撚糸文系土器との関係、編年等について活発な論述が交されている。以下、本遺跡の編年の位置を探る中で、問題点について、若干の検討を加えてみたい。

山形文には胴部縦帯が間隔をおいて施文されるⅠ類(123-100~107)と密接施文されるⅡ類(108~114)がある。前者の文様構成は沢式および樋沢遺跡Ⅰ類の一部にみられる、いわゆる縦・横走する帶状施文にちかいが、沢式の端正な直交する帶状施文と比較すると縦帯が平行せず、施文も不明瞭な部分を残し、空白部が少ない等やや後出する様相がみられⅡ類(細久保・普門寺式)にちかい位置を与えることができよう。施文原体に関してⅠ類は山形の条間一原体に刻まれる溝の間隔がやや幅広で(a種)、これに対しⅡ類は条間がつまる(b種)傾向が観察される。すなわちa→b種の変遷が大旨認められるよう北坂遺跡ではa、b両種を同一原体にきざんだ例(123-99)があることからもⅠ、Ⅱ類の時間的に近接することが窺われる。またⅡ類では施文スペースの拡大に伴い、原体が長くなる傾向が指摘できる。この原体長さの変遷は沢遺跡報告(大野、佐藤 1967)で指摘されているように押型文土器編年の重要なメルクマールの一つになる。

安光寺遺跡で出土した押型文土器に伴出する縄文が施文された土器は、口唇部の形態、縄文原体

器厚、器面整形さらには縦文が口縁部では横位施文であることから燃糸文系J型とは峻別される。樋沢報告でその文様構成の類似から押型文土器との共伴が説かれて久しいが、鈴木道之助氏の指摘される如く、この種の土器はあまり重要視されることがなかった（鈴木 1979）。ひとり林茂樹氏の横山遺跡の報告が光彩をはなつのみである（林 1962）が松島透氏の押型文土器研究史（松島 1968～1969）では正当な評価が与えられなかった。類例は立野遺跡（松島 1957）、細久保遺跡（松沢 1957）、菅平東組遺跡（八幡、上野 1962）、塞ノ神遺跡（笹沢、小林 1966）、棚畠遺跡（宮坂 1971）等にみられるが図示された資料は少ない。中部地方では押型文土器に対し少なからぬ比率（樋沢では有文土器のうち20%強、横山遺跡では42%）で併出するようであり、他に類例は多いと思われる。口唇部形態、口唇上および内面施文の有無、文様構成等に差があり、押型文土器とともにその変遷がたどれそうである。

押型文土器の研究には関東の燃糸文系土器との編年的関係およびその起源に関して、ここ数年めまぐるしい動きがあった。前者については可見通宏氏により原体の検討から「山形文のみの単純な様相の存在を燃糸文系土器の時期」（可見 1969）に比定されて以来、種々論議があったが、二宮神社境内遺跡（加藤、土井ほか 1974）[群] 焼土器をもって押型文、燃糸文土器の併存が明らかになった。これは稻荷原式土器に後続する時期（花輪台1式期）に位置づけられる無文土器に山形文が施文されたものである。また最近、燃糸文と山形文が同一個体に施文された例が報告されている（石神遺跡 鈴木 1977）。阿遺跡例とも原体は比較的短く、上記 a種であるが、二宮例は施文に空白部が狭く本遺跡例にちかい。

押型文の起源については江坂輝弥氏の研究を継いだ形で片岡豊氏によって進められてきた。氏は神宮寺式土器の施文原体の復元、施文法の研究から同式の施文に草創期爪形文系土器との関連を認め、神宮寺系土器（神宮寺、大川、立野式）を草創期押圧縦文、縞条体圧痕文土器の時期に比定した（片岡 1972）。樋沢遺跡の報告者戸沢充則氏はこの案をほぼ追認し、神宮寺式、大川式を草創期多縦文系土器に対比し、立野式を「押圧縦文などが終末を迎える時期、少くとも関東の燃糸文系土器群発生の時期と相前後する古さ」に位置づけた（戸沢 1978）。この編年觀は長らく一部に命脈を保っていたが、もとより草創期爪形文、多縦文系土器自体の検討を欠き、押圧、半回転という施文法とその効果の類似から組み立てられた足場の弱いものであったため、最近、岡本東三氏により片岡氏が抱としたその施文法もろとも先の編年觀は一新された（岡本 1980）。

以上をふまえ関東地方と関りの深い押型文土器の編年と問題点について整理してみたい。まず文様構成について直交する帯状施文→密接施文の変化は樋沢遺跡Hトレンチの層位関係（註5）に依らずとも首肯される文様変化であろう。これと関係し押型文原体の短→長の変化および上述の原体の a→b種の変化が認められる。会田進氏の提示した沢、樋沢、細久保遺跡が保有する山形文原体の長さ一覧（会田 1971）はそのまま各遺跡の前後関係を示しているものといえよう。沢式は0.9～1.7cmで1.1～1.5cmに集中し、細久保式は2.5～3.0cmに集中する。樋沢遺跡例には幅があり第1類土器（樋沢式土器）は1.2～2.5cmで1.6～2.0cmに集中し、少量の沢式を含み、他は2類としたものと共に細久保式に包括されよう。いわゆる立野式は『台風の眼』（戸沢 1979）として学史をにぎわした割には提示されている資料が少ない。いずれにしろ3原体の長さ、器面全面施文からしても

細久保、普門寺式を遡りえないことは確実である。

撫糸文との関係は先にみた二宮神社例から花輪台I式段階ちかくに沢式と細久保、普門寺式をつなぐ時期があることが考えられ、沢式は稻荷台、稻荷原式期前後に比定されよう。したがって先述の押型文土器に伴出する斜縦文をもつ土器の内面および口唇上の施文例を井草式との関連でとらえ、押型文土器の発生を撫糸文系土器の発生期にまで遡らせ、「押庄、半回転の神宮寺系土器が回転縦文の発達した桿の湖I式の影響を受け、回転手法の一般的押型文土器に変遷した」「桿の湖I式土器の周辺部である南関東地方に撫糸文土器が発展し、桿の湖I式土器の分布域である中部地方では桿の湖I式土器に代って押型文土器が発展する」(鈴木 1979)とした片岡氏案に一部立脚した仮説はありえない。関東地方における沢式の類例は少く、東方第7遺跡(十菱 1972)のほか遠く福島県竹之上遺跡(馬目 1980) (註5)等で散見するにすぎないが次の細久保、普門寺式土器は撫糸文主分布域に広範な広がりをみせている。橋立岩陰遺跡(芹沢、吉田ほか 1967)、大原遺跡(吉田 1941)、稻荷原遺跡(安岡 1966)、東山遺跡(宮崎 1980)などのほとんどの押型文土器は北坂遺跡と共に後者に比定されよう。この細久保(普門寺)式の関東地方への進出の背景には、撫糸文系土器様式の堅固な文様構造が稻荷台式以降、器面の無文部分の拡大などにみられるように柔軟、弱体化したことなどが指摘できる。沢式段階では未だ変容する部分が少く、多くが受容されなかつたと推察される。撫糸文系土器の無文化が進む時に密接施文タイプの細久保、普門寺式が拡散する現象は興味深い。両式は花輪台I式段階以降、沈線文系土器をつなぐ位置にあり、三戸式土器との文様構成の類似を考えることも可能かと思われる(土肥 1975、西川 1980)。

以上、乱雑な論を進めてきたが、こうした編年観によると撫糸文前半(井草、夏島)に相当する中部地方の段階に空白が生ずる(鈴木 1979)がこのランクは今後、撫糸文系土器にちかい資料によって充当されるものと推察している。

(中島 宏)

註1 西谷報告の前年(昭和35年)に第1次調査が開始され、ここでの調査成果が「西谷の土器群の位置づけに重要な手掛りを与えた」とされている(小林 1961)。

註2 西谷では永久保の第8種自縫自巻原体B種の回転を欠くことが指摘されている。

註3 1973年、佐藤達夫氏調査、未報告。(安岡 1977)文献で爪形文土器(小林、安岡 1979)文献でナイフ形石器の出土が言及されている。

註4 (小林、安岡 1979)による。

註5 細久保、普門寺式に相当するものも含んでいるようである。

#### 参考・引用文献

- 会田 進 1971 「押型文土器編年再検討一特に施文法・文様構成を中心として」信濃 23巻3号  
 大野政雄、佐藤達夫 1967 「岐阜県沢遺跡調査予報」 考古学雑誌 53巻2号  
 同本東三 1980 「神宮寺・大川式押型紋土器について」 一その回転施文具を中心に一 藤井祐介君追悼記念考古学論叢  
 片岡 隆 1972 「神宮寺式土器の再検討」 考古学ジャーナル №72  
 加藤晋平、土井義夫ほか 1974 「秋川市二宮神社境内の遺跡」 秋川市埋蔵文化財調査報告書 第1集  
 可児通宏 1969 「押型文土器の変遷過程」 考古学雑誌 第55巻 2号  
 萩原文藏、小林達雄 1961 「埼玉県西谷遺跡出土の土器群とその編年的位置」 考古学雑誌 第47巻 2号

- 小林達雄、安岡路洋 1980 「讃文時代草創期における回転施文繩文への一様相 一埼玉県大里郡永久保遺跡」 埼玉県史研究 第4号
- 佐々木俊作 「ハケ上遺跡B地点発掘調査概報」 文化財報告第7冊 富士見市教育委員会
- 笠沢浩、小林平 1966 「長野県上水内郡信濃町塞ノ神遺跡出土の押型文土器」 信濃 第18巻 4号
- 十菱駿武 1971 「東方第7遺跡」 港北ニュータウン地域内文化財調査報告 Ⅰ
- 鈴木重信、坂本彰 1978 「横浜市花見山遺跡の調査」 第2回 神奈川県遺跡調査・研究発表会、発表要旨
- 鈴木道之助 1977 「東寺山石神遺跡」  
1979 「押型文土器と撚糸文土器」 考古学ジャーナル №170
- 芹沢長介、吉田裕ほか 1967 「埼玉県橋立岩陰遺跡」 石器時代 8号
- 谷井 駿 1976 「鶴ヶ丘」 埼玉県遺跡発掘調査報告書 第8集
- 土肥 孝 1975 「針ヶ谷北通遺跡発掘調査報告書」 埼玉県遺跡調査会報告 第26集
- 戸沢充則 1955 「穂沢押型文遺跡」 石器時代 №2  
1978 「押型文土器群編年研究素描」 中部高地の考古学
- 中島 宏 1980 「伊勢塚・東光寺裏」 埼玉県遺跡発掘調査報告書 第26集
- 中村孝三郎 1960 「小瀬ヶ渕洞窟」 長岡市立科学博物館研究調査報告 第3冊  
1964 「室谷洞窟」 長岡市立科学博物館研究調査報告 第6冊
- 西川博孝 1980 「三戸式土器の研究一千葉県舟塚原古墳封土出土土器を中心として」 古代探査 滝口宏先生古稀記念考古学論集
- 林 茂樹 1962 「横山遺跡の斜繩文土器と押型文土器」 信濃 第14巻 3号
- 原川雄二 1981 「八王子市多摩ニュータウン№426 遺跡の調査」 調査・研究発表会Ⅵ
- 原田昌幸ほか 1980 「藤の台遺跡 Ⅰ」 藤の台遺跡調査会
- 本庄市史編纂室 1976 「本庄市史 資料編」
- 松島 透 1957 「長野県立野遺跡の掠型文土器」 石器時代 №4  
1968~1969 「立野式土器の編年的位置について(1)~(7)」 信濃 第20巻 10, 12号、21巻 3~7号
- 馬目順一ほか 1980 「竹之内遺跡の概要」 (財)いわき市教育文化事業団
- 宮坂虎次 1971 「棚畠遺跡」 茅野市教育委員会
- 宮崎頼雄 1980 「甘粕山」 埼玉県遺跡発掘調査報告書 第30集
- 守茂和、古城泰、高橋龍三郎 1980 「有勝寺北裏遺跡」 有勝寺北裏遺跡調査会
- 安岡路洋 1966 「稻荷原」 大宮市教育委員会  
1969 「浦和市えんぎ山遺跡の調査」 第2回 遺跡発掘調査報告会発表要旨  
1977 「小岩井渡場遺跡」 旾能市教育委員会
- 八幡一郎、上野佳也 1962 「長野県皆平東組の早期繩文式文化遺跡について」 考古学雑誌 第48巻 2号
- 吉田 格 1941 「埼玉県大原遺跡調査報告」 古代文化 第12巻 2号

### 3 安光寺1号墓、2号墳について

#### 立地

最高所標高107mを測る諏訪山丘陵は、ほぼ南北に横たわる独立丘陵で、眼下には美里平野を一望のもとに臨むことができる。

美里平野を流れる河川は、志戸川と、この支流である天神川が遺跡直下を北流している。

この諏訪山丘陵に存する古墳を通称、諏訪山古墳群と称し、大小尾根ごとに幾つかの支群に分かれる。

支群は大きく、安光寺、諏訪山、川輪支群に分かれ、川輪支群には、川輪、長坂聖天塚（註1）諏訪山支群には、諏訪1号墳（註2）等内容の判明する古墳が幾つか存在する。

安光寺支群は、今回の2基を含め、7～8基の円墳から成り、南に伸びる小支丘最下位に1号墓、2号墳が存在している。

本墳の立地する支丘は、標高80～82mを測り、眼下の水田面からの比高差10～12mで、水田面や附近に広がる古凍地区的集落からは見上げる様な景観を成す。

古墳の立地は、尾根上位に1号の方形台状墓が、これに近接して直下に2号墳が存在するが、これより尾根南側は急激に落ち、2号墳の立地は尾根先端に位置する感じを受ける。

両墳共に西に急な傾斜を示し、東側がややなだらかな地形のため、周溝は西側に周らず事なく、半月形を呈するが、尾根上位はしっかり掘削し、立地、周溝構築方法共に古式古墳の様相を呈している。

#### 主体部の特徴

内法全長4.50m、幅0.50mを測る粘土塚は、一部南側を攪乱されていたのみで、他は人為的な目立つ攪乱は確認されず、遺物、棺床面の状態は良好であった。

郴と思われる粘土は、基盤地山を削った軟質粘板岩と粘土とが混じり、調査時にはこれを区別する事が不可能で、第64図の様な図面となつたが、あるいは構築者自身も墳丘版築粘土層からしてこの区別が厳密に行なわれていなかつたとも考えられる。

主体部は墳丘のはば中央に位置し、尾根に並行して頭位を決めたものと見られ、本主体部が2号墳構築の第一義的埋葬施設と考えられ、勿論隣接して追葬も見られず、一墳一葬的墓制と見られる。

棺床面のレベルは東側の頭位レベルと、西側では約10cm程の傾斜が見られる。この傾斜は地山そのものが尾根のため傾斜してはいるが、和泉黄金塚古墳（註3）の例の様に3棺全てに傾斜が見られ、いずれも頭位が高い事実からすれば、本古墳も同様な意味が見い出せる。

尚、前山2号墳においても、頭位を朱の出土状態から推定するに東側に置いており、本遺構とも一致する。

遺物の出土状態については、東側頭位に剣、鎗、鉄斧が一括して見られた。直刀は鋒を西に向かって、そして、この直刀を左側に着する様な格好を考えれば、東半分に遺体を埋葬する事が可能であり、西

半分が充分な空間として残る。

本遺構はこの空間部を擾乱されており、ましてここを首長権繼承の場と考えるのは早計であるが、千葉県東寺山石神遺跡（註4）の様に埋葬施設両端に石枕が出土している例もあり、今後、副葬品の配列に十分注意を払えば、前述する行為を実証することも不可能ではないものと思われる。

県内で大形粘土櫛を出土した古い遺跡としては、美里村長坂聖天塚古墳（7m）、本庄市前山2号墳（註5）（6m）、美里村白石1号墳（註6）（6m）が知られており、その規模は内法6～7mを測る。

次に、行田市稻荷山古墳（註7）、東松山市諫訪山1号墳（註8）、川越市下小坂3号墳（註9）、同西原古墳（註10）、春日部市内牧塚内4号墳（註11）、行田市大日塚古墳（註12）が知られている。この内、稻荷山古墳の例は、内法の詳細は不明であるが、掘り方が6mあるので、内法4m前後と考えられる。他の例はいずれも3m内外で、時代が下るに従って小形化している。

県外の遺跡としては、群馬県前橋市天神山古墳（註13）（内法7.8m）、栃木県大樹塚（註14）（5.8m）、茨城県鏡塚（註15）（7.8m）、千葉県新皇塚古墳南郭（註16）（9.8m）、神奈川県白山古墳後円部北櫛（註17）（6.7m）等の諸例があり、これらの古墳は、それぞれの地域での発生期の古墳である。

粘土櫛の規模においては、これら古式古墳は、その内法においても長大であり、他の副葬品からも前2期を示していることが知られている。

県内の大型粘土櫛に関しては、前者よりやや規模も小さく、時代的にはこれより下り、前3期的様相を呈するものと見られる。

又、行田市稻荷山古墳以下のものは内法規模も小さく、5世紀末から6世紀中頃にかけての古墳である。

よって、本遺跡2号墳の主体部規模においては、内法4.5m程で、前述する諸例から前2期のものを県外に当てみると、群馬県前橋市天神山古墳（7.8m）—長坂聖天塚古墳（7m）—安光寺2号墳（4.5m）—稻荷山古墳—大日塚古墳（2m）の順で、大まかにその流れを追う事が出来るが、地域、時代ごとの変遷は、これ程単純ではなさそうである。

いずれにしろ、これらの古墳の副葬品からも前記の粘土櫛の変遷は肯定される事であり、時期的な一つの目安として列記しておきたい。

#### 副葬品

鉄鎌は三角形式と尖根式に大きく分けられる。

三角形式は、鎌身2.2cm、身幅1.5cmで、笠被を有し、茎は6cmである。茎の断面は円形を示し、笠装着部は方形を呈する。形態としては、茎断面が円形等、鋼鎌にその素形が求められそうである。

これに近い鋼鎌形態としては、鎌が片面の定角式に笠被をもつものが滋賀県蒲生郡安土瓢箪山古墳（註18）から出土しており、第66図2、5、7等は片面鎌で、鎌形態でも類似性が強い。

鉄鎌としては、和泉黄金塚西櫛（註19）に類似品が見られ、これは鋒断面菱形で、2号墳出土品にもこれと同様なものがある。

黄金塚の第一義的主体部は中央櫛であろうし、これよりすれば、西櫛の年代は多少下る可能性もある。

り、当安光寺古墳と時間的に大きく隔たる事は無いものと考える。

いざれにしろ、古く森本六爾氏（註20）は、古墳時代の銅鏡を扱い、柳葉形に笠被があるものを後出的なものとしており、本品を銅鏡との関係で捉えておくに異論ないものと考える。

鉈に関しては近年いくつか発見されつつある。

古墳出土品に関しては前山2号、稻荷山、城戸野古墳（註21）等があり、稻荷山、城戸野古墳の例は、裏すきの無い刃部のやや大形品で、古墳の年代から言っても新しい。

前山2号墳のものは、古瀬氏（註22）の編年によれば、Ⅱa型に属し、古墳時代前半期に集中するとしている。

これに対し、本品は、刃と茎の幅が同様な形態を呈し、岡山県隨庵古墳（註23）出土品に近い形態を示すものと見られ、分類的にはⅠa型に属し、弥生時代から出現するものが古墳時代にも引き続いている存在するとされている。

一応、稻荷山第1主体部櫛外品を古瀬編年のⅡbとし、6世紀以降多量に出現するものとして、前山2号、本品等を刃部の小形化と裏すきから4～5世紀に特徴的形態として認識しておきたい。

鉈斧に関しては、斎藤忠氏が「弘法山古墳」（註24）の中で8類に分類し、この内の5種類中の重厚なものに対し、単なる工具ではなく武器としての機能を想定した。

本墳の鉈斧は、全長8cm程で小形品でもあり、又、鉈と接して出土している事より、工具としての機能を重視したい。

これに加え、稻荷山古墳でも第1主体部櫛外から大小鉄斧、鉈、鏃子が一括して出土している。大形有肩鉄斧は16cm、小形短冊鉄斧は8cm程で、小形品においては本品と形態こそ異なるが、大きさに関しては同一である。

稻荷山古墳の櫛外一括品が、全てが工具に関連した品である事は誰も異論無い所であろう。おそらく、全長16cmを測る鉈斧に関しても工具としての機能が第一義的であり、大小の差は、作業部位や工程差による機能分担と考え、最終的仕上げに鉈を用いるものとした。ここでは、本品の小形鉈斧は勿論の事、稻荷山古墳出土の有肩大形鉈斧も工具としての機能を重視して考えたい。

鉄劍に関しては、全長推定45cm程で、比較的短剣の部類に属し、古手の感もある。

形態としては、片闊を特徴として、類例の少ないものである。ちなみに、大きさに関しては、辛亥銘鉄劍の長さは73.5cm程であり、少なくとも5世紀後半の鉄劍より、本品は短いと言える。

白玉に関しては、4個が検出されている。これにガラス玉一個を加え計5個となる。

玉類探索作業は、棺内発掘時は勿論の事、細心の注意を払ったが、原位置では発見されず、全ての覆土を箇にかけた時点で見つかったものである。

主体部の一部に攪乱が入っている事もあり、これらを全てのセットとして認識するにはいさか不安を感じるが、前述した調査方法からすれば、他に玉類は存在しなかったものと考えられる。よって、少々強引ではあるが、ガラス玉1、白玉4、計5個という数字を重視し、当時の宇宙観としての5という数字が理解されていたかはともかく、5個をセットとしての本玉類の存在意義を考えておく。

さらに、鉄鏡出土状態の攪乱をかえりみず憶測をたくましくすれば、三角形と尖根式との数が、

欠損部を復原すれば、10本ずつのまとまりも考えられる。

さて、少々横道にそれたが、白玉の形態的特徴は、穴の径は一定しているが、外径に少々バラつきがある。しかし、いずれも稜を残し、蛇文岩製で、風化しているといえ青味を帯びている。

石製模造品の変遷に対し、小林行雄氏（註25）は、「畿内においては、まず石製模造品が副葬されはじめた当初は、それらは主として碧玉製品として出現したものではないかと思われ、漸次それが滑石製品に移行した。」と推定しており、模造品の色調に対しては、亀井正道氏（註26）が、「一貫して、青い色をした石が選択された……。しかし、五世紀になって儀礼化の促進に伴い、大量の模造品の需要に応じるため、漸次小形、粗造化の傾向が現われ始める。五世紀中葉以降になると、いよいよそれが顕著になり、模造品本来の意義が次第に忘れられて形態も崩れ、青色以外の滑石や他の岩石も使用され、加工のやすさが強調されるに至ったものと推測される。」と述べており、本品の諸特徴から、青色を基調としながら、形態は正しくソロバン玉風な稜線を有するが、石質において滑石に近くなり、亀井氏の言う5世紀代の粗造化の傾向をかくしきれない。

本品に類似する遺物としては、岡部町千光寺遺跡（註27）4号墓壇棺内出土の7個の臼玉が知られている。臼玉は、3個が硬質蛇紋岩で暗緑色を示し、ソロバン玉風に稜線を整えている。他の4個は硬い滑石風で、形が不揃いで荒い削り面を残している。遺構は、方形台状墓で、周溝内からS字口縁台付甕、壺形土器を出土し、壺棺はシャープな口舌部に沈線を有し、胴部球形の壺2個体から成っている。

おそらく、この土器型式からして、方形台状墓は明らかに五領末の様相を呈し、壺棺もこれに後続する和泉Ⅰ期でも極めて古い特徴を備えていることを看取することが出来る。

千光寺の例は、すでに五領末～和泉初頭の段階で、滑石製のくずれた形態の臼玉が伴っていることが判明している。

いずれにしろ、2号墳主体部内出土の臼玉も、この千光寺古墳群の例と差程特徴はかけはなれる事は無く、時間的にも相前後するものと考えられる。

### 土 器

1号墓、2号墳共に土師器高杯が伴出している。

1号墓から出土した土師器は、北溝中央底部に接し、第63図で示す様に脚部のみを欠損する。この土器の特徴は、杯体部に強い段を有し、口縁は大きく開き、比較的深く、口舌端部に浅い沈線を有し、シャープな造りを示す。整形は第一次整形を刷毛で実施し、内外面共に規則的な暗文を施している。

当県北地域で暗文が多く見られる時期は、須恵器無蓋高杯TK23が伴出した事で有名な諫訪遺跡（註28）49号住居跡と相前後する時期であるが、該期の暗文は乱れ、規則性は無く、明らかに当1号墓の手法が古い事は明白である。

諫訪遺跡以前の型式としては、甘粕山遺跡群（註29）如来C地点の資料が参考になる。C地点の高杯は外面に暗文を残すものは少ないが、内面には規則的に施文し、刷毛目を残存させる事も本品と共通した特徴である。

口舌部の特徴に関しては、雷電下遺跡（註30）25号住の高杯に共通した部分がある。この高杯は

脚部が欠損し、全容は不明であるが、同住居跡出土の円筒長脚が接合するものと考えられ、この器形は、しばしば五領終末期に伴出する。

以上、児玉地内出土の土器群と比較してみたが、口舌部、暗文、刷毛等の諸特徴は、明らかに和泉期前半以前にその共通点を有し、坏外面底部の刷毛目や大形坏部やその深さから五領末の様相も窺うことが出来る。

よって、ここでは本品の年代を五領末～和泉初頭としておきたい。

2号墳出土の土器群は、小片4点のみであるが、全て周溝内覆土中から検出され、伴出関係を論じる場合弱い点が多いが、他に前後する時期の土器も見られず、あえて図示してみた。

第65図1は、坏部に段を有し、脚付け根が極めて細くなるを特徴とし、和泉期の高坏でも古い様相を示す。2・3に関しては小片であり、論を進められないが、3は器肉が薄く、外面丹塗りである。4は壺の底部と見られるが、類似品が千光寺5号墳から出土しており、これには和泉期前半の高坏が伴出している。

よって、以上4点の土器の時期は、伴出関係等から和泉期前半の特徴を備えていると言うことができる。

#### 1号墓、2号墳の年代

1号墓の高坏は、口舌部、外面整形、器形の特徴から、五領末～和泉初頭の年代が与えられている。そして、2号墳に至っては、小破片ではあるが、その特徴から土器論的には和泉期前半の年代がこれに与えられている。

主体部の構造に関しては、稻荷山以降的一群より古く、長板聖天塚より、その規模から言って新しいものと推測された。

副葬品の内鉄鎌に関しては銅鎌の系譜にかかるものであり、類例としては和泉黄金塚があり、およその年代が推定され、古式の鉄鎌であることが明らかになった。

鎌は、弥生時代からの伝統の強いもので、少くとも稻荷山、城戸野古墳のものより古式に属し、鉄劍も短剣の部類に入る。

白玉は、千光寺4号墓と比較し、伴出する土器論からも和泉期前半のものであり、玉の変遷からも5世紀前半の特徴が看取された。

以上により、2号墳は僅かな土器と、主体部の構造、副葬品等に、年代的に大きな隔りが無い事が確認され、土器論や立地論からも、1号墓に統いて2号墳が成立し、この間の土器型式や時間差が僅かであることも実証された事と思う。

一応、ここでは一号墓の土器を五領末～和泉初頭とし、5世紀前半でも中頃に、2号墳を和泉期前半とし、5世紀の第2四半期にその実年代を位置づけておきたい。

さて、以上で1号墓、2号墳の出現とこれより派生する墳墓の変遷が提示されたが、ここでは児玉郡内の5世紀代の墓制に焦点を合わせ観察し、これより本古墳群の性格に触れてみたい。

#### 旭古墳群（註31）

上里町から本庄市下野堂にかけて分布する本古墳群は、利根川の沖積地を北にひかえたローム台上に位置し、台地裾から沖積地敵高地にかけては、集落跡が確認されている。

調査は昭和49年に実施され、方形周溝墓13、円形周溝墓1、方墳1が検出されている。

方形周溝墓は、10m以下の中比較的小形なものと15m以上に分かれ、この内、10号は21×22mを測り、碧玉製石鏡が出土している。

16号は一辺28mと大きく、10号と同様小形遺構とはやや離れて位置し、これにはロームブロックの盛土が確認されている。

17号は一辺76mを測り、南側にブリッジを有し北側中央部ではロームの上に1.3mの黒色土が見られ、さらにこの上に0.5m程のロームブロックが盛土されていた。尚、17号墓は、かつて北側墳頂部に箱式石棺が存在していたとの証言もあり、方形周溝墓の主体部が不明な今日、興味持たれる情報である。

ちなみに、当遺跡群に隣接する下野堂字森ノ下の円墳からは、墳頂部下約1mに箱式石棺が露出しており、今後、本古墳の年代が前述する事実と関連し、多くの問題を提起しよう。

#### 大久保山周辺

大久保山の一支丘である塚本山古墳群（註32）中には、9基の方形周溝墓が見られ、1m前後の墳丘が確認出来たものも2基存在する。この内の1基は、22×19mを測り、主体部はローム層で、鉄劍、鉄鎌を出土している。又、ここで注目される形態は、墳丘、主体部、副葬品を有するもの以外に、前方後方形プランに近いものが在存する事である。

尚、方形周溝墓出土の土師器の年代は五領期後葉のものが主体を成している。

同一丘陵内北側には前述した前山1号、2号墳が存在する。2号墳は、丘陵北東端に近い肩部に位置し、古墳付近の標高80m、水田面まで20mを測り、古式古墳特有な立地を示している。古墳の規模は周溝幅8m程で広く、周溝内径28m、高さ3mを測る。主体部は6mの粘土層で、割竹形木棺の棺床面に扁平自然石を2列に敷き並べるのを特徴とし、副葬品として直刀鎌、錐、鎗、劍を有する事で知られ、これに加えて土師器壺形土器が出土している。

これより水田を隔てた眼下、東富田古墳群中には径50m、高さ7mを測る公卿塚（註33）が存在し、ここからは円筒埴輪、土師器壺形土器、石製模造品として有肩石斧3、直刀鎌4、刀子9、臼玉6が出土しており、当地域の古式古墳の目安になっている。

#### 生野山古墳群（註34）

当古墳群は兎玉町と美里村にまたがる最高所130mを測る独立丘陵上に存し、現在100基からの古墳より成る。昭和47年の調査によれば、78号墳といわれる内径14×14m、高さ0.7mを測る方形台状墓が検出されている。これは内側が方形で外周は円形を成すもので、溝内からは20数個の底部穿孔土器が出土している。

古式古墳としては、疊構を有し、黒漆の円筒埴輪を有する円墳や、これに後続する穴窓焼成で横ハケを有する径15~20m程の円墳が存在する。

これに加え、將軍塚古墳（註35）は丘陵の頂上部に立地し、径60m、高さ7mの円墳とも考えられており、墳頂部から長さ2.4×5.2mの竪穴式石室が、墳麓からは箱式石棺が発見されており、これから鉄斧、曲刀鎌、劍が出土している。

生野山丘陵が北に続く尾根上に金鏡神社古墳と鷺山古墳が存在する。

金鐵神社古墳は南面を神社で削平されて、正確な墳形は現状では不明であるが、北側の墳丘から推定するに40m以上の円墳と考えられる。南面削平部からは片岩状の板石が出土しており、さらに墳丘からは5世紀代の埴輪が検出されている。

鷺山古墳は、周辺水田地帯から眺望のきく尾根上に存し、径30m以上の円墳と見られ、墳丘から古式土器が採集されており、前述する立地からも古式古墳と考えられている。

#### 白石古墳群

白石1号墳は、美里村南面山麓から連なる丘陵端に位置し、2基の長大な粘土櫛が確認されたが出土遺物が無いため、年代決定には不都合であるが、その立地からも明らかに古式古墳として認識出来る。これ以前の墓制としては神明ヶ谷戸遺跡（註36）がある。計7基の方形周溝墓が発見され、内8号方形台状墓は一辺20mを測り、主体部は全長2.9mの粘土櫛で、ここから副葬品として白玉、管玉小玉が発見されている。

尚、当遺跡の眼下北方水田中の微高地には、古墳時代の方形周溝墓中に前方後方形墓も見られ、注目を集めている。

#### 諫訪山古墳群

諫訪山と同一丘陵に立地する千光寺古墳群は、方形周溝墓2基、方形台状墓1基、円墳3基、帆立貝式古墳1基からなる。

方形台状墓は、 $20 \times 18$ mで、0.6mの盛土が確認され、立ち上がり部には壇棺が認められ、これについては白玉の所で詳述した通りである。

この台状墓より尾根下位には方形周溝墓2基を切っている円墳が見られ、台状墓が五領末の土器を出土しているのに対し、当5号円墳からは和泉期前半の土器を出土している。

志戸川に面する川輪聖天塚は直径30m、高さ3mを測り、埴輪壺を出土したとして注目されており、近年調査された結果によると、丘陵裾先端を整形し、若干の盛土が認められ、埴輪壺の存在も確認された。

尚、筆者の踏査の結果よりすると、当墳の丘陵上位に接して径15m程の古墳が認められる。

川輪聖天塚から400m隔てた長坂聖天塚は、前者と同様、丘陵裾部西側に位置し、直径50m、盛土1m程の、丘陵を利用した古式古墳の構築方法を示している。

主体部は粘土櫛と直葬の6基を数え、この中の粘土櫛は7mを測る長大なものである。

副葬品としては、方格規矩鏡、珠文鏡、刀子、剣、勾玉、ガラス玉、滑石製（有孔円板、刀子、勾玉、白玉）等が出土している。

諫訪山丘陵上には、諫訪1号墳と呼ばれる全長39mを測る帆立貝式古墳が存し、箱式石棺片、横ハケ埴輪が出土している。

この他、同丘陵上には比較的大形円墳も存し、聖天塚と諫訪1号墳との間を埋めるものが存在するものと考えられる。

尚、本丘陵北方、後櫓沢、石蔵B遺跡（註37）では、美里村の例と同様、方形周溝墓中に前方後方形墓が検出されており、時期的には五領期後葉の土器が出土している。

### 首長墓の変遷

以上、5世紀代の墓制の各地に於ける概要であるが、これを参考に遺構を検討し編年してみたい。旭古墳群中では、大形方形台状墓、特殊墳の時期が問題になる。

10号、16号は少なくとも盛土を有し、方形台状墓的に他の方形周溝墓群からやや隔離し分布している。そして、遺物は径8cmを測る碧玉製鉗を出土し、これは熊野神社古墳(註38)出土品と比較しても劣らぬ優品である。

各遺構から出土した土師器は、壺や高杯で、比較的の遺物量は少なく、本庄市史では和泉期と報告しているが、該期としても極めて古い段階に位置するものと考えられる。

森ノ下の円墳に関しては、私自身も墳丘の箱式石棺を確認したのみで、葺石・埴輪を持つものかも検証しておらず、生野山将軍塚等の箱式石棺との比較の上で漠然と時代を推定しているだけである。

いざれにしろ、本古墳群中に粘土桿を持つ古墳が確認されていない今日、森ノ下の円墳をもって古式古墳として捉えておきたい。

又、一辺76mを測る17号墓の性格が不明ではあるが、この墓制を方形周溝墓中に出現する、石詩B地点等の前方後方形墓と同列ないし後続形態として扱い、そこで、主体部の箱式石棺も隣接円墳との関係で連続的埋葬施設として捉えてみたい。

おそらく、当地では、方形周溝墓や方形台状墓は、五領末～和泉初頭には姿を消し、古式古墳として森ノ下の円墳が出現するものと今のところ理解しておく。

大久保山周辺では、塙本山古墳群内の方形周溝墓や台状墓が五領末葉で終っている。そして、土器論的には、前山1号、2号墳の出現を見る。しかし、この間のどこに鷺山古墳が位置するのかは正確なデーター集積が必要であり現在何とも言えない。

当地区で前山2号墳は初期的古墳である。出土遺物は、直刃鎌や壺形土器で、土師器は和泉式土器でも刷毛目を残し該期前半に位置することは間違いない。

しかし、前述する土器以外に体部の小さな壺が見られ、五領的要素を十分備えており、刷毛目が多い壺をも含め五領末期にまで遡っても不思議ではない。

いざれにしろ、棺床に扁平な石を敷き並べる類例が少ないので、この点の資料の集積が、前述する問題を解決しよう。

よって、前山2号墳は和泉期としても極めて古い段階に位置する円墳として理解しておく。

次に編年される古墳は、平野部に降りる公卿塚である。

当古墳は、初期円筒埴輪を有し、これには浅い縦ハケを施し、伴出する壺形土器は和泉期前半の特徴を備えており、前山2号墳と差程の隔りを感じさせない。

副葬品として検出された石製模造品は、一部本庄市史では庖丁と説明しているが、一辺が直線を成し、その形態から直刃鎌の模倣であることは間違いない。又、これに加え有肩石斧の模造品も見られ形態が粗雑なのはともかく、古い形態を模倣した石製品である。

よって、公卿塚は石製模造品や土師器から、その実年代は5世紀第2四半期中に位置するものと考えられる。

生野山古墳群中方形台状墓は、五領期後葉の土器群を出土している。そして、本地区には粘土櫛を有する古墳は発見されていない。

主体部が疊櫛である円墳群も一部埴輪の特徴から、5世紀中頃に比定されるものもある。

将軍塚は、墳頂部の主体部が竪穴式石室であるが遺物は少ない。墳麓の箱式石棺中からは、曲刃鎌、劍が出土しており、墳丘からは朝顔形円筒埴輪が出土していることから5世紀後半と考えられる。

しかし、あくまでも箱式石棺は二義的意味での埋葬施設であろうし、墳頂部主体部の実年代に関しては不明な点が多い。

白石古墳群に関しては資料が少ない。

神明ヶ谷戸の方形台状墓は、五領末葉の特徴を備えている事より、他と同様、五領末～和泉初頭に古式古墳が出現するのであろうか。

諏訪山古墳群では、千光寺で方形台状墓が、五領末に構築されていた事が、S字状口縁台付甕の特徴から判明している。

この方形台状墓より尾根下位の5号墳からは、和泉式土器を出土している。

千光寺古墳群では明らかに和泉式土器前半期に在来の墓制である方形周溝墓を否定して、この上に古墳が構築されていた事実がある。

長坂聖天塚古墳の7mの粘土櫛からは、方格規矩鏡を出土しており、少なくとも他の伴出遺物から、その築造時期は5世紀初頭の可能性が十分考えられる。

川輪聖天塚からは埴輪壺が出土している。この形態は、宮遺跡1号住居跡の丹塗で長胴化した壺形土器に類似しており、この住居跡は和泉1式とされている。

諏訪1号墳は、主体部が箱式石棺であることと、横ハケ埴輪の特徴から、5世紀後葉に比定され、この段階で初めて児玉地方に帆立貝式古墳が出現することは注目に値する。

以上の古墳群の諸特徴を要約してみると、各地の方形台状墓は大形化し、盛土を有し、あるものは副葬品に古式古墳に負けず劣らない品々を単発的に有していることが確認された。

しかし、後で述べる古式古墳との決定的相違は、鏡、劍、玉、工具といった具合にセットとして備えられない事であり、主体部に齊一性が見られない事実である。

台状墓の変化形態や、大形化に加え、副葬品の優品化の現象は、有力家父長層達の墓制である方形周溝墓から族長層が脱皮、傑出した姿として捉えることができる。

しかし、彼らも未だ共同体規制の中での存在でしかなく、首長層としての地位を確保し、君臨するためには、粘土櫛という首長連合上画一化された遺構と葬送思想を採用することなく首長たりえず單なる内部闘争だけではなく、外因的力の大きい社会状況でもあった。

以上の様な要因として方形台状墓を見わたしてみると、旭、白石、塚本山、諏訪山古墳群等明らかに五領末の台状墓が存在し、これは初期古墳と同時期か、あるいは極めて近い時間差であることが判明したことと思う。

そして、これらの地域は、児玉地方に於ける5世紀代の古式古墳の分布地域もあり、正しく両者共一致し、方形台状墓と初期古墳との関連が有機的に結び付いていることが十分予想される。

これに加え、千光寺4号方形台状墓から5号墳へ、安光寺1号墓から2号墳への変化発展は、副

葬品、併出土器から極めて合理的に実証された事と思う。そして、筆者の実見で、川輪聖天塚も同様な変遷を経る可能性が十分考えられた。勿論、被葬者の一系譜的権力構造の変革を早急にここに求めようとするものでは無いが、今後の良好な資料の増加によっては十分検討出来る遺構現象と思われる。

古式古墳の主体部として、粘土郷は、現在の所、長坂聖天塚の例が最も古く考えられる。そして、県内初期古墳の熊野神社古墳においても同様であり、関東地方においても前述した通りである。

箱式石棺は旭古墳群17号には問題は残るが、将軍塚の例は、あくまで追葬的性格も有し、又、生野山の疊柳も、せいぜい5世紀中頃前後であり、方形台状墓との間には何基かの古墳が入りそうである。

生野山、大久保山では、鶯山、前山1号墳の内容が不明であり、詳細な変遷には触れられないが、大久保山近辺では、前山2号墳の年代を五頭末～和泉初頭とした場合、差程かけ離れた古墳の存在も予想されない現在、前山2号の粘土郷をもって初期古墳に極めて近い主体部と/orすることができる。

以上、初期古墳の主体部に関しては、少なくとも5世紀初頭には粘土郷として採用され、その後、堅穴式石室、箱式石棺、疊柳が出現してくるものと見られる。

そして、疊柳は、5世紀中頃前後に、箱式石棺は確実な例では5世紀後半に出現するものと、前述する諸例から理解できる。

墳形に関しては、今の所、古式古墳と考えられるものは全て円墳である。

諫訪1号墳が5世紀末葉に出現したとしても、この間円墳の時代が続いた事になり、前橋や高崎市周辺とはかなり様相が異なる。

この様な現象を、群馬県で、梅沢氏(註39)は「円墳が出現し、その墳丘形態を伝統的に保持し、小地域圈の形成に関与した古墳である。この種の古墳の造営された地域は、弥生文化の伝統的な地域とその周辺部地域である。」と述べ、鍋川流域など西毛地域を当てている。

これに対し、本児玉地域が氏の思考の延長上で考えられるかどうかはともかく、現在の所、西毛地域と地理的には隣接しており、弥生文化の伝統的云々はともかく、一応大きくは、北関東の一環としての地域圈として、児玉周辺も理解しておきたい。

そこで、当地域に於ける大型円墳の変遷を追って見ると、先ず、5世紀初頭に位置づけられる長坂聖天塚が挙げられる。そして、次期には、大久保山と一体と考えられる直径50mを測る公卿塚が5世紀第2四半期に、そして、5世紀後半には生野山将軍塚が該当し、これ又50mクラスである。

この間、それぞれの地域では次のクラスの円墳が連綿と続くわけで、各地の首長權は決して途だえるわけでは無い。

以上の結果によれば、首長權は各地域で固定する事なく、諫訪山→大久保山→生野山へ、その中心勢力は移動した事になり、正しく、美里盆地やその周辺を含めた利権での首長權の盛衰現象であり、一面では首長連合の性格を如実に示すものであろう。

今後は、5世紀代を、今泉の祭祀遺跡を含め、児玉地方を一地方の小国家と解釈する立場に立ち、古式古墳で内容不明な鶯山、金鏡神社古墳にさらに検討を加え、首長連合の性格と構造を一層明らかにし、歴史法則の一端にせまって行く事を課題としてゆきたい。

(増田逸朗)

- 註1 菅谷浩之、坂本和俊「美里村長坂聖天塚古墳の調査」第8回遺跡発掘調査報告会発表要旨 昭和50年
- 註2 塩野 博「聖天塚古墳」日本考古学年報24 昭和48年
- 註3 森浩一「和泉黄金塚古墳について補遺」「極原考古学研究所論集」吉川弘文館 昭和50年
- 註4 沼沢豊「東寺山石神遺跡」千葉県文化財センター 昭和52年
- 註5 小久保徹「上越新幹線埋蔵文化財発掘調査報告」前山2号墳 埼玉県教育委員会 昭和53年
- 註6 筆者実見
- 註7 「埼玉稻荷山古墳」埼玉県教育委員会 昭和55年
- 註8 金井琢良一「諏訪山古墳群」東洋大学考古学研究会発掘調査報告第一集 昭和45年
- 註9 小泉 功「下小坂古墳群」川越市史第一巻 原始・古代編 昭和47年
- 註10 註9と同じ
- 註11 中川徳治他「春日部市内牧塚内4号墳の調査」第11回遺跡発掘調査報告会発表要旨 埼玉考古学会 昭和47年
- 註12 斉藤国夫「大日塚古墳」埼玉県行田市教育委員会 昭和53年
- 註13 尾崎喜佐雄編「前橋市史」前橋市 昭和46年
- 註14 鹿口 宏他「山王寺大財塚古墳」昭和52年
- 註15 大場磐雄他「常陸鏡塚」国学院大学考古学研究室報告第1冊 昭和31年
- 註16 斎木 勝「新皇塚古墳」市原市菊間遺跡 昭和49年
- 註17 斎田常惠他「日吉加瀬古墳」三田史学会 昭和28年
- 註18 小林謙一「弓矢と甲冑の変遷」古代史発掘第6巻 講談社 昭和50年
- 註19 永永雅雄他「和泉黄金塚古墳」日本考古学報告第5冊 昭和29年
- 註20 森本六爾「川柳將軍塚の研究」昭和4年
- 註21 菅谷浩之他「青柳古墳群発掘調査報告書」埼玉県遺跡調査会 昭和48年
- 註22 古瀬清秀「古墳出土の鉢の形態の変遷とその役割」「考古論集」松崎寿和先生退官記念事業会編 昭和52年
- 註23 註22と同じ
- 註24 斉藤忠他「弘法山古墳」松本市教育委員会 昭和53年
- 註25 小林行雄「中期古墳時代文化とその伝播」「古墳時代の研究」所収 青木書店 昭和36年
- 註26 亀井正道「建鉢山」吉川弘文館 昭和41年
- 註27 増田逸朗「千光寺」埼玉県遺跡調査会 昭和50年
- 註28 小久保徹「下田・諏訪」埼玉県遺跡発掘調査報告書第21集 埼玉県教育委員会 昭和54年
- 註29 増田逸朗他「甘粕山」埼玉県遺跡発掘調査報告書第30集 埼玉県教育委員会 昭和55年
- 註30 駒宮史朗「雷電下・飯玉東」埼玉県遺跡発掘調査報告書第22集 埼玉県教育委員会 昭和54年
- 註31 「本庄市史資料編」本庄市 昭和51年
- 註32 増田逸朗他「塚本山古墳群」埼玉県遺跡発掘調査報告第10集 埼玉県教育委員会 昭和52年
- 註33 註31と同じ
- 註34 菅谷浩之、駒宮史朗「児玉町美里村生野山古墳群発掘調査概要」第6回遺跡発掘調査報告会要旨 昭和48年
- 註35 柳田敏司「埼玉県児玉郡生野山古墳発掘調査概報」上代文化第34号 昭和39年
- 註36 坂本和俊、岡本幸男「神明ヶ谷戸遺跡の調査」第13回遺跡発掘調査報告会要旨 昭和55年
- 註37 佐藤忠雄「後櫻沢遺跡群」(石蔵A、B遺跡の調査)第12回遺跡発掘調査報告会要旨 昭和54年
- 註38 村井嵩雄「武藏国川田谷熊野神社境内所在の古墳」「考古学雑誌41-3」昭和31年
- 註39 梅沢重昭 群馬県地域における初期古墳の成立(1) 群馬県史研究(2) 群馬県史編さん室 昭和50年

## 4 歴史時代の遺構と遺物について

### (1) 遺構について

清水谷、安光寺古墳群、北坂遺跡で検出された歴史時代に属する住居跡はそれぞれ22、1、15軒の計38軒で、清水谷遺跡ではほかに古墳時代末～真間期の住居跡（18号住居跡）がある。主体となる時期は国分期であるが、北坂遺跡ではほぼ9世紀代を中心とし、清水谷遺跡ではこれに先行、並行し、さらに後続して営まれた集落で先の18号住居跡を最古とし10世紀後半までの時期を与えることができた。

清水谷遺跡については先に小結でふれたので、ここでは北坂遺跡の住居跡、建物跡群を中心にその変遷をたどり問題点を整理し、本遺跡の性格についてふれてみたい。

北坂遺跡の住居跡群は台地南緩斜面の等高線（81～84m）に沿って15軒検出された（第76図）。各住居跡とも軸は方位に合い、辺をそろえ統一性が窺われるが重複するケースが多く、単独で検出された住居跡の多い清水谷遺跡とは対称的である。遺物の観察によると時期的には大きな隔たりはなく12世紀をこえる時間差は認められない。そしてその分布状態からA～Dの4グループに分けることができる（第160図）。

Aグループ（1、2、7、8号住）は集落西端に位置し、それそれが重複している。2→1号7→8号の前後関係を把握している。2、7号住は長軸、短辺をそろえて並び北辺にカマドをもつが、1、8号住は各々東西方向に重複し、東辺にカマドをもつ。

Bグループ（3、9号住）はAグループ同様等高線上下方向に隣接する。9号住は8号建物跡と重複するが、住居跡相互が複合しない唯一のグループである。

Cグループ（10～15号住）は10、11、12、15号住と13、14号住の2群からなり、各跡はすべて重複する。この重複は大きく切り合うことなく辺を接する程度（10～12号住）、あるいはカマド煙道部がかかる程度（13、14号住）で多分に旧い住居跡の存在を意識して構築したものと考えられ、3ないし4段階にわたる時間差は大きな幅をもたないことを示唆している。12号住の貼床からも15号住との近時性が窺われる。各住居跡の前後関係は11→10→12号、15→12号、13→14号で新しくなるにつれ谷側に降りている。しかし出土遺物からはこの前後関係を完全にフォローできない。特に13、14号住に関しては調査時に確認した上記の前後関係を出土遺物は積極的に肯定しない。

Dグループ（4～6号住）は斜面最下部に位置しておりA～Cグループからは孤立している。4→5、6号の前後関係を掴んでいる。北坂遺跡では南側が削平されているため集落の南限を把握することができなかったが、同じ等高線ちかくで東側では住居跡が検出されず、また集落を画する溝が24—1Sグリッドで途切れていることから本グループが南限にちかいことが推測される。

これらの4グループのうちA、Dグループでは東西方向、すなわち等高線に沿って、Cグループの2群では南北方向の住居跡の動きを読みとることができる。各グループ間には適当な間隔が保たれている。A～Cグループにおける住居跡の分布状態およびCグループでみられた山側から谷側への移動からすると標高84.5mの等高線より上部、すなわち台地頂部への住居跡進出には強い規制が

存在したようで、次の建物跡が時期を降るに従い谷側から頂部へと進出しているのと対称的である。

このようなせまい範囲での住居跡群の変遷、展開の状況は、その占地について強い規制が存在したことと物語っており、家地の選定にあたってはかなり限定（家地の固定化）されていたことを想定することが可能であろう。

掘立柱形式の建物跡は1～8、3A号の計9棟が検出された。うち2棟（4、5号建物跡）は総柱形式で倉庫と考えられる。その分布は先に述べたように住居跡が標高84.5m以下の中斜面に分布しているのに対し、建物跡は8号建物跡を除き、先の等高線よりも上に、位置し、緩斜面上部から頂部に展開している。主軸方向、重複関係、柱掘形の差などから次の3段階にわたる変遷が想定できる（第160図）。

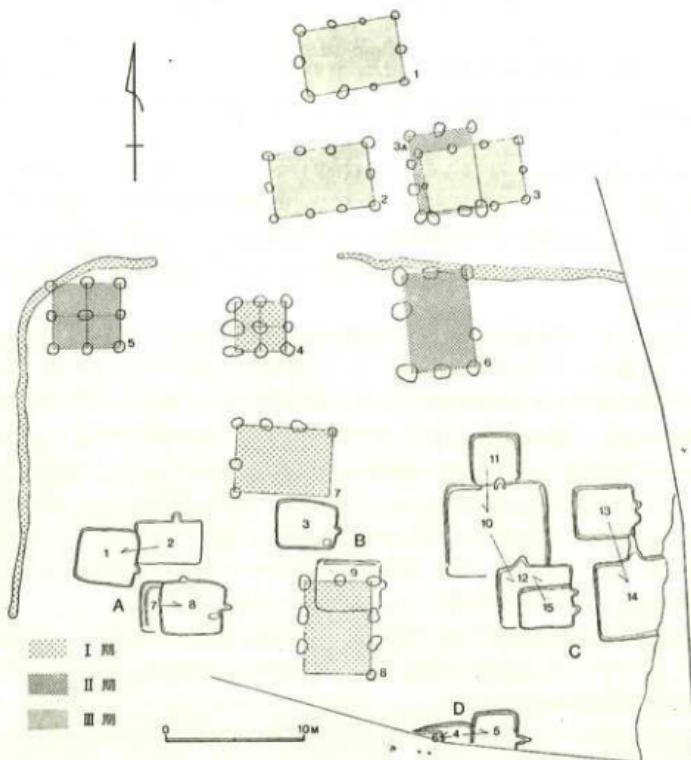
Ⅰ期 集落の北、西側に掘られている溝が集落域を画するという意味で『環濠』的な機能をもっていたことを想定し、この内側に配された4、7、8号建物跡をⅠ期とする。4号跡は2×2間の倉庫、7号跡は東西棟、8号跡は南北棟とともに3×2間同規模である。次のⅡ、Ⅲ期では棟方向に統一性が認められ、主軸がほぼ直交する7、8号建物跡については構築時期の差も考えられる。溝から出土した須恵器坏（第159図6）から本期は9世紀前葉を含む時期にあることが推定される。

Ⅱ期 Ⅰ期の溝を掘り込んで構築された5、6号跡および6号跡と主軸をそろえた3A号跡が相当する。5号跡は2×2間の倉庫。柱間は8尺等間でⅠ期の4号跡より2尺規模を増し、柱掘形も整っている。3A、6号跡は3×2間、南北棟で主軸はN—4°—Wにそろう。柱間は3A号跡が桁行6.5尺梁行7.5尺、6号跡が8尺等間、ともに柱掘形が大きく不揃いである。

Ⅲ期 3A号跡を廃して構築された3号跡およびこれと規模、棟方向をそろえた1、2号跡が相当する。すべて3×2間、柱間は8尺等間、東西棟。柱掘形がⅠ、Ⅱ期より小形となり柱筋がきれいにとおるのが本期の特徴である。

Ⅰ、Ⅱ期は遺物を欠くため時期を詳らかにし得ないがⅠ期が住居跡群の古期に相当するため、Ⅱ、Ⅲ期も集落と同様の変遷を経たと仮定し、Ⅰ期に後続する9世紀中葉をあてておきたい。Ⅰ～Ⅲ期にわたる建物、倉庫跡は重複が少なく、適当な空間をもった配置状況からするとⅡ、Ⅲ期ではそれぞれ前段階の建物跡の廃棄を前提とせず、むしろⅢ期では3A号跡を除き、他の数棟も機能していく蓋然性が強い。

上記のような建物、倉庫群を併せもつ北坂遺跡は他の該期の集落とは様相を異にするもの（註1）その性格を考察するとき、当地一帯に比定されている那珂郡の郡衙との関連が指摘されている東山遺跡（横川・宮崎 1980）を想起せざるにはいられない。東山遺跡は北坂遺跡の南方約700mに位置する丘陵上に立地し、平安時代の住居跡2軒、掘立柱形式の建物跡4棟が検出されており、また谷を隔てて対峙する如来堂A遺跡でもほぼ同時期の住居跡2軒、建物跡4棟が検出されている。東山遺跡の建物跡は5×3間、3×2間2棟、2×1間、すべて東西棟で、うち2×1間建物跡付近からは瓦塔（金塔、五重塔）が検出され、同跡は瓦塔を安置した持仏堂と推測されている。瓦塔と併出した土師器、須恵器から9世紀後半期が与えられ、他の建物跡群もこれに近い後続する時期が考えられており、本遺跡と時期的に大きなずれはない。横川好富氏はこれらの建物跡群にかかる主体



第160図 北坂遺跡住居跡・建物跡全測図

者について「郡衙に関係する者か、かつて、郡衙に関係していた者であり、後日、武藏武士として活躍するような階層の者」を想定している（註2）。

北坂遺跡においても上記の建物、倉庫群や、出土遺物のうち円面鏡（第133図16）、鉄製品「中」の焼印および鍵（第148図1、2）、灰釉環状把手付長頸壺等は主体者について郡衙との関係を暗示しているものと言えよう。とりわけ焼印は郡名「那珂」を表記したものと考えるのが妥当と思われる重要な（註3）。類例については寡聞にして平塚市中原上宿遺跡（小島・明石 1979）の「井」を表した例を知るのみである。ほかに焼印そのものではないが入間郡衙跡と推定されている若葉台遺跡E地点で「王」と焼印の押された木製の皿が出土している（斎藤 1980）。前者は国分期前半（註4）、後者は9世紀中葉に比定されている。また清水谷遺跡17号住居跡の薬壺（第41図6）底にヘラ書きされた「中」も焼印との関連から興味ぶかい。

那珂郡は和名抄によると4郷（那珂郷、中沢郷、水保郷、弘紀郷）から成る下郡で美里村を中心

とし（註5）いわゆる児玉三山（諫訪山、生野山、大久保山）とこれに接された地域に広がる身駒川、志戸川扇状地および松久丘陵付近が郡域と推定されているが、その面積は武藏国21郡中、横見郡を別とすると県北端の賀美郡と並んで狭い。しかし、この地域には条里跡の残存からも知れるように古くから身駒川、志戸川系を利用した水田開拓が進み、生産性の高い良田が広がっていたと思われ、また城内には大仏廬寺跡、式内社ミカ神社があり、律令体制下にくみ込まれる以前から、周辺地域に多数存在する古墳群が示唆するように、水田經營を基盤とし、後に那珂郡として統括された政治的なまとまりが存在した事が想定できる。

那珂郡の郡衙の所在が推定されている美里村古郡地区は北坂遺跡の西北方約800mにあたり、本遺跡は東山遺跡、甘粕山遺跡群、沼下遺跡（註6）と同様に那珂郡郡衙と有機的なつながりをもった集団の聚落と考えることができ、狹小な領地にあっては豊かな良田城をさけて丘陵上に占地したものと思われる。

(中島 宏)

## (2) 出土土器について

清水谷、北坂遺跡で出土した土器の編年的位置の概要についてはⅢ—3および前節でふれるところがあり、清水谷遺跡は7世紀末～10世紀後半、北坂遺跡は9世紀中葉を中心とする時期をそれぞれ与えてきた。うち前者では国分期後半が主体となっていた。以下では両遺跡で重なる時期もあるが遺跡ごとに国分期の主な土器について分類し、他遺跡の資料を参照して上記の年代観を確認したい。

### 清水谷遺跡

#### 土器器形

- a 体部の立ち上がりが直線的で、底部が平底風にへら削りされたもの（14—4、28—1）
- b 体部は丸味をもって立ち上がる。体部、底部ともぶ厚なつくり（28—3）

#### 土器器形

- I 台付窓、口縁部器厚やや厚いが、「コ」の字状に縁を保つもの（39—1）
- II 小形窓、ロクロ成形により、胴下半には縦へら削りの加えられたもの（49—3）
- III 器厚が厚く、最大径を胴上半にもち、胴部に斜、縦位のへら削りが施されたもの
- a 口縁の外反が強く、「く」の字状を呈するもの（19—4、39—3）
- b 口縁の外反がゆるいもの（21—2、26—3、49—6・7）
- IV ロクロ成形による、器厚が厚く口縁部が「く」の字状に外反し、胴が張るもので、胴下半には縦位のへら削りが施されたもの（19—5、30—5）

#### 土器器形

- I 口唇部は平坦で、口縁部は直立気味。胴部は砲弾形を呈し、下半には窓IV類と同様な削りが施されたもの（23—8～14）
  - II 口縁部が内湾し、胴部が球形を呈するもの。鶴は高い（47—3）
- 須恵器窓（酸化焰焼成品を含む）
- 口径に対する底径の法量比が

- I 0.5以上のもの (14-7・8, 51-2)
- II 0.5前後のもの (116, 28-9)
- III 0.5以下のもの
  - a 器高が高く、底部あるいは体部下半の器厚が厚く、体部に綫をもつもの (10-5, 21-3), 口唇部が外反するもの (26-10・11)
  - b 器厚がうすく、器高が低いもの (10-3, 45-5)
- IV 高台付杯 (土師器風のものも含む)
  - a 法量が大きく、体部は内湾して立ち上がり、口唇部が外反するもの (39-5・6・8)
  - b 高台が高く、体部が直線的に開くもの (10-7, 30-3・4)
  - c 高台は低く、幅広、粗雑なつくりで体部が内湾し口唇部がわずかに外反するもの。体部下半が肥厚し、底部がぶ厚となるのも特徴的である (10-6, 26-12, 23-1, 46-3)
  - d 高台は低く、体部が内湾して丸味をもつもの (45-3)

#### 北坂遺跡

##### 土師器壺

- a 口縁部ヨコナデ、底部くラ削りされたもので、丸底を呈するもの (146-7・11)
- b 底部ヘラ削りにより平底風に仕上げられたもの (140-1, 146-3)
- c b類のうち、口縁部にゆるいくびれをもつもの (142-2)
- d 平底風で体部、底部ともぶ厚なもの (135-8)

##### 土師器甕

- I 台付甕、口縁部「コ」の字状、胴部球形を呈し、脚部が「ハ」の字状に開くもの (127-1, 131-1)
- II 脇部が斜、縦方向のヘラ削りにより面取りされ薄くなっているもの
  - a 口縁部のゆるやかに外反し「弓」状を呈するもの (142-5・16, 144-5, 146-24)
  - b 「コ」の字状口縁を呈するもの (127-2・3, 133-3・4, 139-4)

##### 須恵器壺

- I 底部の切り離しが回転糸切りによるもの
  - a 回転糸切り後、周縁部回転ヘラ削りされたもの (142-9, 146-29, 159-6)
  - b 体部立ち上がりが急で器高の高いもの (135-5)
  - c 口径に対する底径の法量比が0.5を大きくこえるもの (135-4・12, 144-10・12, 146-30・32)
  - d 法量比が0.5前後のもの (127-1, 131-2, 135-4・13)
- II 高台付杯
  - a 壺部は壺 I b類にちかく、器高が高いもの (147-36)
  - b 器高が高く、体部やや内湾して立ち上がり、口唇部が外反するもの (135-14・15)

##### 須恵器皿

口唇部が水平にちかく外反する。器高は2cm前後、口径に対する底径の法量比は、

0.38ちかくでまとまる (135—17, 139—9, 144—16)

須恵器蓋

- a 扁平、あるいは擬宝珠状のつまみをもつもの (129—4, 135—9, 146—26)
- b 高台状のつまみをもつもの (159—2)
- c 宝珠状のつまみをもち、径6.9cmと小形で坏を対称としないもの (139—5)

須恵器甕、鉢

- a 甕を一括する。頭部が細いもの (139—2) と太いもの (147—40・41) がある。
- b 脊部が直線的で瓶と考えられるもの (123—4)
- c 鉢形土器で脇部が張るもの (127—12, 139—11, 140—14, 147—42)

灰釉陶器

- a 坏 (129—7)
- b 短頸壺 (140—17)
- c 長頸壺 (144—19, 20) がある。

他に円面鏡 (133—16)、羽釜様の須恵器 (131—8) がある。

国分期の土器の編年について、県内では1970年代前半に水深遺跡 (中島、小林ほか 1972)、山田遺跡 (谷井 1973)、荒神脇・熊野遺跡 (中島、野部 1973)、岩の上遺跡 (野部ほか 1973)などの当該期大集落の報告が相づぎ、さらに須恵器窯跡の報告—新久窯跡 (坂詰 1971)、前内出窯跡 (小川、高橋ほか 1974) があり、これらをもとにまとめられた高橋一夫氏の「国分期の細分、編年試論」(高橋 1975) が大きな拠となって研究が進められてきた。翌1976年には谷井赳氏が「鶴ヶ丘」報告 (谷井 1976) の中に編年観を示され、山田遺跡の資料を中心に8世紀中葉から10世紀中葉までの須恵器坏の変遷図を掲げられた。また1977年には現在、国分期終末の重要な位置を占めている田中前遺跡が市川修氏により報告された (市川 1977)。その後、各地域で資料集成をした編年表の提示が続いている (神奈川考古同人会土器研究グループ 1978、西脇、山口 1980、早稲田大学本庄校他文化財調査室編 1980、駒宮 1980)。

さて、これらの研究において、その実年代の策定にあたっては、東金子窯跡群 (註7) を構成する各窯跡の操業時期の認識が重要な位置を占めてきたことは言うまでもない。加えて平城京跡等での調査成果をとり入れた灰釉陶器の年代観をこれに援用してきた。

東金子窯跡群新久支群は武藏國分僧寺塔跡から同窓の瓦が検出されており、「統日本後期」にある承和2年 (835) の塔の神火焼失記と承和12年3月条にある前男糸大領壬生吉志福正の塔再建発願記とからさせて併焼された須恵器坏を9世紀後期に位置づけるのが通説となっている (註8)。

そして先に清水谷遺跡の小結でふれたが現在では新久窯跡群出土土器について3段階にわたる変遷が指摘されている (谷井 1976、星野 1977、服部、福田 1979)。すなわち第Ⅰ期は先の9世紀後期に比定されているA地点1号、2号窯出土土器が相当し、第Ⅱ期は從来1期に一括されていたC地点1号窯、D地点1号、3号窯出土土器資料を分離したもので、坏の口径に対する底径の法量比の減少傾向から第Ⅰ期の後続する9世紀 $\frac{1}{4}$ 期に位置づけられている。第Ⅱ期はE地点住居跡およびF

地点住居跡（駒宮 1975）（註9）出土土器が相当する。壺の底径は小径化が進み口径の約8割が多く、器厚のぶ厚な甕も特徴的である。谷井赳氏は本段階を10世紀 $\frac{1}{4}$ 期に位置づけている。

また東金子窯跡群前内支群は、壺の底部切り離し技法、二次整形の変遷などの研究から、真間期終末以降、新久窯跡第Ⅰ期以前の年代が与えられている。

これらをふまえた国分期前半の土器の変遷段階および年代観については細部で研究者により見解を異にする部分（註10）もあるが、大筋では一致している。しかし、その終末期については先述した灰釉陶器編年観に対し、樋崎彰一氏の灰釉陶器編年を準拠して12世紀中頃（浅野 1980）、12世紀初頭（中村 1980）まで下げる案が最近提示された。樋崎氏の灰釉陶器編年に疑問が出されて久しいが、早晚、決着を見よう。ここでは前者の編年観に依り、清水谷、北坂両遺跡の土器群の編年的位置について検討してみたい。

まず主体となる時期が先行する北坂遺跡についてみると、大旨、次の2時期にわたる変遷を認めることができる。Ⅰ期は須恵器壺Ⅰa、Ⅰc類をもち、前内出1号窯にちかいⅠa類（底部糸切り後ヘラ削り）から9世紀前葉に、またⅠc類（糸切りの今まで、口径に対する底径比が大なるもの）の存在から、その $\frac{1}{4}$ 期前葉に位置づけられる。Ⅰa類を出土した11号12号、14号住居跡、溝跡が相当するが、他にⅠa類を欠くが、これらと重複し、先行することが確認されている10号、13号、15号住居跡、すなわち前節でCグループとした住居跡群、およびこれらとⅠc類が共通する2号、7号住居跡が相当する。Cグループ住居跡群では3段階にわたる重複があり上記の年代に多少の幅をもたせる必要があろう。2号、13号住居跡出土の灰釉陶器はK—14号窯式で本段階の年代と合致する。

Ⅱ期は須恵器壺Ⅱd類（糸切りの今まで、底径が口径の $\frac{1}{2}$ 前後のもの）から新久窯跡第Ⅰ期ちかくに比定されるが、前段階の壺Ⅰc類にちかいものもあり、かなり時間的に近接しよう。1号、3号、5号、8号、9号住居跡が相当するⅡ期に多く見られた土師器壺a、b類はほとんど消失し、甕はⅡa類に対し、口縁部が「コ」の字状を呈するⅡb類が出現する。山田遺跡10、29、30号住居跡、岩の上遺跡（野部他 1973）の大半の住居跡、荒神脇遺跡（中島、小林 1974）4、10号住居跡等が本期に相当する。

清水谷遺跡出土土器についてはⅢ—3で住居跡ごとに北坂遺跡に先行し、並行、後続する以下の7段階に編年した。

第Ⅰ期は18号住居跡が相当し、かえりをもつ須恵器蓋（43—12）から7世紀終末に位置づけた。

第Ⅱ期は8号、22号住居跡が相当する。両跡とも遺物が少なく、真間期の大枠でとらえておく。

第Ⅲ期は北坂Ⅰ期にあたり、17号住居跡が相当する。Ⅱ期との間にはブランクがある。

第Ⅳ期は3号住居跡、建物跡が相当し、須恵器壺Ⅰ類から北坂Ⅱ期にちかい時期に比定される。

第Ⅴ期は4号、10号住居跡が相当し、新久窯跡第Ⅱ期にちかい時期に比定される。

第Ⅵ期は16号住居跡が相当し、土師器甕Ⅲa類からⅥ期に後続する時期が与えられるが、しっかりとした甕Ⅲ類が併出していることから前段階に近接しよう。

第Ⅶ期は清水谷遺跡で最も多くの住居跡が存在した時期で1号、5～7号、9号、11号、13号、16号、19号、20号、23号住居跡が相当する。須恵器壺Ⅲ類、土師器甕Ⅲb、Ⅳ類および羽釜に

特徴づけられる時期で、新久窯跡第Ⅲ期～田中前遺跡Ⅳ段階に位置づけておきたい。

以上、北坂、清水谷遺跡で検出された遺構を段階ごとに整理すると次の如くである。

	700	800	850		900		950
清水谷遺跡	18	{ 8, 22 }		17	3, 捩立	4, 10	16
北坂遺跡			2, 7, 10 11, 12, 13 14, 15	1, 3, 5 8, 9			1, 5, 6, 7, 9, 11, 13, 16, 19, 20, 23

(中島 宏)

註1 荒神脇遺跡（中島、小林 1973）で本遺跡4、5号倉庫跡に類似する2×2間、総柱の倉庫跡が検出されている。

註2 横川好富 1980 「埼玉県美里村出土の瓦塔」 考古学雑誌 第66巻 第2号

註3 「中」については那珂郡を構成する中沢郷を指すとも、郷名を記した文字瓦の存在\* から考えられるが、本例の場合、焼印という機能からしても郡名を表記したものと考えるので妥当と思われる。同様に郡名を記した文字瓦例に轄羅→原\*\*がある。

\* 坂詰秀一 1971 「武藏新久窯跡」

\*\* 滝口 宏 1966 「武藏国分寺図譜」 国分寺市教育委員会

註4 調査者明石新氏の御教示による。

註5 増田逸朗氏は4郷について、那珂郷を大仙から猪又周辺地区、中沢郷を山崎山丘陵周辺、水保郷を塚本山古墳群周辺、弘記郷を広木大町古墳群周辺に想定している。

増田逸朗 1977 「塚本山古墳群」 埼玉県遺跡発掘調査報告書 第10集

註6 昭和51年、関越高速道路建設に伴い、埼玉県教育委員会が調査した。（6ページ参照）

註7 入間市内新久、小谷田、仏子地区に広がる八津池窯跡、柿ノ木（水排）窯跡、谷窯窯跡、八坂前窯跡新久窯跡、前内出窯跡、前堀川窯跡、大沢窯跡\*などの各支群を総称する。

\* 1980 分布調査により筆者ら確認。

註8 星野達雄氏は新久窯跡の操業時期を9世紀後半（中頃）とする説に対し、同窯から「壬生吉志福正と最も関係の深かるべき男衣部銘瓦が出土していないのであるから、国分寺塔址出土瓦と同範の瓦を出土しているからといって、ただちに承和年間頃の操業とすることはできない。」（星野 1977）と国分寺塔の焼失を「類聚国史」に記載された弘仁9年（818）の東国地震によると想定し、新久A、E地点窯跡を9世紀前（～中）窯頭に位置づけている。

註9 坂詰氏調査の「新久窯跡群」に「F地点」は存在しない。（78ページ参照・註2）

註10 新久窯跡の操業時期については、註7の見解があり、前内出窯跡については、報告者は1号窯を8世紀終末～9世紀初頭、9世紀前半、2号窯を8世紀後半としているが、両者は大きな型式差を欠くとし同段階に位置づける見解もある。（谷井 1976）

### 参考文献

- 浅野 晴樹 1980 「埼玉県内出土の平安末期の施釉陶器」 埼玉県立歴史資料館 研究紀要 第2号
- 市川 修 1977 「田中前遺跡」 埼玉県遺跡調査会報告書 第32集
- 井上 雄 1979 「7世紀の环形土器について」 埼玉県立博物館紀要 6
- 小川良祐・高橋一夫 1974 「前内出窯跡発掘調査報告書」 埼玉県遺跡調査会報告 第24集
- 神奈川考古同人会土器研究グループ 1978 「神奈川県内における古墳時代後期から平安時代土器編年試案」 神奈川考古 第5号
- 栗原文藏・野部徳秋 1973 「岩の上・堆子山」 埼玉県遺跡発掘調査報告 第16集

- 小久保 健 1979 「下田・諏訪」 埼玉県遺跡発掘調査報告書 第21集
- 駒宮 伸朗 1973 「枇杷橋遺跡発掘調査報告書」 埼玉県遺跡調査会報告 第20集  
1975 「入間市新久見の土器」 埼玉研究 第26号  
1976 「本郷東・愛宕」 埼玉県遺跡発掘調査報告書 第7集  
1979 「雷電下・熊玉東」 埼玉県遺跡発掘調査報告書 第22集
- 坂詰 秀一 1971 「武藏新久跡」  
1977 「武藏・虫草山窯跡」 堀山村教育委員会
- 笠森 健一 1978 「川崎遺跡(第3次)・長宮遺跡」 上福岡市教育委員会
- 坂本 和俊 1976 「大御堂捨下・女闇遺跡発掘調査報告」 埼玉県遺跡調査会報告 第28集
- 高橋 敦・会田 明 1980 「栗谷ヶ遺跡第2地点」 富士見市中央遺跡群 Ⅱ
- 高橋 一夫 1975 「国分期土器の細分・編年試論」 埼玉考古13・14号
- 滝口 宏 1966 「武藏国分寺国譜」 国分寺市教育委員会
- 谷井 鮎・今泉泰之 1974 「南大塚・中組・鶴ヶ丘・花影」 埼玉県遺跡発掘調査報告書 第3集
- 谷井 鮎 1973 「山田遺跡・相撲場遺跡発掘調査報告書」 埼玉県遺跡調査会報告 第18集  
1976 「鶴ヶ丘」 埼玉県遺跡発掘調査報告書 第8集
- 谷本 銳次 1968 「No.87遺跡」 多摩ニュータウン遺跡調査報告 V
- 中島利治・小林重義 1972 「水深」 埼玉県遺跡調査会報告 第13集  
1973 「下新田遺跡・荒神脇遺跡・熊野遺跡」 埼玉県遺跡調査会報告 第22集
- 中村 倉司 1980 「頬蘇神社前遺跡」 埼玉県遺跡調査会報告 第39集
- 植崎 彰一 1974 「都とむらの暮らし」 古代史発掘 第10巻  
1976 「白壺」 日本陶器全集6
- 成瀬 正和 1979 「ハケ遺跡C地区」 上福岡市教育委員会
- 西脇俊郎・山口辰一 1980 「武藏國府と国分寺」 文化財の保護 12号
- 服部 敬史 1975 「下寺田・要石遺跡」 八王子市下寺田遺跡調査会
- 服部敬史・福田健司 1979 「南多摩窯址群出土の須恵器とその編年」 神奈川考古 第6号
- 星野 道雄 1977 「いわゆる「国分式土器」について」 原始古代社会研究
- 増田 逸朗 1977 「塚本山古墳群」 埼玉県遺跡発掘調査報告書 第10集
- 宮崎由利江 1978 「中堀・耕安地・久城前」 埼玉県遺跡発掘調査報告書 第15集  
1979 「畠中遺跡」 児玉郡美里村畠中遺跡調査会
- 横川好富・宮崎朝雄 1980 「甘粕山」 埼玉県遺跡発掘調査報告書 第30集
- 横川 好富 1980 「埼玉県美里村出土の瓦塔」 考古学雑誌 第66巻 第2号
- 早稲田大学本庄校地文化財調査室編 1980 「大久保山」
- 小野 文雄 1971 「埼玉県の歴史」
- 小島弘義・明石 新はか 1979 「中原上宿遺跡調査概報」 平塙市中原上宿遺跡調査会
- 齊藤 稔はか 1980 「若葉台遺跡群 第二次発掘調査概報」 鶴ヶ島町教育委員会

### (3) 北坂遺跡の鉄器について

北坂遺跡は、堅穴住居跡15軒、掘立柱群9棟、堀造構等から成り、遺物としては土器が大部分ではあるが、これに加えて幾つかの注目すべき金属製品が出土している。

先ず、13号住居跡からは、「く」の字状に曲線を描き完形品である鍵状鉄製品、「中」の字に打ち抜かれた板金に長い柄が付く烙印状鉄製品が共に出土している。

他からは、飛燕形鉄鎌、鉄釘、刀子、鑿、青銅製鉛等が検出され、比較的豊富な品々が目に付く。飛燕形鉄鎌に関しては、一集落内からの出土数は少ないが、国分期には間々見受けられる一鉄鎌

である。

本品は、飛燕形に通有な大形品で範被も長く、鋒刃部も鋭く実用的で、鎬もしっかりしており、形態的には三角形式に近いものとも考えられる。

一般的に、該期大形鉄鎌は、儀器化された非実用的な物として解釈されている向きもあるが、当遺跡の鎌に関しては、前述の観察の通り十分実用に耐えるものである。

鑿、又は整頭式鉄鎌と考えられるが、柄の一部が欠損しているため詳細は不明な点が多い。

該期の平整出土例としては、加須市水深遺跡が知られている。全長15cmで、身の長さ11.3cmを測り茎を明瞭に造り出しており、木柄のための袋状金具が残存している。

身は、方形の棒状を呈し僅かに刃部で幅広となる形態を示す。尚、住居跡には、銅製巡方が伴出している。

ここで、水深遺跡と本品とを比較してみると、先づ茎の形状が異なり、袋状金具の有無に相違点を見い出せる。

茎に関しては、一部欠損と見て、袋状金具も同様に考えたとしても、身の長さがやや短い様である。

いずれにしても、水深と本坂遺跡の例では、多くの点で違いが指摘され、むしろ、整頭式鉄鎌とすることも可能であるが、その形態から全く鑿としての機能を否定する事も出来まい。

特に、国分期の工具は、家屋構造の変化と相伴って出現すべきものであり、今後注目されるべきである。

さて、国分期の住居跡は、鬼高、真間期の竪穴住居跡が比較的整方形で、四本柱穴を基本とするのに対し、小形不整方形ないし、小形不整長方形を呈し、しばしば柱穴が発見されないものが見られる。

これらの諸特徴から、国分期の住居形態は、今までの様に、4本の掘立柱を基本とし上屋を支えるので無く、竪穴を取り巻く土台枠組構造に接続する柱でもって上屋を支えたものと考えられる。

よって、竪穴内のみが住居空間で無いため、厨房的機能の竪穴は整方形を呈する必要は無く、ここに4本柱穴が見られないのは当然の事である。

又、竪穴壁外周辺に掘立柱の柱穴が検出されていない事実は、壁外に土台を想定する家屋構造の傍証にもなろう。

この様な事実を踏まえると、国分期における住居空間を単なる縮少化として、竪穴構造によってのみ解釈するにはいささか不合理である。

今後、真間、国分期を通して、竪穴構造の変遷を究明する事は、とりもなおさず、枠組上屋構造の普及発展史であり、これと相伴って当然工具の出現発達史もある。よって、所謂大工道具としての鑿の出土は、家屋構造上極めて重要な意義を有するものである。

さて、ここで鍵状鉄製品について少し詳細に述べておく。

形態は、柄に木質部を残し、鋸角に曲がり、先端が「コ」の字状を呈している。この形態から想定し得る機能としては、先端で何かを引掛ける用途と考えられる。

これに類似した遺物としては、東京都栗原遺跡の品が考えられるが、先端が直線的である。しかし、時期的には栗原遺跡の場合も国分期に属し、本遺跡と大まかな年代は符合する。

しかば、当遺跡の鍵形鉄製品はどの様な機能を有するものであろうか。

ここでは一応、現在でも土蔵等の引戸に見られる「落とし棧」との関係で捉えてみたい。

構造に関しては、引戸に小穴を有しここを鍵の差し込み口とし、戸を閉める場合、道に小穴を設け、ここに「棧」が落ちる仕掛けとなり鍵が掛った状態になる。

そして、この落ちた棧を引戸小穴から引掛け、引き上げる機能として、先端が鉤状を呈するものと理解しておきたい。

勿論、棧を引き上げる時に、力学的にも鍵は鋭角を成していた方が有利であり、柄木質部の握りもスムースに解釈出来る。

又、これに加え、柄端部の袋状金具に付随する環状鎖も、貴重な本品を保管する上で何れかに懸ける機能を有したものと考えられる。

よって、本遺跡では、豎穴群より斜面上位に倉庫と考えられる総柱建物群も存在する事であり、この鉄製品を倉庫の引戸に関連する鍵として理解しておく。

「中」の烙印状鉄製品は、前者鍵と同一住居跡から出土している事は注目に値する。

先ず、形状については図の通りであるが、その製作手順としては、鉄棒を敲き伸ばし、中央「中」の字付近を薄く平坦に仕上げ、さらに柄を折り曲げ、中の部分は整で打ち抜いており、仕上げの研磨は見られず、鑿の刃痕が残されている。

さらに、保存状態に関しては、注目すべき事実がある。

これは、柄端部から4.5cm程が鍛造にも拘わらず鋒による剥離が目立たず、あたかも放棄された時点で外気と遮断すべく長く木質柄が付いていた感を受ける。

以上の観察が事実であるとすれば、「中」部分より6cm程間隔を置いて木質柄が想定され、結論から言えば、烙印としての機能を十分果す事が、その復原した形態からも推測出来る。

又、「中」の字は、国分寺出土の文字瓦や、隣接する清水谷遺跡出土の薬壺底部のヘラ描とも類似しており、これに加え、大和古印中の私印の中とも共通点が見られる事より、一応、文字としての表現として理解しておく。

以上の様に、文字としての本品の性格に対し、ここで考えられる事は、前述する那珂郡の文字瓦と共通する点であり、本遺跡眼下に位置する那珂郡の郡衙として推定される古凍との関連で捉えるべきである事は論を待たない。

しかし、郡印とするには、大和古印が銅製鉄造品で方縁を有する点で、本品と質、形態共に大きく異なる。又、大きさに関しては、「公式令」によれば、内印は方三寸とあり、郡印に至ってはその規定は無いが、1.8~1.3寸程度で、基本的には四文字を配した鉄造方縁形を呈している。

よって、鍛造である本品を、文字の表現のみで郡印とするにはいささか勇気を要する。

一応、ここでは、文武天皇慶雲四年、攝津、伊勢等に牧印として鉄印を給されたとの記事も見られ、又、秩父、児玉一帯を含め附近には牧の地名も存在する事でもあり、今後、郡衙関係遺跡で郡名が木製品に烙印として発見されればともかく、現段階では牧印として本品を理解しておく。

(増田逸朗)

写 真 図 版





清水谷遺跡 安光寺古墳群航空写真

図版 2

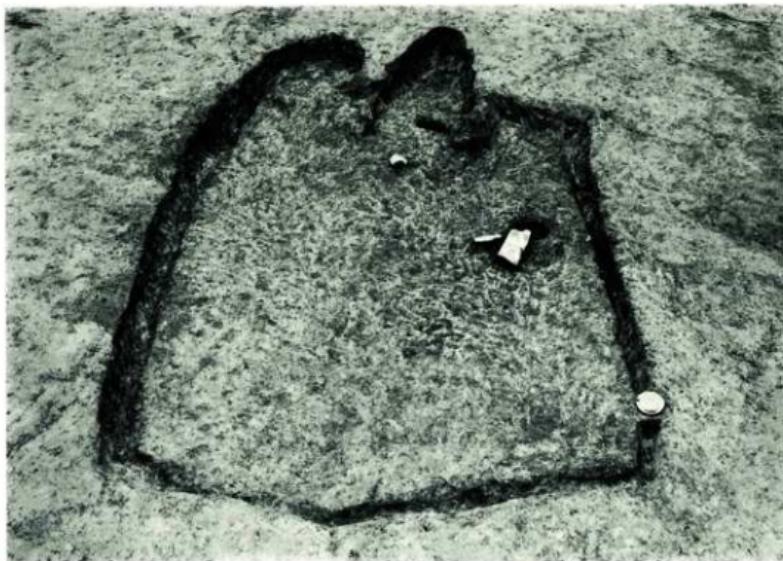


清水谷遺跡 1号墳周溝

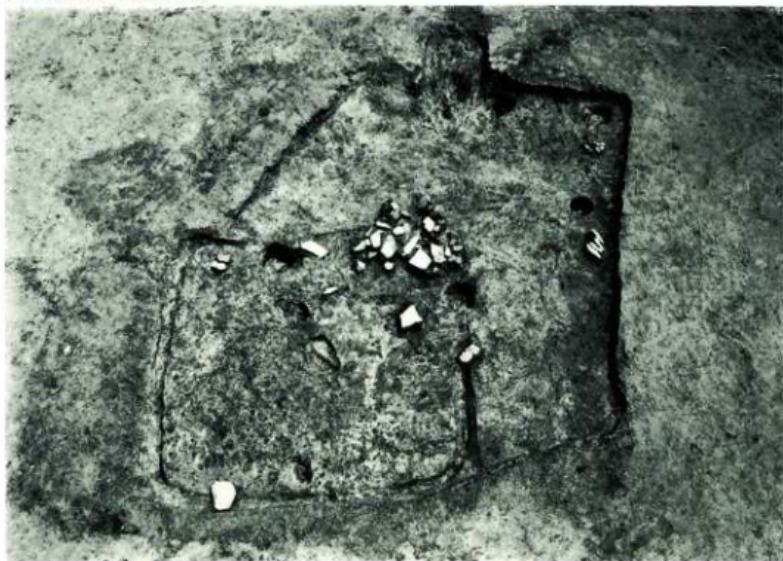


清水谷遺跡 2号住居跡

図版 3



清水谷遺跡 3号住居跡

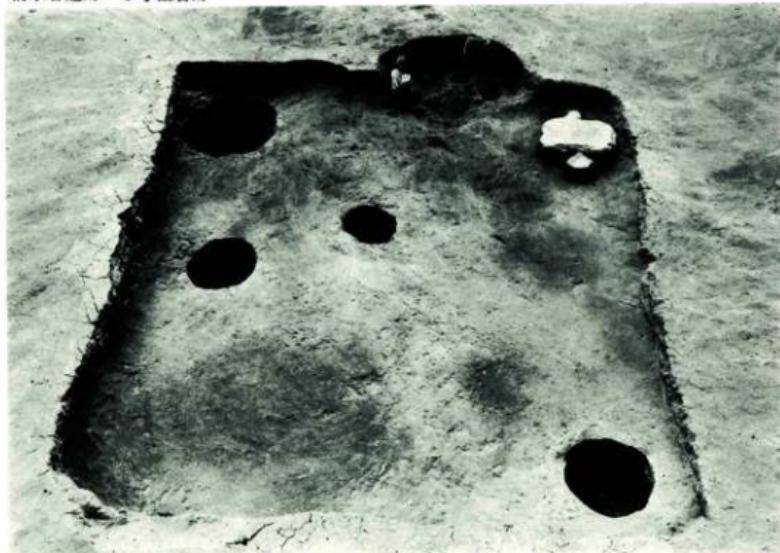


清水谷遺跡 5、6号住居跡

図版 4



清水谷遺跡 6号住居跡



清水谷遺跡 9号住居跡

図版 5



清水谷遺跡 12号住居跡

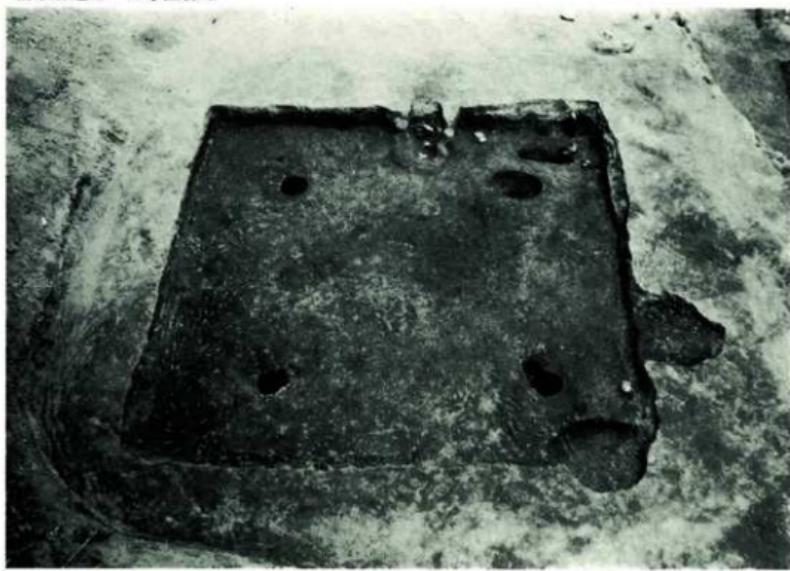


清水谷遺跡 13号住居跡

图版 6



清水谷遺跡 17号住居跡



清水谷遺跡 18号住居跡